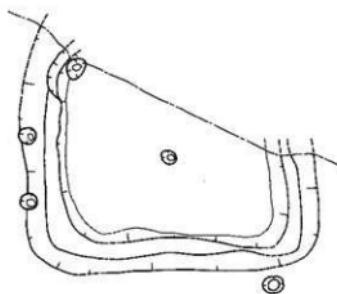


農用地総合整備事業（大隅中央区域）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

うえん そん
上苑遺跡



2004年3月
鹿児島県曾於郡有明町教育委員会

序 文

本書は農用地総合整備事業（大隅中央区域）に伴い、鹿児島県教育庁文化財課並びに鹿児島県埋蔵文化財センターの協力の下に有明町教育委員会が主体となり、平成13年度に実施した埋蔵文化財発掘調査の成果をまとめたものです。

上苑遺跡では、おもに縄文時代早期・晚期、古墳時代の良好な遺構・遺物を発見しており、有明町及び大隅地域の歴史を語る上で重要な資料と言えます。

今後、これらの成果が研究や社会教育・学校教育の場などにおいて活用され、地域の歴史・文化に対する愛着・保護・活用へとつながることを願っております。

最後になりましたが、発掘調査並びに整理作業及び報告書作成に従事していただいた方々をはじめ、多大なるご支援・ご指導をいただいた県教育庁文化財課及び県立埋蔵文化財センターの皆様に深く感謝を申し上げます。

教育長 長 重 逸 郎

例　　言

1. 本書は農用地総合整備事業（大隅中央区域）の農道整備に伴って行われた、有明町野井倉所在の上苑遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 発掘調査・整理作業ならびに報告書作成は、有明町教育委員会が緑資源公团九州支社より委託を受けて実施した。
3. 発掘調査は確認調査を平成12年1月から同年2月まで、本調査を平成13年4月から同年6月と同年8月から10月の2回に渡って実施した。整理作業ならびに報告書作成は平成15年4月から平成16年3月まで行った。
4. 発掘調査・整理作業ならびに報告書作成は、鹿児島県教育庁文化財課ならびに鹿児島県立埋蔵文化財センターの指導・支援のもと有明町教育委員会社会教育課が実施した。

発掘調査には下記の者があつた。

確認調査：倉元良文（鹿児島県教育庁文化財課）、中水　忍（有明町教育委員会　社会教育課）

本調査：堂込秀人（鹿児島県教育庁文化財課）、出口順一朗、東　徹志（有明町教育委員会　社会教育課）

整理作業ならびに報告書作成は、東が後述の補助員の協力を得て整理作業を行い、東・中水が執筆して編集を東が行った。執筆者名は目次に示して文責を明らかにしてある。

5. 調査・整理作業の過程において、以下の機関に作業委託を依頼した。
 - ・発掘作業員派遣　： 社団法人有明町シルバー人材センター
 - ・航空写真撮影　： 有限会社ふじた
 - ・自然科学分析　： パリノ・サーヴェイ株式会社
6. 発掘調査・整理作業ならびに報告書作成に際しては、以下の方々のご指導・ご支援を賜った。記して感謝を申し上げたい。

倉元良文、堂込秀人（鹿児島県教育庁文化財課）、新東晃一、東　和幸、黒川忠広、横手浩二郎、他センター職員各位（鹿児島県立埋蔵文化財センター）、小村美義（志布志町教育委員会）、羽生文彦（垂水市教育委員会）、和田るみ子（新和技術コンサルタント株式会社）、村上　昇（立命館大学大学院）、東　朋子

[順位不同・敬称略]

7. 発掘調査・整理作業ならびに報告書作成の過程において、以下の者が携わった。
野口さとり、八久保　豊、川ノ上真理、安野美子、若松孝雄、加藤英仁、山元弓枝
8. 調査記録・遺物の保管は、鹿児島県曾於郡有明町野井倉1756番地 有明町役場および農業歴史資料館内に保管する。問合せ先は有明町教育委員会社会教育課まで。

凡　例

1. 発掘調査における記録は写真撮影を各調査の担当調査員が行い、実測図は調査担当者及び補助員が作成した。
2. 方位は調査に際しては磁北を用い、報告書には一部で磁北と座標値を併記した。座標値は旧地形である。
3. 本書で用いたレベルは、工事図面より引用した海拔絶対高である。
4. 土色名に数字が入っているものは、農林水産省農林水産技術会議事務局・財団法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帖』に準じた。
5. 層の呼称で用いた「アカホヤ」・「サツマ」の推定は調査員の肉眼観察によるものである。
6. 遺構の法量は検出面からの数値である。
7. 発掘調査・整理作業に際して、一部で以下の略語を用いてある。
遺構名：「SK」=土坑、「SD」=溝、「Pit」=柱穴、「SH」=竪穴住居、「SB」=掘立柱建物
ただし、土坑に関しては、規模・形態にかかわらず掘り込みをもつ穴を全て「土坑状遺構」と捉えて土坑と呼称した。また、溝についても長く延びる掘り込みを「溝状遺構」と捉えて溝と呼称している。他についてはその性格が推察されるものにのみ用いてある。
8. 本書中の遺物の挿図番号は通し番号である。なお、遺物分布図中の番号は遺物(註記)番号である。
9. 図の縮尺は描く図に示した。図中に見られる「」は断面位置を示している。

本文目次

序文	26
例言	26
凡例	26
目次	28
	第V章 西区の調査成果	29
	第1節 調査の方法	29
	第2節 調査の経過	29
	第3節 層序	29
	第4節 調査の成果	29
	第VI章 出土遺物	55
	第1節 東区の土器	55
	第2節 西区の土器	60
	第3節 石器	66
	第VII章 まとめにかえて	71
	第VIII章 自然科学分析	73
	第1節 自然科学分析の概要	73
	第2節 土器胎土の植物珪酸体分析	74
	あとがき	
	報告書抄録	
	後付け	
第I章 遺跡の環境	1	
第1節 有明町の環境	1	
第2節 遺跡の環境	2	
第II章 調査の経緯	6	
第1節 調査に至る経緯	6	
第2節 調査の組織	7	
第III章 確認調査の成果	9	
第1節 調査の方法	9	
第2節 層位	9	
第3節 調査成果	9	
第4節 確認調査のまとめ	10	
第IV章 東区の調査成果	12	
第1節 調査の方法	12	
第2節 調査の経過	12	
第3節 層序	14	
第4節 調査の成果	14	

表 目 次

第1表	周辺遺跡一覧	5	第8表	掘立柱建物 6 柱穴一覧	46
第2表	集石 1 碓一覧	25	第9表	集石 2 碓一覧	49
第3表	竪穴状土坑 1 柱穴一覧	35	第10表	X層上面 柱穴一覧ほか	54
第4表	掘立柱建物 1 柱穴一覧	40	第11表	石器観察表	67
第5表	掘立柱建物 3 柱穴一覧	46	第12表	自然科学分析 分析試料	74
第6表	掘立柱建物 4 柱穴一覧	46	第13表	土器胎土試料の植物珪酸体分析結果	75
第7表	掘立柱建物 5 柱穴一覧	46			

挿 図 目 次

第1図	遺跡位置	3	第24図	溝 1 遺物出土状況	39
第2図	遺跡位置と周辺遺跡	4	第25図	掘立柱建物 1	41
第3図	農業用道路 路線	6	第26図	掘立柱建物 2・4	42
第4図	確認調査対象範囲	10	第27図	掘立柱建物 3	43
第5図	確認調査 遺構配置・遺物分布	11	第28図	掘立柱建物 5	44
第6図	調査区配置・調査地断面	13	第29図	掘立柱建物 6	45
第7図	東区 土層柱状図	15	第30図	西区・3・4区 検出面 2 (X層上面) 遺構配置	47
第8図	東区・2区 土層断面と遺構・遺物配置	17	第31図	噴砂 土層断面	48
第9図	東区・検出面 1 (V層上面) 遺構配置	19~20	第32図	集石 2	49
第10図	東区 土坑 1・2・5	21	第33図	西区 検出面 2 (X層上面) 遺構配置	50
第11図	東区 土坑 3・6・7	22	第34図	VII~IX層出土遺物の分布状況	51
第12図	東区 検出面 2 (X層上面) 遺構配置	24	第35図	柱列 1・2	52
第13図	集石 1	25	第36図	土坑 1~3	52
第14図	西区 土層柱状図	27	第37図	柱穴 1~22	53
第15図	西区・3・4区 検出面 1 (V層上面) 遺構配置	28	第38図	東区 土器 1	57
第16図	西区・1・2区 検出面 1 (V層上面) 遺構配置	29	第39図	東区 土器 2	59
第17図	西区 土坑 1	30	第40図	西区 溝 1 出土土器	61
第18図	西区 土坑 2・3	31	第41図	西区 竪穴住居 1 出土土器	63
第19図	竪穴状土坑 1 (1)	33	第42図	西区 各遺構及び第III層 出土土器	63
第20図	竪穴状土坑 1 (2)	34	第43図	西区 土坑 1 埋設土器	65
第21図	竪穴住居 1 (1)	36	第44図	第VII~IX層 出土土器	65
第22図	竪穴住居 1 (2)	37	第45図	石器 1	68
第23図	溝 1	38	第46図	石器 2	69
			第47図	石器 3	70
			第48図	土器胎土試料の植物珪酸体群集	76

図 版 目 次

図版 1	分析試料	73	図版13	西区	V層上面 遺構 1	89	
図版 2	植物珪酸体分析 (1)	78	図版14	西区	V層上面 遺構 2	90	
図版 3	植物珪酸体分析 (2)	79	図版15	西区	V層上面 竪穴住居	91	
図版 4	土器 1	80	図版16	西区	V層上面 竪穴土坑	92	
図版 5	土器 2	81	図版17	西区	V層上面 遺構 3	93	
図版 6	土器 3	82	図版18	西区	IX層上面 集石 2・災害痕跡 1	94	
図版 7	石器	83	図版19	西区	IX層上面 災害痕跡 2	95	
図版 8	東区	V層上面 遺構 1	84	図版20	西区	IX層上面 遺構 1	96
図版 9	東区	土層	85	図版21	西区	IX層上面 遺構 2	97
図版10	東区	V層上面 遺構 2	86	図版22	西区	IX層上面 遺構 3	98
図版11	東区	X層上面 遺構 1	87	図版23	調査地遠景 (西より)	99	
図版12	東区	X層上面 遺構 2	88				

第Ⅰ章 遺跡の環境

第1節 有明町の環境

1. 鹿児島県の環境

歴史的環境

有明町は行政区で鹿児島県曾於郡に含まれ、宮崎県との県境に位置する。両県は合わせて南九州と呼ばれる。列島規模では鹿児島県は九州島南端にあり、京都・奈良・東京などを中心に考えると南端にあたるが、東アジア全体から見た視点では、古くからアジアの中心である中国大陆への出口であり、日本列島（本州島など）への入口でもあった。このため鹿児島は、日本列島文化とアジア文化との交差点として独特の文化を築いている。

地理的環境

鹿児島県は、桜島に代表されるように火山と関係の深い土地である。過去に噴火した火山は霧島山・桜島・開聞岳・硫黄島などがあり、本県を東西に分ける錦江湾は、阿多火山・姶良火山の大爆発によって、陥没した土地に海水が流入して形成された。これらの度重なる噴火はシラス・ボラ・コラなどの火山噴出物を降らせ、さらには火砕流により周辺一帯に膨大なシラスをもたらし、層の厚さが100mにも及ぶシラス台地を造りだした。このシラス台地は保水性に乏しく、流水に弱く崩れやすい特徴を持っている、その台地の高さもあって水稻栽培には不向きな土地である。

気候的環境

気候は温暖多湿な土地であり、県内には亜熱帯から温帯の植生が見られる。大隅半島の佐多岬や志布志湾の桜島などには亜熱帯性の植物相群が存在する。町内でも自生の北限が宮崎県串間市付近となる亜熱帯性の植物のソテツ・バナナが自生する姿が見られる。また、多雨地帯でもあり、とくに梅雨と台風による雨量は想像を超える。この様に温暖多湿で雨が多いことは植生にも大きな影響を与えている。

2. 有明町の環境

有明町は大隅半島の南東部にあり、北西の宮崎県境に霧島山、北に鷲塚山地、西に古生層のみられる高隈山地、南に花崗岩で形成される肝属山地があり、東には太平洋に向かって南東部が開口する志布志湾が広がる。

町内のほとんどがシラス台地にあたるが、その様子は各地域で異なる。北の伊崎山は小谷が入り込んだ平坦面の狭い台地であるのに対して、野神・蓬原・野井倉は比較的大な平坦面が広がる。いずれの土地も河川が台地を浸食しており、現在の河川は台地縁辺部の崖のはるか下を流れる。河川は伊崎田の本村川・高下谷川があり、志布志の安楽川に流れ込んでいる。町域中央を流れる菱田川は伊崎田と山重・蓬原・野井倉の間を流れ、通山から志布志湾に流れ込んでいる。野神・原田には田原川があり、大崎の持留川と合流する。

この様な地形のため昔から耕作は少なく、河川流域などで谷底の水田の意味である「追田」と呼ばれる水田が存在するのみであった。しかし、現在では近代から現代にかけての開拓事業により、台地上に通水が施されて「蓬原開田」・「野井倉開田」と呼ばれる水田地帯が広がる。一方で、各台地上も現代の耕地整備により広大な畑地が広がり、サツマイモに代表される根菜類などや茶畑が見られる。現在ではこの台地上の畑地に灌漑事業計画も進められている。また、畜産も盛んであり、競走馬などの牧場も見られる。

なお、町内は地理的・歴史的背景から七つの地域に分けて呼ぶことが多く、伊崎田・野井倉・通山・山重・野神・原田・蓬原と呼称している。これらは菱田川の東岸地域の前三者を「川東」と呼び、西岸地域の後四者を「川西」と呼んでいる。

歴史的環境

本町は現在の行政区画では鹿児島県に属すが、過去においては日向国（宮崎県）に属しており、この地の歴史・文化を考えるには薩摩・大隅の他に日向の影響も考慮に入れる必要がある。日本書紀に詠われた「こまならばひゅうがのこま」の日向には有明町周辺も含まれると考えられ、当町の野神を日本書紀や三代実録・延喜式にも登場する「馬牧」に推定する説もある。このように宮崎との関わりは深く、また、古来より馬の飼育が盛んな土地であったことが想像できる。現在でも南に隣接する大崎町の野方などを中心に牧場が存在する。

また、北に隣接する志布志町には古くから港があり、海を通じた文化の伝播・交流は盛んで、港は栄えていたと伝えられている。当町は港の後背地にあたり、港とは密接な関係にあったと思われる。町内の発掘調査においても、中国大陸からの輸入陶磁器が出土していることからも想像できる。

その他、当町域が栄えていたことを示す文物が各時代に存在している。縄文時代では未報告ではあるが野井倉の志陽の横堀遺跡で早期の遺物が多量に出土している。弥生時代には本村川流域の土橋集落から銅矛が出土しており、東京国立博物館に収蔵されている。古墳時代には県内最大級の円墳である原田古墳や蓬原の地下式横穴墓などが存在している。古代には莊園が設けられ町域の東に日向国救二院、西に同国救二郷が存在したと言われている。中世に入ると救二郷氏により蓬原城が築かれ、その後、近世の慶長頃まで島津氏の外城として続いていることが記録に残っている。近代以降については、前述したように、台地の上を水田化するため住民を中心に用水路の開削・開田事業が進められ、今では平地と見間違う程の水田が台地上に広がっている。これらは小学校教育などで「蓬原開田」・「野井倉開田」として紹介されている。

第2節 遺跡の環境

町内の遺跡数は、分布調査などの成果から総遺跡数204を数える。さらに近年、新規の道路建設や道路改修などとともになう緊急発掘調査により、具体的な姿が明らかになってきている。

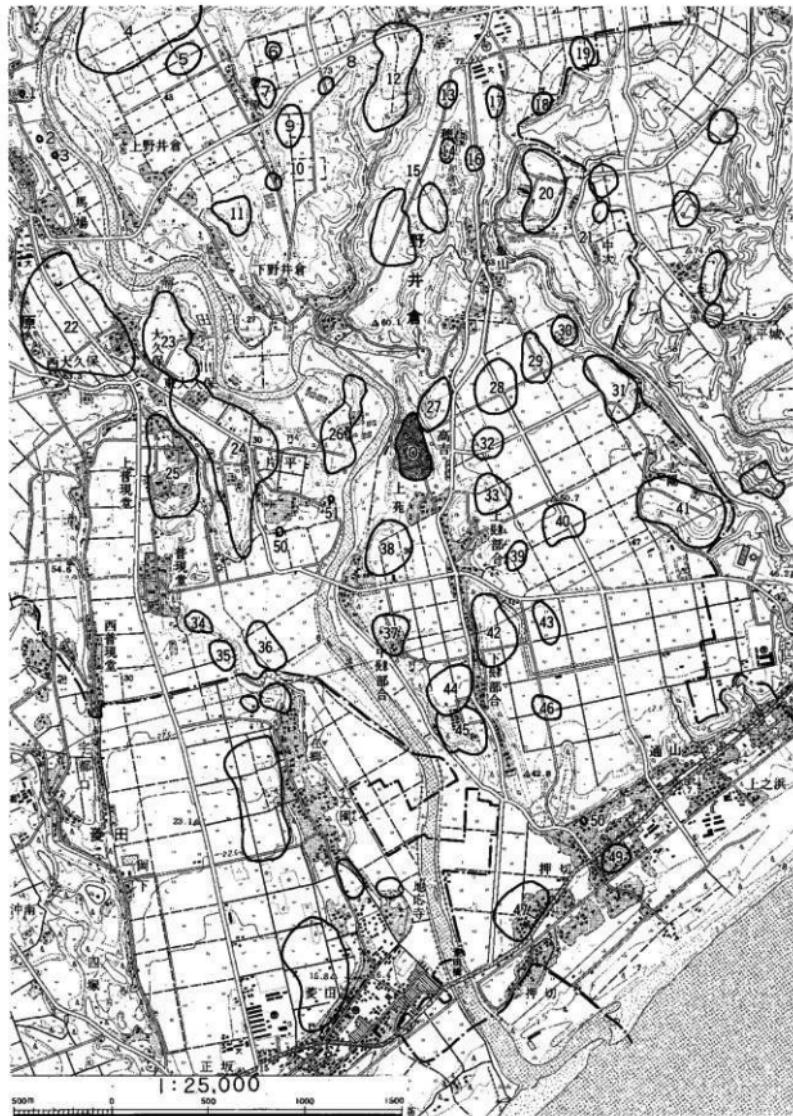
上苑遺跡で主体となるのは古墳時代と縄文時代晚期であるが、周囲においては菱田川を挟んだ対岸の仕明遺跡において、古墳時代の集落が見つかっている。縄文時代晚期については、菱田川上流の伊崎田・黒葛遺跡・牧原遺跡などにおいて集落と思われる範囲が確認されている。



1. 上苑遺跡



第1図 遺跡位置



第2図 遺跡位置と周辺遺跡

番号	遺跡名	フリガナ	所在地	地形	時代	遺物・遺構
0	上苑	ウエンソン	野井倉字上苑・高吉	台地	縄(早)・古墳	埋甕・成川式・等火住居
1	金丸城跡	カナマルジョウアト	蓮原字神祇	丘陵	中世	空堀
2	高岡宗持院跡	シンブシヨウウツイイアツ	蓮原字出水	低地		
3	蓬原城跡	フツハラジョウウアト	蓬原字出水	台地	中世	堀・空堀・土塁
4	井手上A	イデウエ	野井倉字井手上・上ノ水流	台地	縄・弥・古墳	土器・石器・入骨・土師器
5	井手上B	イデウエ	野井倉字井手上	台地	古代	土師器
6	上ノ段A	ウエノダン	野井倉字上ノ段	台地	弥	土器
7	上ノ段D	ウエノダン	野井倉字上ノ段	台地	古代	
8	上ノ段C	ウエノダン	野井倉字上ノ段	台地	古代	土師器
9	輪付	イナツキ	野井倉字輪付・下段	台地	弥	
10	下段	シモンダン	野井倉字下段	台地	弥	土器
11	和田上	ワタウエ	野井倉字和田上	台地	弥・古墳	土器・土師器
12	中尾	ナカオ	野井倉字中尾・西原追	台地	弥	
13	西原B	ニシハラ	野井倉字西原	台地	弥・古墳	土師器
14	西原A	ニシハラ	野井倉字西原	台地	弥	
15	上原A	ウエハラ	野井倉字上原・西原	台地	弥	土器
16	東原	ヒガシハラ	野井倉字東原	台地	弥・古墳	土師器
17	崩原	マエバラ	野井倉字崩原	台地	弥	土師器
18	吉原	ヨシハラ	野井倉字吉原	台地	弥	土器
19	平馬C	ハヤマ	野井倉字平馬	台地	弥	土器
20	中次B	ナカツギ	野井倉字中次	台地	弥	
21	中次A	ナカツギ	野井倉字中次	台地	弥	
22	大園A	オオゾノ	蓬原字大園・上大園・小松	台地	縄・古墳	土器・石器
23	火園B	オオゾノ	蓬原字大園・井手ノ上	台地	古	
24	仕明	シアケ	蓬原字仕明・官ノ前・大園・牧	台地	弥・古墳・古墳・中世	成川式・土器
25	牧	マキ	蓬原字牧・外堀	台地	古墳	土器
26	下水流	シモヅル	蓬原字下水流・宮ノ前	台地	古墳	石斧・土師器
27	仮屋頭	カリヤカシラ	野井倉字假屋頭・仮屋	台地	縄(後)・中世	土師器・鉢津
28	下段B	シモダン	野井倉字下段・東	台地	弥	
29	下段C	シモダン	野井倉字下段・東	台地	縄・弥	土器
30	東	ヒガシ	野井倉字東・横船	台地	弥	土器
31	横堤	ヨコボリ	野井倉字横堤	台地	縄(早)・弥・古墳・古代	波火坑口臺・點王山・耳鼻・鳥・神式・日母
32	下段A	シモダン	野井倉字下段	台地	古代	土師器
33	上苑B	ウエンソン	野井倉字上苑・下段・上苑下	台地	古代	土師器
34	中牟田	ナカムタ	野井倉字中牟田	台地	古代	
35	春日龜	カスガボリ	蓬原字春日龜	台地	縄	
36	田尾下	タオシタ	野井倉字田尾下	台地	古代	土師器
37	木森	キモリ	野井倉字木森・田尾	台地	縄・古代	
38	上苑A	ウエンソン	野井倉字上苑	台地	弥・古代	山ノ口式・土師器
39	上苑上	ウエンソンウエ	野井倉字上苑上	台地	古代	土師器
40	善堀	ジンボリ	野井倉字善堀・上苑上	台地	弥	土器
41	次五	ジゴ	野井倉字次五	台地	古代	土師器
42	大代	オオダイ	野井倉字大代・繼追・大森	台地	縄・古代	土師器
43	繼追	カマザコ	野井倉字繼追・上苑上	台地	弥	土器
44	平B	ヒラ	野井倉字平	台地	古代・中世	土師器・青磁
45	平A	ヒラ	野井倉字平	台地	古	
46	坂上	サカウエ	野井倉字坂上・大代	台地	古代	土師器
47	塙入	シオリ	野井倉字塙入・押山・山瀬	台地	弥	土師器
48	淨宗仏心院跡	ゼンシュクブッセン(シント)	野井倉字通山	低地		一字・石塔
49	蓬原	マツバラ	野井倉字松原・上ノ浜	低地	弥(中・後)	土器
50	片平山塙	カタヒラコフン	蓬原字平明	低地	古墳	円墳
51	片城跡	カタヒラジョウアト	蓬原字下水流・仕明	丘陵	中世	

*図中に番号がないものは、隣接する大蛇町、志布志町に存在する遺跡である

第1表 周辺遺跡一覧

第II章 調査の経緯

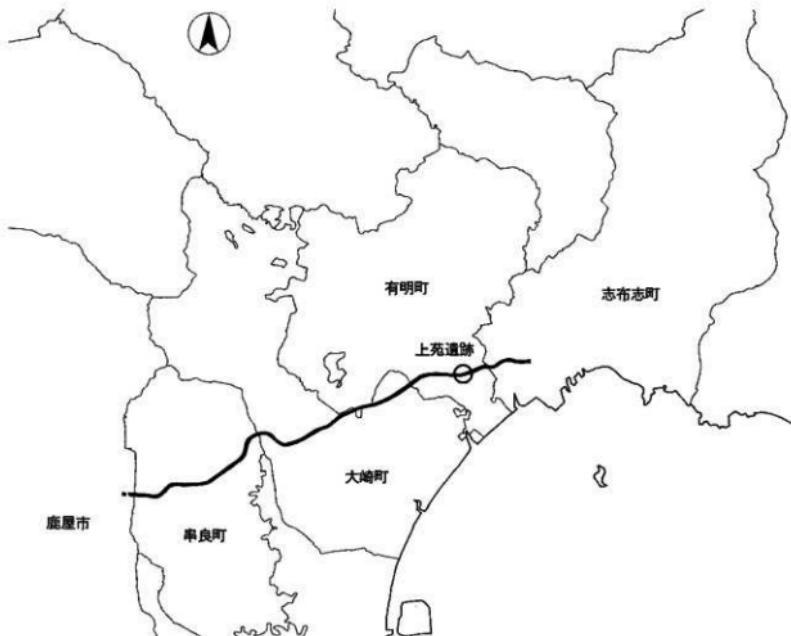
第1節 調査に至る経緯

緑資源公団九州支社（以下「公団」）は、大隅中央区域において農用地総合整備事業を計画し、事業区内の埋蔵文化財の有無について、鹿児島県教育庁文化財課（以下「文化財課」）に照会を依頼した。

これを受けた鹿児島県立埋蔵文化財センター（以下「埋文センター」）と有明町教育委員会社会教育課（以下「社会教育課」）が平成8年6月に埋蔵文化財の分布調査を実施し、事業区内に複数の遺物散布地が存在していることを確認した。

この成果をもとに公団・文化財課・社会教育課は、埋蔵文化財の保護と事業の調整を目的に協議を行ったところ、埋蔵文化財の包蔵状況を把握するため確認調査の実施が不可欠と判断し、調査を実施した。

確認調査は、埋文センターの協力・支援のもと社会教育課が主体となり、平成12年1月17日から2月16日までの21日間をかけて行なった。結果、当遺跡が埋蔵文化財包蔵地であることが確認され、さらに古墳時代・弥生時代・縄文時代早期にかけての複合遺跡であることが判明した。とくに、池田降下軽石包含層上面においては、竪穴住居・溝などが検出されており、調査地点が古墳時代の集落内に位置することが判明した。



第3図 農業用道路 路線

この成果を受けて公団・文化財課・社会教育課は、埋蔵文化財の取り扱いについて、遺跡の現状保存及び事業の設計変更等に関して再度の協議を実施したが、事業推進にあたっては遺跡の現状保存は困難と判断し、道路整備範囲については記録保存のため本調査の実施を決定した。

本調査は、埋文センターの指導・支援を受けて、社会教育課が主体となり、遺跡内に予定される道路整備範囲の全面を対象に実施した。ただし、現況道路下については、既設道路により搅乱されており慎重工事とした。

調査は事業の都合上、前期・後期に分けて行ない、前期が平成13年4月23日から6月13日までの41日間、後期は8月20日から10月20日までの47日間を要した。また、東・西区の間の町道下については、工事施工時に立会いを行ない、削平を確認した。

なお、本調査に際しては、遺跡の名称を確認調査時の「高吉遺跡」から「上苑遺跡」へと改めた。

整理作業ならびに報告書作成は、平成14年度から平成15年度にかけて実施した。

第2節 調査の組織

1. 確認調査

主 体 者	有明町教育委員会	教 育 長	大脇茂夫
責 任 者	"	教 育 長	大脇茂夫
企 画 担 当	"	社会教育課課長	立山廣幸
庶 務 担 当	"	社会教育課課長補佐	浜島兼雄
	"	社会教育課係長	井手佐喜雄
調 査 担 当	"	社会教育課主事	中水 忍
	鹿児島県立埋蔵文化財センター	文 化 財 主 事	倉元良文

確認調査は中水 忍・倉元良文が担当し、記録などを中水が行った。作業については、重機の操縦を山口好邦（有限会社宮内機械）が、掘り下げなどを下記の社団法人有明町シルバー人材センターの作業員が行なった。

2. 本調査

主 体 者	有明町教育委員会	教 育 長	大迫 亨
責 任 者	"	教 育 長	大迫 亨
企 画 担 当	"	社会教育課課長	立山廣幸
庶 務 担 当	"	社会教育課課長補佐	畠山昭俊
	"	社会教育課係長	鬼塚 仁
調 査 担 当	"	社会教育課主事	出口順一朗、東 徹志
	鹿児島県立埋蔵文化財センター	文 化 財 主 事	堂込秀人

調査補助員（有明町教育委員会 臨時職員）

前期（東区）：野口さとり、八久保 壱、川ノ上真理、安野美子

後期（西区）：野口さとり、安野美子

本調査は、前期（東区）を堂込秀人の支援・指導のもと主に東 徹志が、後期（西区）を同じく東が担当した。調査中の写真記録はおもに東が行ない、測量・作図は調査員と野口さとり・八久保 登・川ノ上真理・安野美子が行なった。

重機の操縦・現場の安全管理は山口好邦（有限会社宮内機械）が、掘り下げ等の作業は社団法人有明町シルバー人材センターの作業員が行なった。航空写真撮影は有限会社ふじたに委託した。

作業員（社団法人有明町シルバー人材センター）

前期：若宮庸成、川野雄幸、中野京子、富迫利満、山元フクミ、山平一美、中本雅紹、山平親行、山平アヤ子、立山利行、立山キエ、立迫サチ、立本トシ、園山キャク、稻山光昭、

瀬口イク、阿久根久子、新保松夫、新保綾子 [順位不同]

後期：稻田光昭、中本雅紹、山平一美、伊田カズ、鈴木絹枝、瀬口イク、谷川静枝、谷口チエ、谷口モギ、中野京子、橋口トシ、山元フクミ [順位不同]

3. 整理作業ならびに報告書作成

主 体 者 有明町教育委員会

責 任 者〃 教 育 長 大迫 亨
長重逸郎（平成15年10月16日より）

企 画 担 当〃 社会教育課課長 立山廣幸

庶 務 担 当〃 社会教育課課長補佐 畑山昭俊

森重晃一（平成15年10月1日より）

調 査 担 当〃 社会教育課係長 岩元秀光

調査指導・支援鹿児島県立埋蔵文化財センター 社会教育課主事 東 徹志

文化財 主 事 堂込秀人

文化財 研究員 黒川忠広、横手浩二郎

調査補助員（有明町教育員会 臨時職員）

野口さとり、川ノ上真理、八久保 登、安野美子、若松孝雄、加藤英仁、山元弓枝

整理作業は、東 徹志のもと野口さとり・安野美子を中心に行ない、報告書作成は、東が編集し、東及び中水 忍が執筆した。図化にあたっては東・野口が行なった。遺物の写真撮影は東が行なった。また、自然科学分析は植物珪酸体分析をバリノ・サーヴェイ株式会社に委託し、その報告を掲載してある。

（東）

第III章 確認調査の成果

第1節 調査の方法

確認調査は遺構の性格・範囲を把握するため、事業による破壊が予想される範囲内に、三つのトレントを設定して行なった。呼称は、町道の東側畠地を1トレント、町道の西側畠地を2トレント、最も西の崖近くを3トレントと呼んだ。調査は、先ず耕作土を重機により除去した後、次いで人力による掘り下げを実施した。また、遺構が確認されたトレントでは、隨時トレントの拡張を行なった。

第2節 層位

標準土層は以下のとおりである。

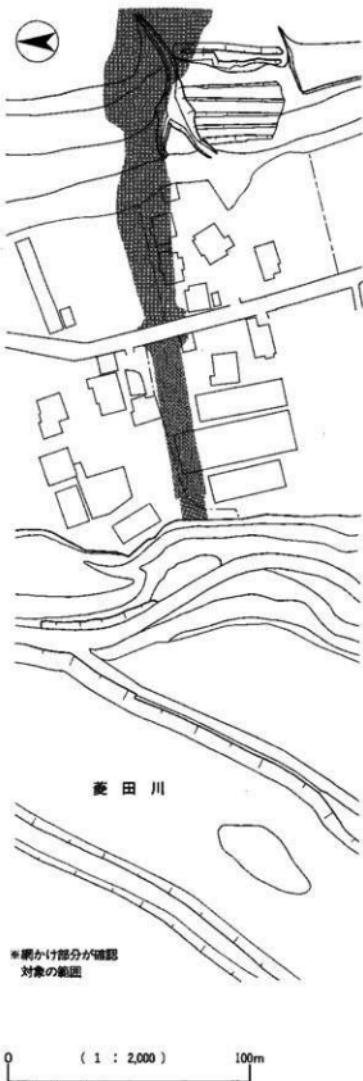
I層	黒褐色土	表土、現在の耕作土で白色バニスを含み、触覚はザラザラする。
II層	黒色土	真っ黒の腐植土、カカフカと柔らかい軟質層である。
III層	暗褐色土	カカフカした層で、II層よりやや明るく発色する。
IV層	暗茶褐色土	御池降下火山灰を包含する層である。
V層	黒褐色土	池田降下火山灰を包含する層である。
VI層	明黄褐色土	アカホヤ降下火山灰の二次堆積層である。
VII層	青灰色砂質土	日の細かい砂質土層、アカホヤ降下火山灰が脱色、細粒化した土層と考えられる。
VIII層	黄褐色火山灰層	約6,300年前に鬼界カルデラから噴出した橙色のアカホヤ降下火山灰の一次堆積層、バニスを多く含む。
IX層	暗茶褐色土	橙色バニスを少し含んでいる硬質の層である。
X層	黒褐色土	径5mm程度の橙色バニスを多く含んだ硬質の層である。
XI層	暗青灰褐色土	XII層の二次堆積と考えられる。
XII層	暗黄褐色火山灰層	約11,500年前の蘇摩降下火山灰層がブロック状に点在する。極めて硬質な層である。
XIII層	明紫褐色土	粘質の強いローム層である。
XIV層	暗紫褐色土	粘質の強いローム層である。
XV層	明黄褐色土	粘質の強いローム層である。
XVI層	明黄褐色土	粘質の強いローム層である。
XVII層	暗青灰色土	砂質土でやや粘質がある。
XVIII層	乳青灰色土	砂質土である。

第3節 調査成果

1 トレントでは、東西方向に長いトレントを設け、斜面上方側への遺構・遺物の拡散状況の把握に努めた。III層・IV層から土器が出土し、VI層上面で道路状遺構を確認した。トレントの一部において下層確認のため深掘りを行なったところ、X層から縄文時代早期の土器が出土した。その後、事業計画区域の半分まで、調査区を拡張した。VI層上面まで調査を行なったところIII層・IV層から土器が出土した。

2 トレントでは、III層・IV層から土器が出土し、VI層上面で柱穴を確認した。

3 トレントでは、VI層上面で溝状遺構1基、竪穴住居跡1基、柱穴4基を確認した。溝状遺構内複



第4図 確認調査対象範囲

土からは土器が数点出土した。時期は古墳時代と考えられる。トレンチの一部において下層確認のため深掘りを行なったところ、X層から縄文時代早期の土器が出土した。

土器は古墳時代の成川式土器、弥生時代の山ノ口式土器、縄文時代早期の土器が出土した。

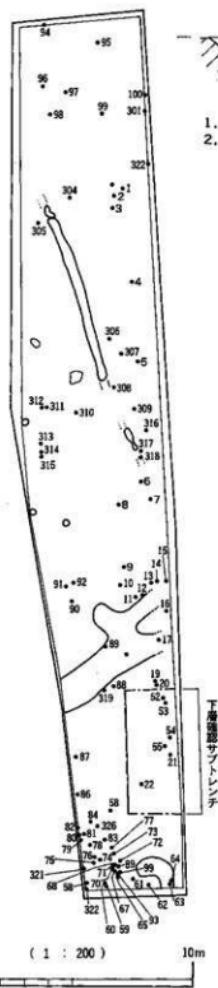
各トレンチは調査終了後、埋め戻して確認調査を終えた。

第4節 確認調査のまとめ

確認調査の結果、当遺跡は古墳時代・弥生時代・縄文時代の複合遺跡と考えられる。とくに古墳時代については、堅穴住居跡が確認されたことから当地点が集落域内であることが推察される。

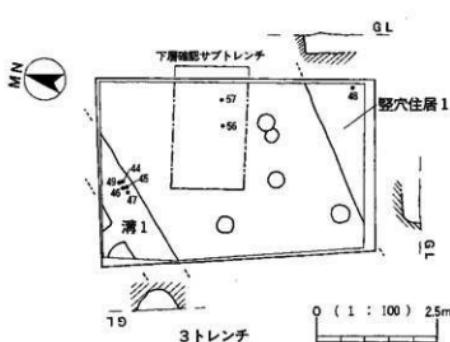
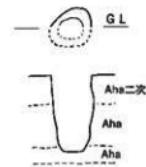
調査後の取扱いとしては、設計変更などによる現状保存が望ましく、現状を変更する場合は発掘調査による記録保存が不可欠であると考えられる。

(中水)



1. 灰褐色硬化層
2. 黒灰色粘質硬化層

*番号は遺物(目記)番号を示す



第5図 確認調査 遺構配置・遺物分布

第IV章 東区の調査成果

第1節 調査の方法

1. 調査の環境

調査対象範囲の東側を東区と呼称して、4月下旬から6月中旬までの期間、調査を実施した。

東区は、現況が畑地と宅地であり、両者の地境は竹と雑木の林であった。また、東側の斜面は、ボラ等の雑木林が広がり、その上方の台地上には畑地が見られた。

なお、西区との間にあたる道路に面してブロック塀が設けられており、また植木も存在していた。

2. 調査の方法

調査は、調査地内の雑木・竹の林を重機で伐採し、除去してから行なった。なお、道路際のブロック塀・植木については、多種の都合により現況のまま調査を実施した。

伐採除去作業は、重機で伐採後に樹根の裁断・除去を人力で行なった。竹根については、やもえず調査員の立会いのもと重機で除去した。

調査区は、対象範囲内に任意の調査範囲を設けてから行ない、着手順に「1区」「2区」と呼び、計4区を数えた。遺物包含層を中心とした第II～IV層の掘り下げはおもに人力で行ない、表土（I）層と第V～VII層については調査員の立会いのもと重機で掘り下げた。また、斜面地の上方にあたる4区では幹周り1mを超える樹木が存在したため、避ける形でトレーニング状に調査を行ない、その成果を見て調査区拡張の必要を考えた。結果、遺物の出土もなく、検出した遺構も極めて少ないとから、拡張は実施しなかった。

なお、検山面2・3の調査に際しては、現在の地表面から深さが2mを超えることから、安全確保のため段掘りを施した。

第2節 調査の経過

以下、調査日誌より略述する。

平成13年4月21日（土）・23日（月）、東区の調査準備に着手、立木・竹林の伐採・撤去を行なう。

24日（火）・25日（水）、資材の搬入・設置、表土を重機により除去、樹根を除去する。

26日（木）・27日（金）、1区で池田降下軽石包含層までの人力掘り下げに着手、継続する。

28日（土）・29日（日）、調査区東端の樹木の伐採・撤去・運搬を行なう。

5月1日（火）～9日（水）、1区を掘り下げる。

10日（木）、1区で遺構を検出・記録、2区で遺物を出土・記録する。3区を掘り下げる。

11日（金）、1区の記録、3区の遺構検出を行なう。

12日（土）、1区の遺構調査、4区の掘り下げを始める。

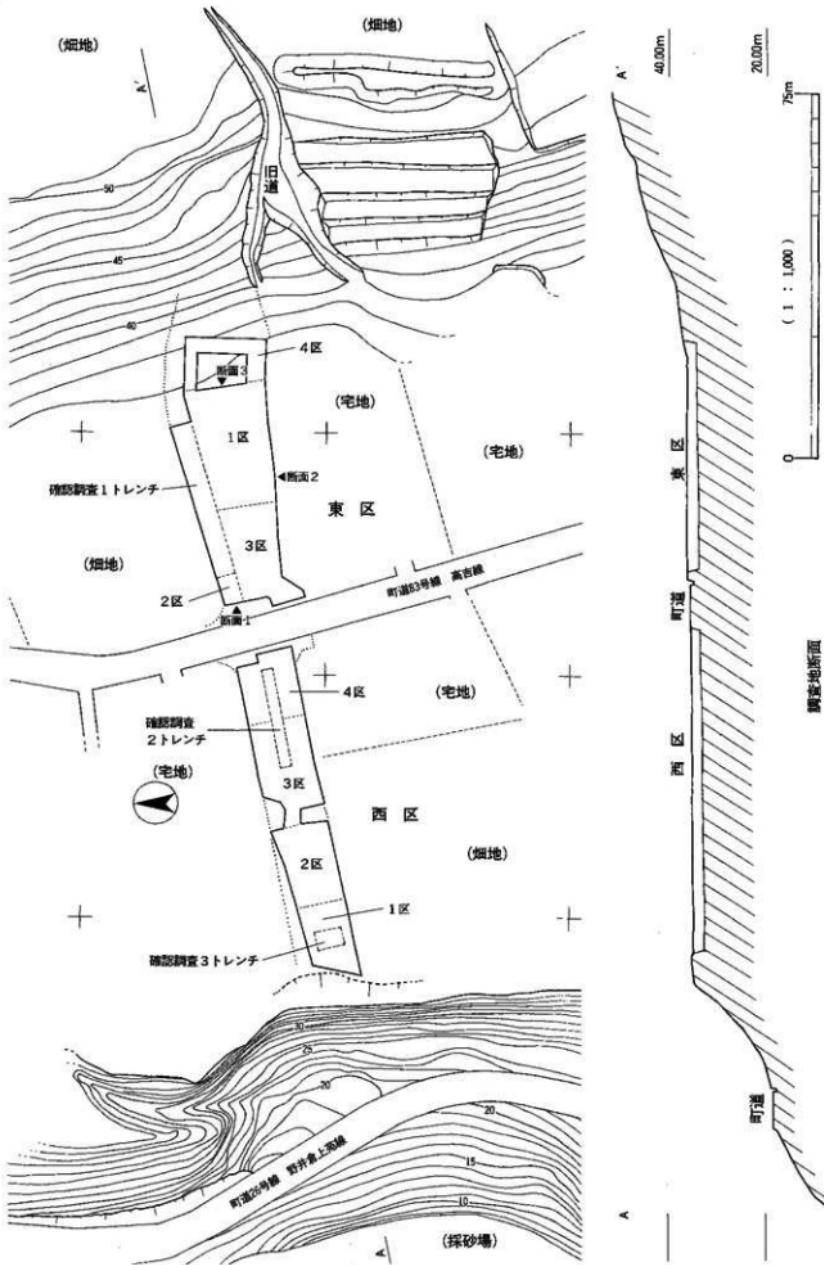
14日（月）、3区の記録・遺構の調査、4区の掘り下げを行なう。

15日（火）、2区を完掘・記録、4区で遺構を検出する。

16日（水）、1・3区で遺構の調査を行なう。

17日（木）、1・3区で池田降下軽石包含層上面の遺構を完掘する。1～3区の池田降下軽石包含層・アカホヤ降下火山灰層を重機にて除去する。

18日（金）・19日（土）、1～3区のアカホヤ降下火山灰層下の縄文時代早期に比定される黒色土層を人力にて掘り下げる。



第6図 調査区配置・調査地断面

21日（月）、排出土の処理を行なう。

22日（火）～28日（月）、前述の黒色土層を掘り下げ、少量の遺物と遺構を確認、記録する。

29日（火）～6月13日（水）、埋め戻しと撤収作業を行なう。

第3節 層序

1. 削平状況と旧地形

現況は、東から西へと向かって低くなっている、高低差は約20cmを測る。調査地内は、樹木根や最近の建物跡などにより、部分的に削平を受けている。層位としては、第I・II層が近世以降の耕作土と考えられ、この時期に旧地形を現在の平坦な面に整えていると思われる。

推測される旧地形は、細かな凹凸地形を除けば、現況と大きくは変わらないと考えられる。しかし、土層柱状図で見られる様に、第VII層の高さになると調査区中央が低くなる。この低くなる範囲は、柱状図では不明瞭であるが、第V層上面でも影響が見られて、中央部がやや凹んだ地形となる。最も低くなるのは土坑1の5m西側付近である。第X層になると再び西に向かって低く傾斜する。

なお、断面2地点を部分的に深く掘り下げ、下層の堆積状況を確認したところ、灰白色砂粒とシルト層が交互に堆積する層を確認した。堆積状況からは水成堆積の様にも見えるが、当地点はシラス台地上の河岸段丘に位置することから、旧菱田川の流路跡の可能性を考えられる。

2. 各層の概要

第I層： やや緑色に発色した黒色土で、多量の白色砂粒を含む。現在の耕作土として利用されている。含まれる白色砂粒は、大正期の桜島の噴火による降下物と考えられる。

第II層： 黒色土で白色砂粒を含む。自然堆積層である。

第III層： 赤色に発色する黒色土で、上下の層に比べてやや柔らかい。古墳時代から縄文時代晩期の遺物が出土する遺物包含層である。

第IV層： やや青色に発色する黒色土で、上下の層に比べて粘性があり、やや締まる。

第V層： 黒褐色土に非常に多量の橙色軽石を含む。この軽石は約5,400年前に降下の「池田降下軽石」と推定される。

第VI～VII層： 明黄褐色の砂質土で、約6,300年前に降下の「アカホヤ降下火山灰層」と推定される。各層の粒度はそれぞれ異なり、上層から下層に行くほど粒度は粗くなる。とくにVII層は5cm以下の軽石などを多量に含む。

第IX-1層： 黒色土でやや粘性を帯びて、他の層に比べて硬く締まる。多量の白色砂粒を含む。

第IX-2層： 黒色土で他の層に比べて非常に硬く締まり、第IX-1層より硬い。多量の橙色砂粒を含む。縄文時代早期の遺物包含層である。

第X層： 黄褐色の砂質土で、上方での検出面では10～20cmの大の不定形の斑点が見られる。約11,000年前に降下の「薩摩降下火山灰層」と推定される。

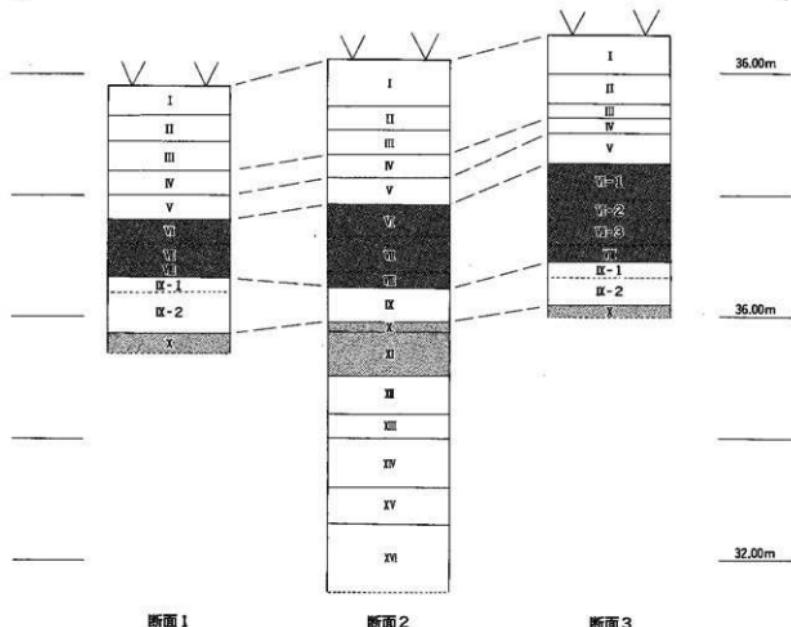
第XIII・XIV層： 紫色の粘土で、「チョコ層」に対応すると考えられ、縄文時代草創期の包含層に比定される。今回、遺物は確認されなかった。

第4節 調査の成果

調査は、第II～IV層とIX層を人力で掘り下げ、第III層と第IX層が遺物包含層であることを確認した。遺構精査は、第V層上面と第X層上面で行ない、第V層上面を検出面1、第X層上面を検出面2と呼

西

東



〔土層詳細〕

東区・基本土層

層番号	土層名	備考
第 I 層	5B3/1暗青灰色土、多量の2mm以下の白色砂粒を含み、やや締まる	
第 II 層	5P3/1暗青灰色土、極少量の0.5mm以下の白色砂粒を含む	表土 旧耕土
第 III 層	7SYR2/1赤褐色土、やや柔らか	縄文時代晩期終末の遺物包含層
第 IV 層	5B2/1青黒色粘質土、やや締まる	
第 V 層	10YR2/2褐色土、多量の2~10mm10YR6/8明黄褐色砾石を含む	「池田跡下砾石包含層」に推定
第 VI 层	10YR6/8明黄褐色砂質土	「アカホヤ跡下火山灰層」に推定
第 VII 层	2.5Y7/6明黄褐色砂質土、多量の2.5Y8/2灰白色砂粒・7.5YR5/8明褐色砂粒・2.5Y8/6黄色砂粒を含む	「アカホヤ跡下火山灰層」に推定
第 VIII 层	10YR5/8黄褐色砂質土、非常に多量の20~50mmの大粒砂粒を含む	「アカホヤ跡下火山灰層」に推定
第 IX-1層	7.5YR2/1黒褐色粘質土、多量の0.5mm以下の白色砂粒を含み、硬く締まる	縄文時代早中期の遺物包含層
第 IX-2層	7.5YR2/1黒褐色粘質土、多量の1~3mmの大粒砂粒を含み、硬く締まる	縄文時代早中期の遺物包含層
第 X 层	2.5Y5/4黄褐色砂質土、多量の100~200mmの大粒砂粒を含み点状のシミが見られる	「蘿井跡下火山灰層」に推定
第 XI 层	7.5YR8/3浅黄色粘質土	
第 XII 层	7.5YR8/8黄色粘質土、水気を帯びる	
第 XIII 层	5R3/1埋赤灰色粘土	「チヨコ層」に推定
第 XIV 层	10R6/4にじい赤褐色粘土	「チヨコ層」に推定
第 XV 层	10YR7/4明黄褐色粘質土	
第 XVI 层	10YR8/2灰白色砂質土	
第 XVII 层	7.5YR7/3にじい橙色砂質土	

第7図 東区 土層柱状図

称した。以下、各面ごとの成果について略述する。

1. 検出面1の成果

第V層上面で検出した遺構は、柱穴・土坑・風倒木痕が見られ、数量のほとんどを柱穴が占める。対応する遺物包含層は第III層を中心とした第II～IV層と考えられる。時期は、出土土器から古墳時代から縄文時代晩期にかけてと考えられる。

ア) 遺物の分布

遺物の平面分布状況は偏っており、1区及び確認調査1トレンチに偏在する。しかし、1トレンチでは東西にかけて広く遺物が分布しており、本来は2・3区も同様の状況であったと思われる。分布結果は、竹林の根によって、遺物包含層である第III層が搅乱を受けたためと考えられる。

平面分布は1区付近に遺物の集中が見られて、後章で述べる西区にも広がる。推測される分布域は集中範囲を中心に同心円状に広がる可能性が考えられる。

層位的には、図に見られるとおり、第III層に出土が集中している。遺構に対応する生活面は、第III層中もしくは、この上位に存在していたと考えられる。

出土する遺物は、古墳時代から縄文時代晩期までのものが見られるが、中心はほぼ後者である。前述の推定分布域も後者の傾向である。前者はとくに集中する範囲をもたず散在している。

イ) 遺構の配置

調査区全体に遺構が検出された。分布の傾向としては、東側の斜面に近づくにつれて密度が疎となり、逆に西側にはやや密となる。西側には土坑なども集まる。

ウ) 遺構

柱穴

多数の柱穴が調査区内全体から検出された。柱穴はやや歪んだ掘り方のものや浅い掘り方のものなど幾つかの種類が見られる。施設などは復元できなかった。また、明確に並ぶ柱列は見られないが、不規則な柱間をもつ柱列がいくつか存在している。

土坑

土坑1は、形態が不定形の土坑から一部が突出した平面形に逆台形の断面形を呈する。底面は北西側が一段低くなる。法量は平面の長軸112cm×短軸104cm、深さ45cmを測る。覆土には、地山であるVI～VIII（アカホヤ）層土ブロックを含む層が複数見られる。

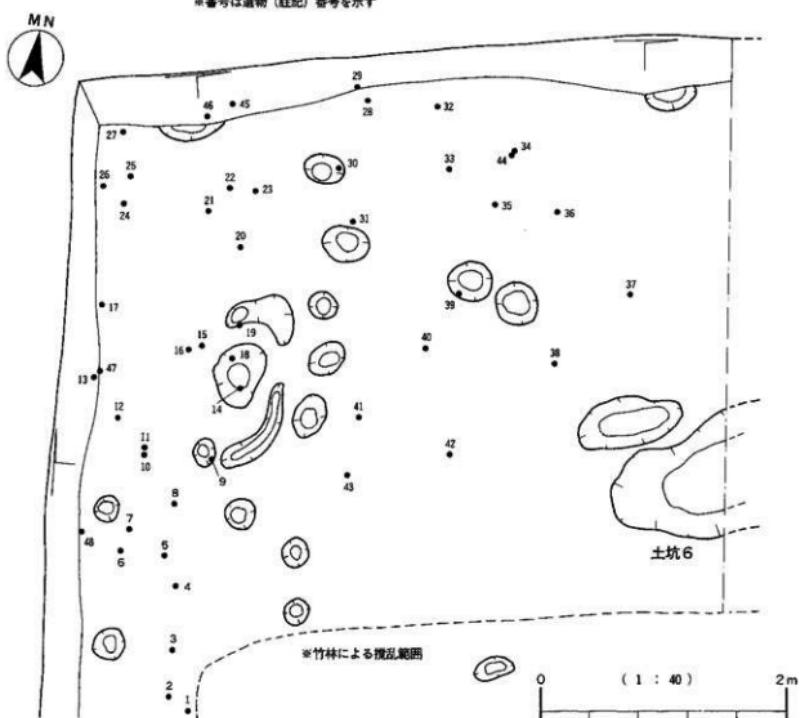
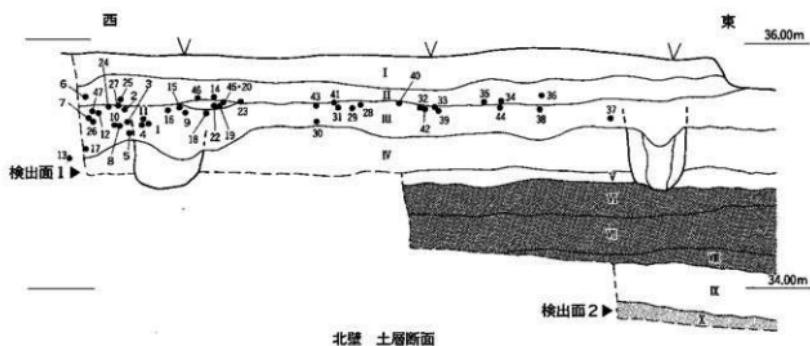
土坑2は、平面形が歪な円形に、浅いレンズ状の断面形を呈する。法量は平面の長軸174cm×短軸137cm、深さ19cmを測る。底面の一部が浅く凹む。

土坑3は、平面形が楕円形、断面形が二段掘りの逆台形を呈する。二段目は柱穴状にも見える。法量は平面の長軸93cm×短軸58cm、深さ29cmを測る。

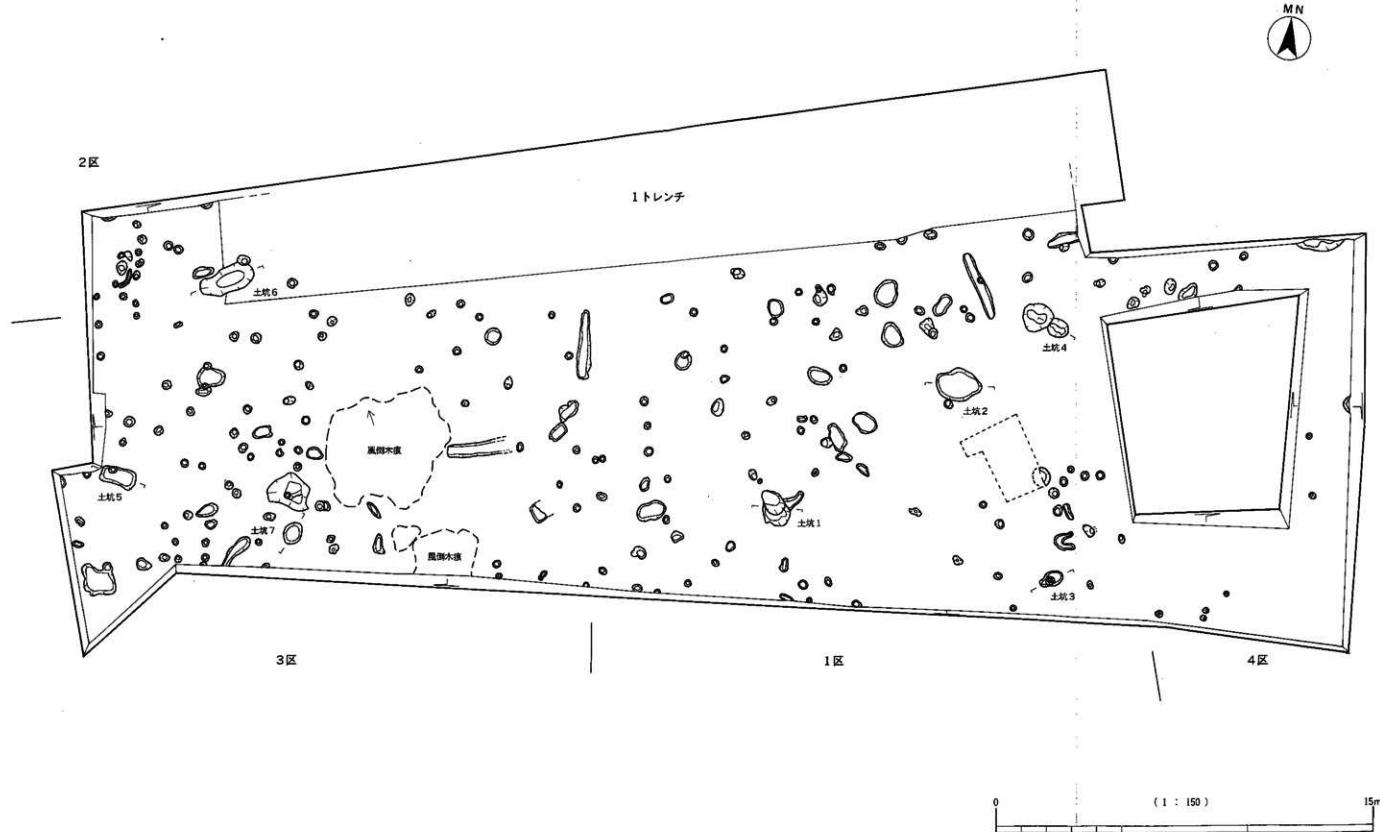
土坑5の形態は平面形が長方形、断面形が浅い掘り方の逆台形を呈する。法量は平面の長軸142cm×短軸60cm、深さ12cmを測る。底面はやや平坦な面をもつ。覆土には地山であるVI～VIII（アカホヤ）層土を含む層が見られる。

土坑6の形態は平面形が歪な楕円形、断面形が逆台形を呈する。西側の壁面が階段状に複数の平坦面をもっている。法量は平面の長軸205cm×短軸75cm、深さ35cmを測る。覆土には、地山であるVI～VIII（アカホヤ）層土を含む層が見られる。その他に密接して小土坑と柱穴が存在する。

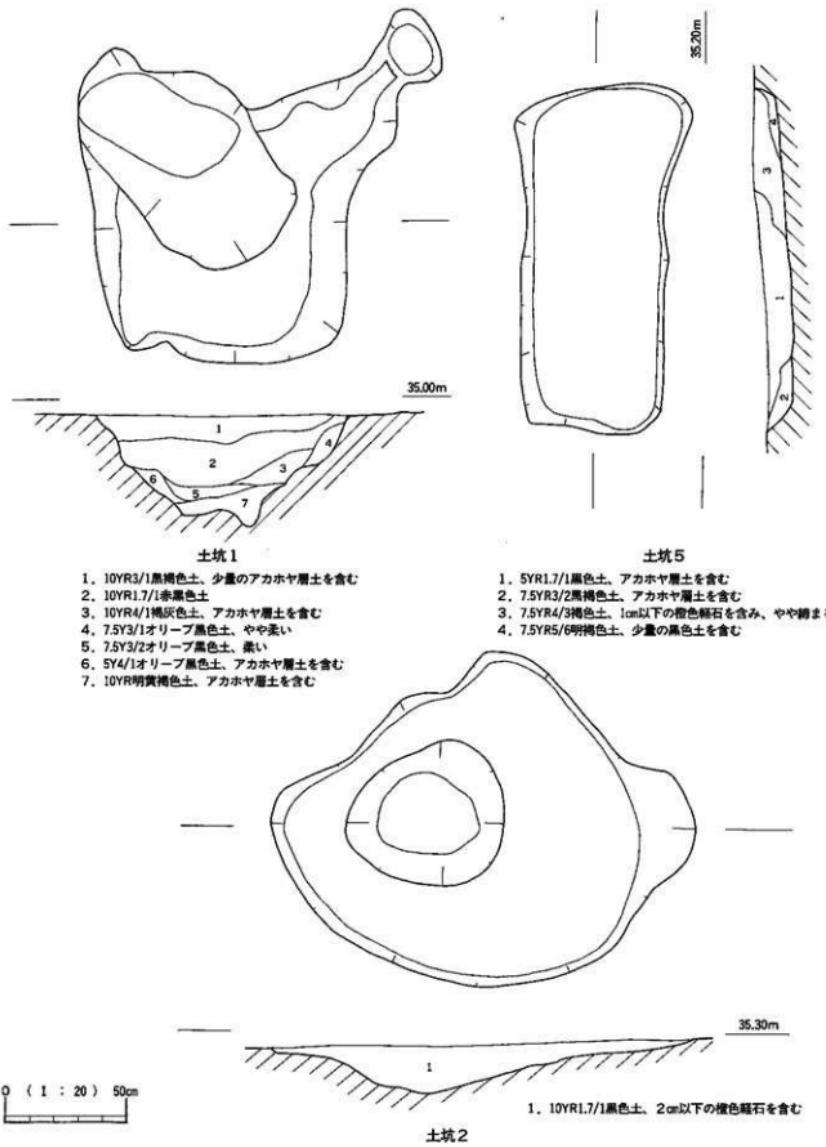
土坑7は、平面形がやや楕円形、断面形が浅いレンズ状を呈する。法量は平面の長軸90cm×短軸72cm、深さ11cmを測る。



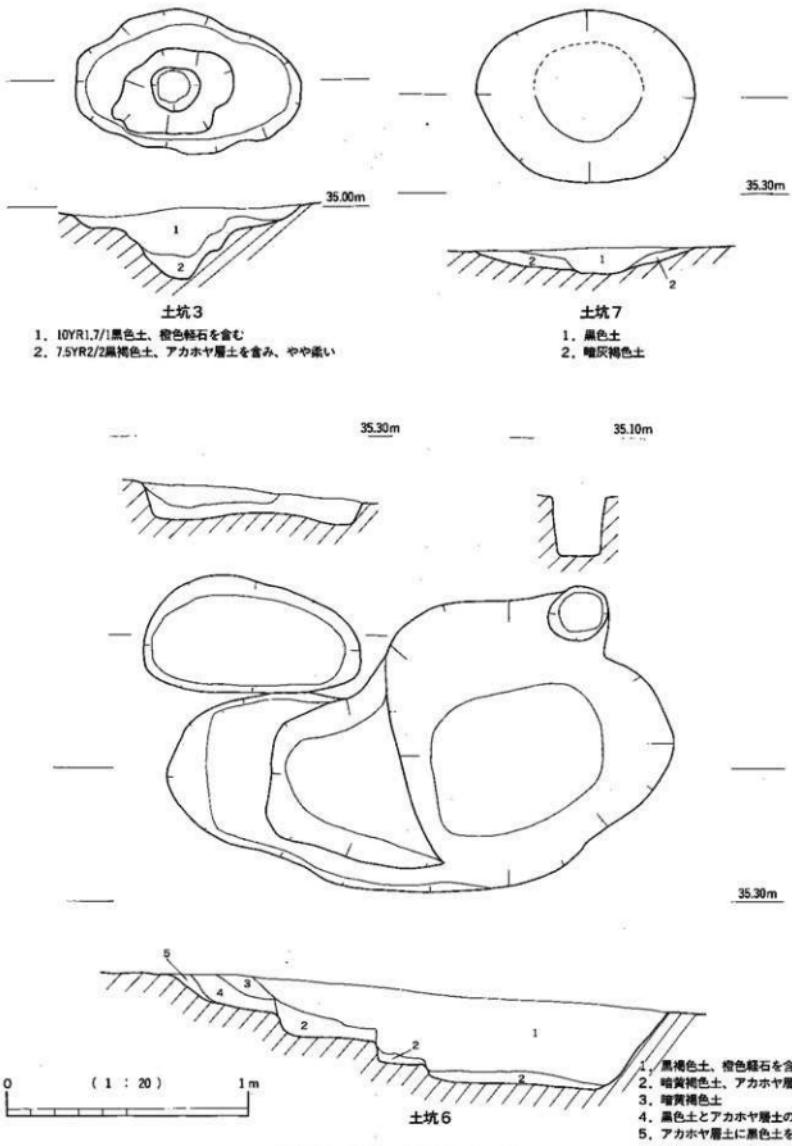
第8図 東区-2区 土層断面と遺構・遺物配置



第9図 東区-検出面1 (V層上面) 遺構配図



第10図 東区 土坑 1・2・5



第11図 東区 土坑 3・6・7

風倒木痕

3区中央より風倒木痕と考えられる土層の横転が見られた。横転した地層は幅5.1m×深さ4.8mを測り、北北西に向かって倒れたことが想像される。時期は、横転の上位層に第III層が確認できることから、それ以降の時期に倒木したものと考えられる。

2. 検出面2の成果

第X層上面で検出した遺構は、集石と柱穴のみである。対応する遺物包含層は第IX層と考えられる。時期は、層位と出土土器から縄文時代早期と考えられる。

ア) 遺物分布と遺構配置

土器は集石1に伴って土器65が出土しており、その他は集石1の構成礫のみである。

遺構は西側に散在しており、集石1の周間にやや集まる。それ以外の遺構は検出しなかった。

イ) 遺構

遺構は集石を1基と柱穴4基のみを検出した。

集石1は、掘り込みを作っており、赤色化して破碎の見られる川原石が集まる。疊密度は疎である。疊の総重量は1,153gを量る。疊の平面分布は全体で長軸215cm×短軸114cmの範囲に集まっている。この範囲の北東に最も疊の集中する部分があり、径65cmを測る。疊の垂直分布では、疊の上下の重なりが前述の集中部で見られる。また、垂直分布では、掘り込みの北東部に落ち込みがあったことが推測される。全体としても、第X層上面が東から西に下る地形であるが、疊分布はほぼ水平に広がっている。

柱穴1は、平面形が円形を呈して、法量が径28cm×深さ15cmを測る。

柱穴2は、平面形が円形を呈して、法量が径23cm×深さ13cmを測る。

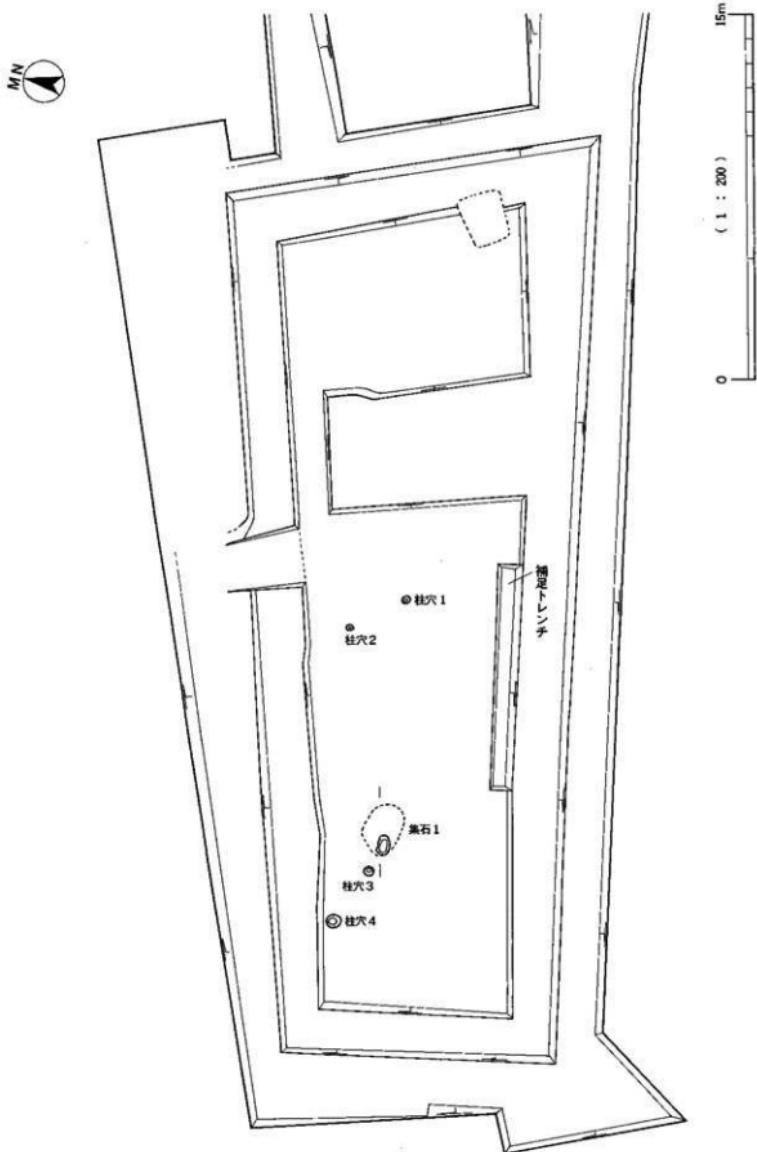
柱穴3は、平面形が円形を呈して、法量が径23cm×深さ9cmを測る。

柱穴4は、平面形が円形を呈して、法量が径48cm×深さ16cmを測る。

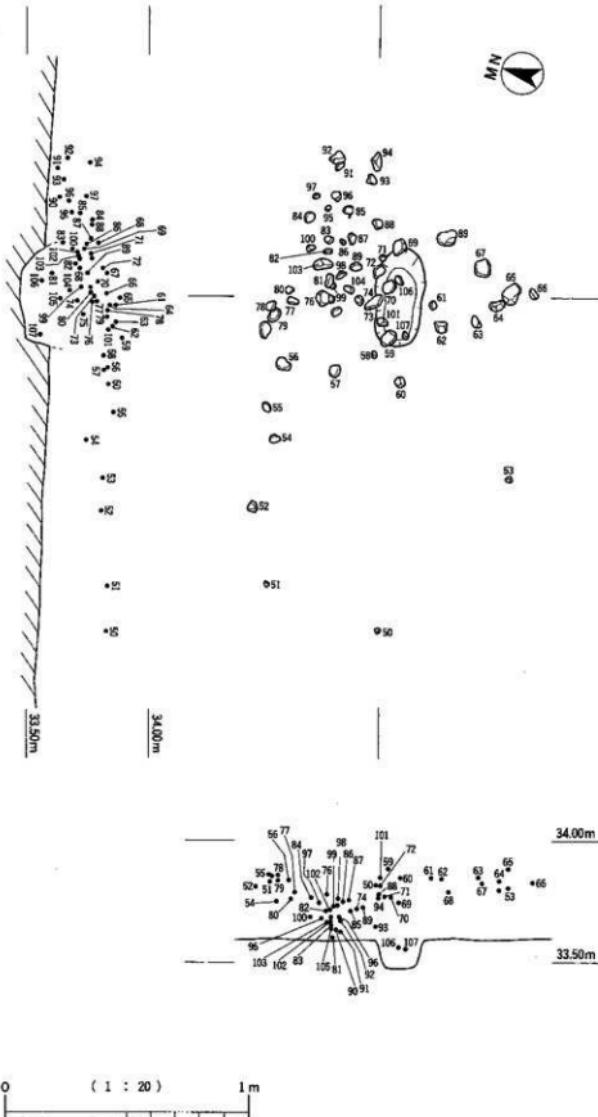
3. 補足トレンチの成果

第X層上面の調査区中央部に、南壁に沿って補足トレンチを設けて下層を確認した。遺物・遺構は存在しなかったが、土層の堆積状況に特長が見られた。

土層は、砂層とシルト層が互層状に堆積しており、シルト層は色調が青灰色になる。下層に行くほど青味は強くなる。水成堆積の特長に類似している。調査地点が菱田川の河岸段丘であることからも、シラス堆積後の旧河川もしくは流路の跡の可能性が考えられる。



第12図 東区 検出面2（X層上面） 造構配置



遺物番号	重量(g)	最大長さ(cm)	最小幅(cm)	備考
50	3.63	17.14	11.24	
51	2.27	16.88	10.63	
52	30.04	39.17	24.33	
53	10.76	26.97	12.67	
54				
55	13.51	30.85	21.00	
56	95.93	68.98	22.63	
57	113.63	66.85	28.48	
58	12.80	33.54	10.07	
59	37.39	52.91	19.26	
60	34.66	35.46	26.32	
61	37.80	48.34	22.96	
62	47.80	47.29	20.81	
63	76.25	51.47	24.69	
64	67.01	48.88	27.54	
65	119.00	76.22	25.86	
66	24.10	39.64	16.06	
67	117.04	64.21	42.24	
68	69.79	53.33	29.38	
69	116.72	57.44	31.07	
70	85.34	56.36	32.13	
71	40.81	36.84	27.54	
72	99.52	50.47	31.97	
73	64.95	82.09	21.79	
74	86.51	57.26	26.35	
75	73.55	40.27	17.64	
76	34.82	54.54	18.91	
77				
78	66.61	42.04	27.84	
79	119.97	68.25	38.28	
80	35.20	33.03	21.90	
81	31.79	45.90	27.54	
82	128.26	77.76	26.35	
83	13.46	31.62	17.55	
84	56.38	51.43	20.13	
85	82.58	46.62	33.19	
86				
87	33.54	34.47	23.47	
88	86.49	43.38	29.20	
89	110.40	65.33	34.16	
90	52.90	53.31	25.54	
91	13.60	31.17	24.33	
92	100.38	66.75	20.92	
93	48.64	41.97	22.30	
94	64.10	70.63	26.53	
95	44.93	36.39	25.71	
96	5.32	29.79	13.28	
97	5.27	23.65	13.32	
98	100.52	57.20	35.58	
99	10.84	29.77	13.25	
100	27.81	49.74	20.14	
101	33.43	35.68	29.89	
102	86.91	47.34	30.05	
103	13.41	36.62	16.16	
104	75.83	41.36	30.25	
105	114.25	53.74	28.24	
106	56.80	50.54	34.09	
107	67.65	51.12	25.78	

第2表 集石1 縦一覧

第13図 集石1

第V章 西区の調査成果

第1節 調査の方法

1. 調査の環境

調査対象範囲の西側を西区と呼称して、8月下旬から10月下旬まで調査を実施した。

西区は、現況が畠地であり、地境には植木の列が存在していた。また、調査区西側は菱田川に向かって下る崖地となる。崖下には菱田川とその川原が広がる。

2. 調査の方法

調査区は、対象範囲内に任意の調査範囲を設けてから行ない、西側から順に「1区」・「2区」と呼び、計4区を数えた¹。

調査は、調査区中央に存在する植木列を残したまま²、第I層を重機で取り除いて行なった後、第II～IV層と第VII・VIII層を人力で掘り下げた。ただし、第V・VI層と第X層については調査員立会のもと重機で掘り下げを行なった。なお、第XI層については、部分的に補足トレンチを設けて人力で掘り下げた。

検出面2の調査に際しては、現在の地表面から深さが2mを超えることから、安全確保のため段掘りを施した。

第2節 調査の経過

以下、調査日誌より略述する。

平成13年8月16日（木）、資材の搬入と重機による表土の除去を行なう。

17日（金）・18日（土）、調査準備と表土の除去を行なう。

20日（月）～22日（水）、池田降下軽石包含層上面まで掘り下げることを目指して、1区を人力により掘り下げる。

23日（木）、1区で遺構を検出・記録する。

24日（金）、2区を掘り下げる、遺物が出土、記録する。

27日（月）、1区の遺構調査、2区の遺物取り上げ、4区を掘り下げる。

28日（火）、1区の遺構調査、2区を掘り下げて遺構を検出、4区の遺構を検出する。

29日（水）、1～3区の遺構検出と調査を行なう。

30日（木）、1区の遺構調査を行なう。

31日（金）、1・2区の遺構調査、4区の遺構調査・記録を行なう。

9月3日（月）～7日（金）、各区の遺構調査・記録を行なう。3区の掘り下げ・調査を行なう。

8日（土）、調査の現地公開を行なう。

10日（月）、1区の遺構調査、3区のアカホヤ降下火山灰層（以下、Aha）下の縄文時代早期に比定される黒色土層を掘り下げる。

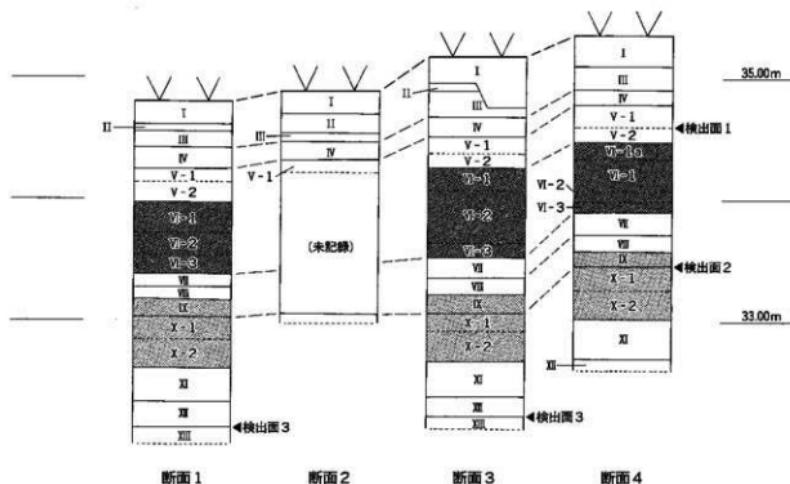
11日（火）・12日（水）、1・2区の遺構調査、3区のAha下の黒色土層を掘り下げる。

13日（木）、3区のAha下の黒色土層を掘り下げる。

14日（金）、排出土の処理を行なう。

17日（月）、1区の竪穴住居の調査、3区の埋め戻し、4区の調査を行なう。

18日（火）～21日（金）、4区の調査、1区の竪穴住居の調査を行なう。



(土色・土質詳細)

西区-基本土層

層番号 土色・土質の詳細

- 第 I 層 : SY3/1オリーブ黒色土、多量の1mm以下の白色砂粒を含む
 第 II 層 : SBG3/1暗青灰色土、やや多量の5mm以下の白色砂粒を含む
 第 III 層 : 7SYR2/2黒褐色土
 第 IV 層 : 10SG2/1青黒色土
 第 V-1 層 : SY2/1黒色土、少量の1mm以上の2SY7/8黄色鉱石を含む
 第 V-2 層 : IOYR3/3暗褐色土、多量の10mm以上の2SY7/8黄色鉱石を含む
 第 VI-1 層 : IOYR5/8明黄褐色砂質土
 第 VI-2 層 : 2SY7/6明黄褐色砂質土、多量の7.5Y8/2灰白色砂粒・7.5YR5/8明褐色砂粒・2SY8/6黄色砂粒を含む
 第 VI-3 層 : IOYR5/8黄褐色砂質土、非常に多量の20~50mm大の粗い砂粒を含む
 第 VII 层 : 7SYR3/2黒褐色土、多量の0.5mm以下の白色砂粒を含む
 第 VIII 层 : 10YR2/2黒褐色土、多量の1~3mm大の褐色砂粒を含み、IX-1層よりよく締まる
 第 IX 层 : IOYR3/1黒褐色土、やや多量に10~50mmの10YS/2灰黃褐色の斑点が見られる
 第 X-1 層 : 2SY5/6黄褐色砂質土、やや多量の15mm大の2SY6/4にいたる黄色の斑点が見られる
 第 X-2 層 : IOYR3/2黒褐色土、やや多量に30mm以下の2.5Y3/1黒褐色土ブロックを含み、上層より堅く締まる
 第 XI 層 : 7SYR3/3暗褐色砂質土
 第 XII 層 : 7.5YR3/2黒褐色砂質土、XI層より粘性が強い

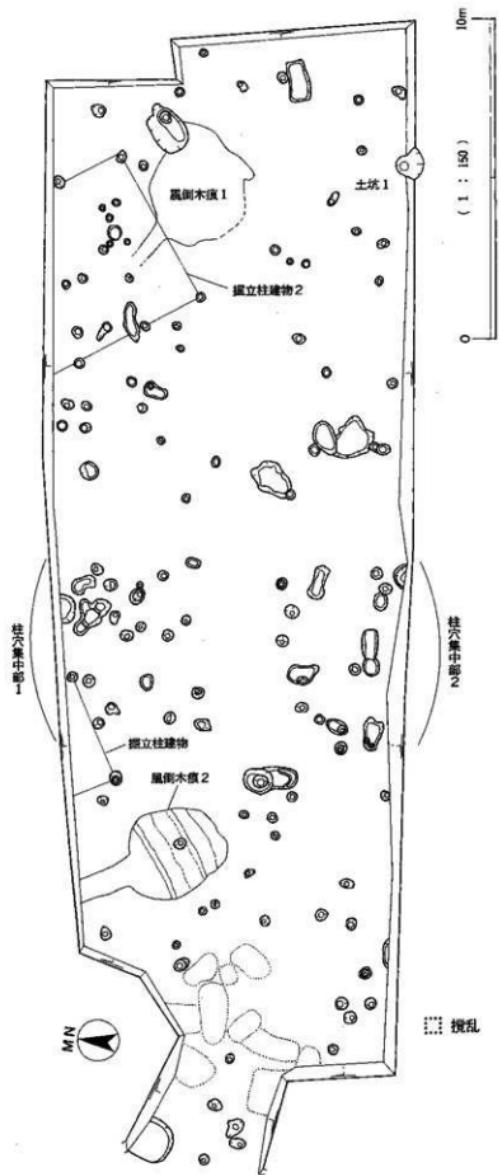
備考

縄文時代晚期と古墳時代の遺物包含層

- 「池田陣下轟石包含層」に推定
 「池田陣下轟石包含層」に推定
 「アカホヤ陣下火山灰層」に推定
 「アカホヤ陣下火山灰層」に推定
 「アカホヤ陣下火山灰層」に推定
 縄文時代早期の遺物包含層
 縄文時代早期の遺物包含層
 「蘆原陣下火山灰層」に推定
 「蘆原陣下火山灰層」に推定

- 「チヨコ層」に推定
 「チヨコ層」に推定

第14図 西区 土層柱状図



第15図 西区-3・4区 検出面1 (V層上面) 造構配置

23日 (H) ~ 10月10日 (水)、
1・2区のVI (アカホヤ) 層下
の黒色土層を掘り下げ、調査・
記録する。

11日 (木) ~ 19日 (金)、埋め
戻し・撤収作業を行なう。

第3節 層序

1. 削平状況と旧地形

現況は、東から西へと向かって低くなってしまっており、高低差は約60cmを測る。第I・II層が近世以降の耕作土と考えられ、この時期に現況のように整えたと推測される。柱状図から、それ以前はもっと傾斜の強い地形であったと考えられる。

2. 各層の概要

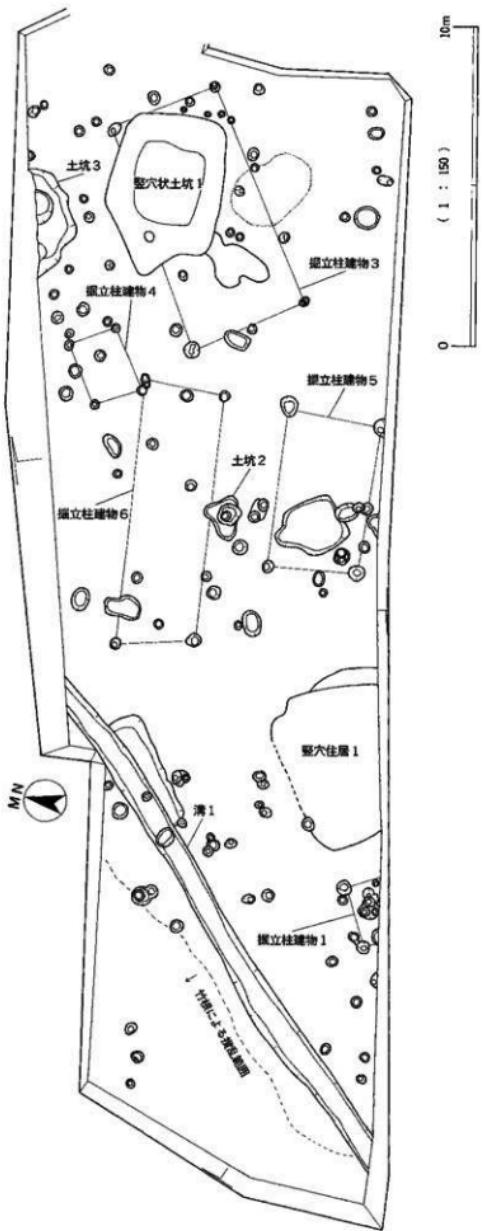
第I層： 緑色に発色した黒色土で、多量に白色砂粒を含んでいる。現在の耕作土にあたる。

第II層： 白色砂粒を含んだ黒色土である。第I・II層に含まれる白色砂粒は大正もしくは江戸時代に降下した桜島火山灰と考えられる。

第III層： 赤く発色した黒色土で、古墳時代から縄文時代晩期にかけての遺物包含層である。従来、約4,500年前噴出の御池降下火山灰層と推定してきたが、今回、古墳時代の竪穴住居内に流れ込んでいるのが確認された。そのため推定火山灰と異なる可能性が高まった。

第IV層： 青く発色した黒色土で、上層に比べてやや締まり、わずかに粘性を帯びる。

第V層： 多量に黄色軽石を含



第16図 西区-1・2区 検出面1 (V層上面) 遺構配置

む層である。軽石は約5,400年前噴出の池田降下軽石と考えられる。

第VI層： 明黄褐色の砂質土で、下層に行くほど粒度が粗くなる。約6,300年前噴出のアカホヤ降下火山灰層と考えられる。

第VII層： 硬い黒色土で、多景に白色砂粒を含んでいる。縄文時代早期の遺物包含層である。

第VIII層： 第VII層よりさらに硬い黒色土で、多景に橙色砂粒を含んでいる。同じく縄文時代早期の遺物包含層である。

第IX層： 灰黄褐色の斑点が見られる黒色土である。無遺物層である。

第X層： にぶい黄色の斑点が見られる黄褐色砂質土で、約11,000年前噴出の蘿摩降下火山灰層と考えられる。

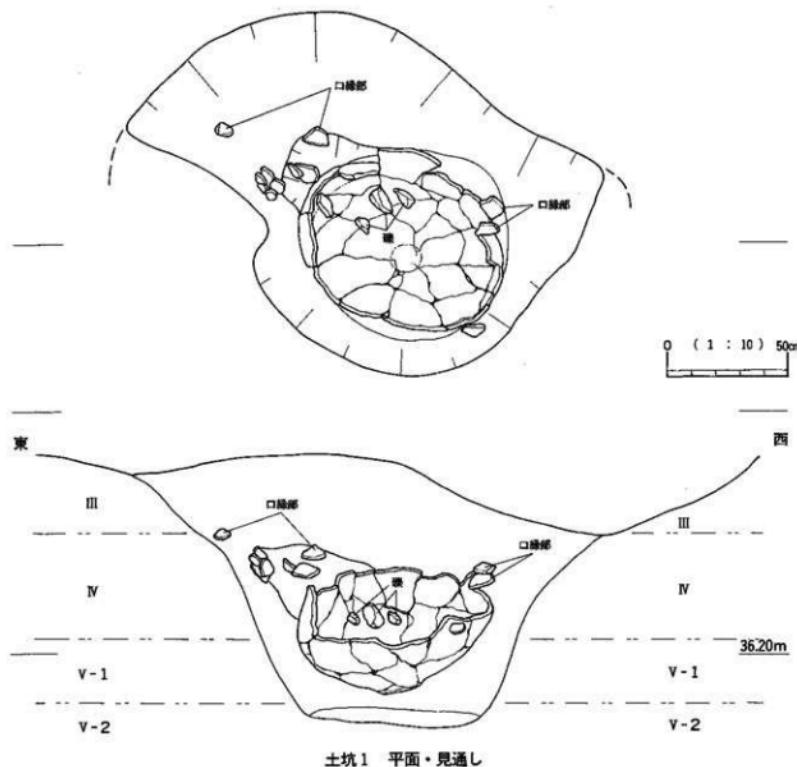
第XI層： 暗褐色の粘質土で、いわゆる「チョコ層」にあたると考えられる。

第4節 調査の成果

調査は、第V層と第X層上面において遺構精査を行なった。対応する包含層は、前者が第III～IV層で、後者が第VII・VIII層である。時期は、前者がおもに古墳時代から縄文時代晚期、後者が縄文時代早期である。以下、検出面ごとに成果を略述する。

1. 検出面1

第V層上面で遺構を検出した。対応する包含層は第III～IV層であり、時期は現代から縄文時代晚期にかけてである。おもに古墳時代から縄文時代晚期と考えられ、この時期の遺物は第III層に集中する。



土坑1 平面・見通し

第17図 西区 土坑1

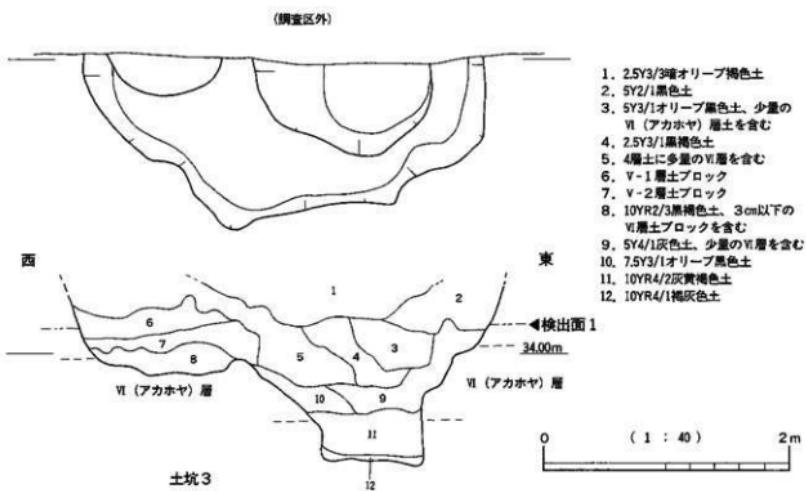
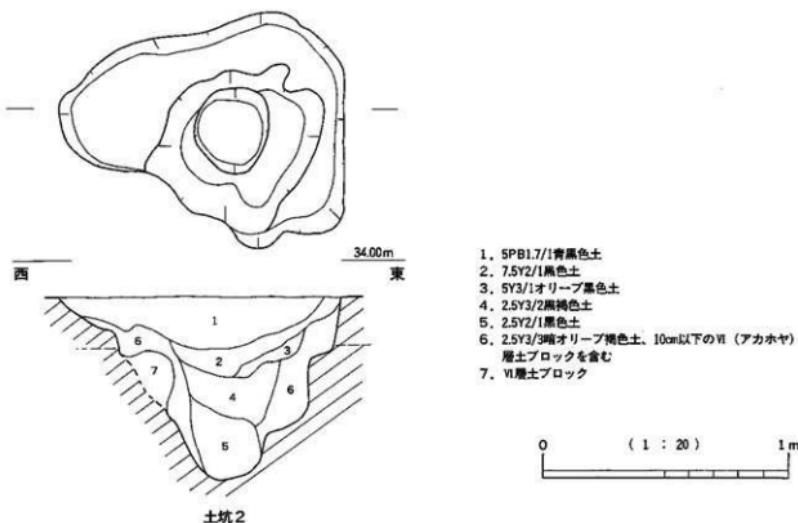
ア) 遺物の分布

包含層出土の遺物は少ない。とくに3・4区はほとんど無く、出土は1・2区に偏っている。1・2区についても、散見できる程度であった。出土物の半数は遺構に伴った遺物であり、その大多数は溝1覆土内から出土している。

イ) 遺構の配置

配置状況としては、柱穴が全区に見られるが、何らかの施設の可能性がある掘立柱建物や竪穴住居・溝などは1・2区に集中している。これらの時期は遺物からおもに古墳時代と考えられ、古墳時代の遺構群は西側に偏る傾向にある。

一方、東の1・2区には柱穴の集中する範囲が2ヶ所見られ、東区の成果も合わせると縄文時代晩



第18図 西区 土坑2・3

期の影響が大きい範囲にあたると考えられる。

ウ) 遺構

多数の柱穴と土坑、竪穴状土坑・竪穴住居・溝・風倒木痕などを検出した。以下、遺構ごとに略述する。

a. 土坑

土坑1

4区南端で検出した土器が埋設された土坑である。検出面での規模は、平面が長軸97cm×短軸76cm、深さ53cmを測る。推定される規模は平面で長軸110cm×短軸90cmを測り、平面形がやや楕円形を呈したと考えられる。掘り方の断面形は逆台形を呈する。埋設された土器は浅鉢であり、やや斜めに傾くが底部を下にしてほぼ据えられた状態で出土した。時期は縄文時代晩期と考えられる。浅鉢54は口縁が後世の搅乱⁴により破壊されているが、本来は完形であったと考えられる。土器内には、3点の礫が見られる。性格としては、詳細は不明であるが、上坑墓の可能性も考えられる。

土坑2

1・2区のほぼ中央で検出した。形態は平面形が歪んだ楕円形、断面形が二段掘りの逆台形を呈する。中央部が柱穴状に深くなり、一段目の底面はやや平坦な面をもっている。規模は平面の長軸116cm×短軸97cm、深さ76cmを測る。覆土には地山ブロックとの混合土⁵層が見られる。性格は不明であるが、土坑ではなく柱穴の可能性も考えられる。

土坑3

2区北端より検出した。形態は平面形がやや歪な楕円形、断面形が二段掘りの逆台形を呈する。底面はいずれも平坦に近く、とくに二段目の底面は面も整えてある。規模は大きく、平面が長軸329cm×深さ68~148cmを測る。覆土中からは一段目の底面付近において、軽石製品75・76を含む5点の軽石が1ヶ所に集まって出土した。性格は不明である。

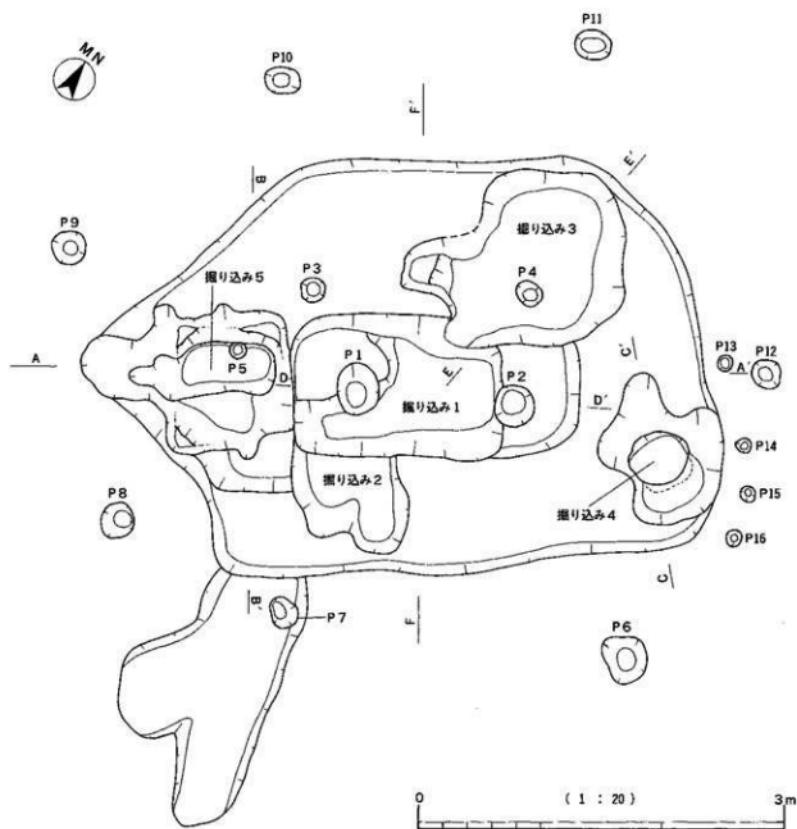
竪穴状土坑1

2区中央で検出した。検出時には中央に多量の地山ブロックを含んだ黒褐色土、その周りに黒色土が輪状に巡っており、掘り下げると浅い底面に複数の掘り込みが存在した。中央の掘り込みに1基の柱穴があり、北東側にはやや小型の柱穴2基が並行する。また、周囲には不規則ながら円形に並ぶ柱穴が見られる。これらのことから「ベット状遺構」をもった竪穴住居が考えられるが、掘り方が浅くて平面形が歪なことや柱穴が土坑に伴うものなののかが不明であることから、断定はできない。そのため住居跡の可能性を含んだ土坑の意味で「竪穴状土坑」と呼称した。

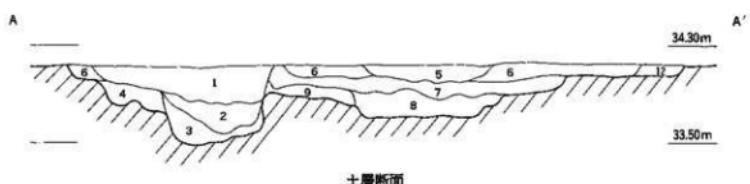
形態は平面形が歪な方形を呈するが、本来の掘り方が浅く、検出面では端部が失われた可能性がある。断面形はおもに二段掘りの逆台形を呈する。規模は平面が長軸257cm×短軸172cm、一段日の底面で深さ5cmを測る。

掘り込み1は、底面中央にあり、Pit 1・2が存在する。形態は平面形が長方形を呈して、断面が二段掘りとなる。規模は平面で長軸117cm×短軸57cm、深さ14~23cmを測る。覆土の堆積状況からは、一旦は充填状況の状態まで掘削後、覆土9・11層を充填もしくは貼り付けて、再度、覆土8層が堆積の掘り方まで掘り込んだ可能性が考えられる。

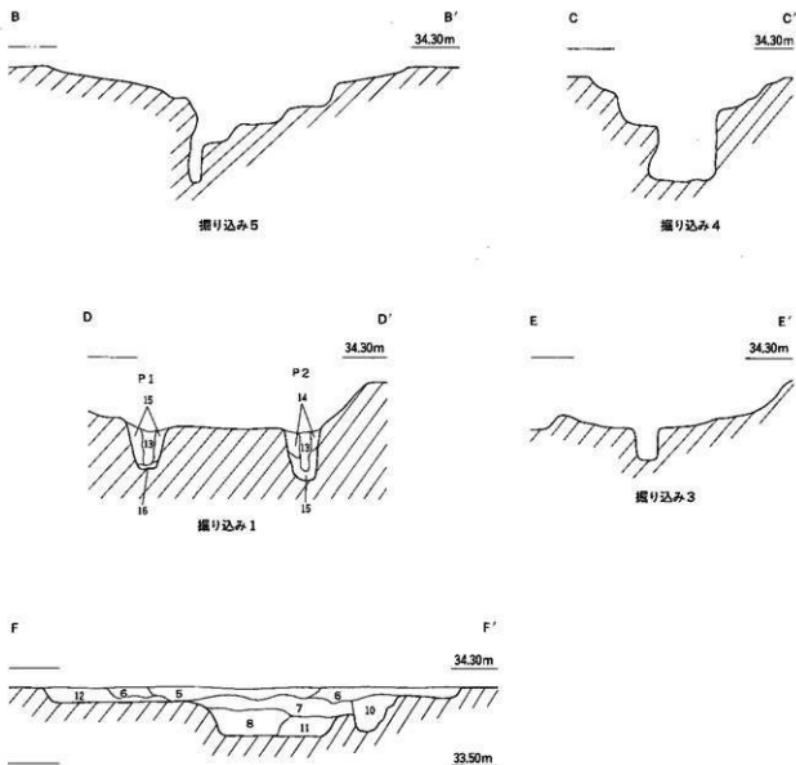
掘り込み2は、掘り込み1へと続いており、やや歪な掘り方をもっている。形態は平面形が不定形、断面形が逆台形を呈する。規模は平面で幅46cm×深さ7cmを測る。掘り込み1と合わせると外から内へと降りる階段状にも見える。



完掘状況



第19図 竪穴状土坑（1）



[土色・土質詳細]

- N2/0黒色土
 - 10YR2/2黒褐色土
 - 10YR3/1黒褐色土に少量のアカホヤ(VI)層土を含む
 - 10YR1/1黒褐色土に少量の2cm以下の鉄石を含む
 - 10YR5/2灰黄褐色土とVI-3層土との混合土
 - 10YR2/2黒褐色土に少量の10cm以下のVI-1層土ブロックを含む
 - 7.5YR1.7/1黒色土、極少量の鉄石を含む
 - 7.5YR2/2黒褐色土とVI-1層土との混合土、とくにアカホヤ(VI)層土は5cm以下のブロック状に見られる
 - 2.5YR4/2暗灰褐色混合土、黒色土とVI-2・3層土の混合と考えられる
 - 10YR3/2黒褐色土混合土
 - 2.5YR3/3暗オリーブ色土とアカホヤ(VI)層土との混合土
 - 10YR5/2黄褐色土、極少量の黒色土が混ざる、地山か
- ※ ここでの「混合土」とは、異なる土が人为的に混ざった七層と捉えて、混ざり混合から2つに分けた。混ざる前の2層が分かるものと分からないものである。前者が5・8・9・11層、後者が10層である。

第20図 穴状土坑1 (2)

掘り込み3は、掘り込み1の北側に連なっている。形態は、平面形が一部の突出した方形、断面形は壁面の緩やかなレンズ状を呈する。規模は平面で長軸89cm×短軸73cm、深さ18cmを測る。底面にはPit4が存在する。

掘り込み4は、底面の東隅にある。形態は、平面形が歪な不定形であるが、最も径が小さくなる位置においては円形となる。底面は楕円形を呈する。断面形は二段掘りの逆台形で二段目が袋状に広がる。規模は平面で長軸66cm×短軸56cm、深さ43cmを測る。覆土には、一部に地山ブロックを含んだ黒色土が堆積していたが、炭化物などは見られなかった。形態からは貯蔵穴が考えられるが、規模は小さい。

掘り込み5は、底面の南西側にある。形態は平面形の一部が突出した方形、断面形は二段掘りの逆台形を呈する。底面には柱穴が存在するが、掘り込み5に切り替っている。掘り込み5も土坑の他の覆土を切り込んでいることから、時期の異なる可能性がある。壁面途中には、同じ高さに揃えた平坦面が存在する。規模は平面で長軸87cm×短軸63cm、深さ26cmを測る。

柱穴は、規模と配置からいくつかに分けて考えられる。それぞれは①底面のPit1・2、②底面のPit3・4、③外周のPit6～12、④外周のPit13～16である。分類ごとに性格が異なったと考えられる。各柱穴の詳細は表に述べてある。

Pit No.	径(cm)	深さ(cm)	柱間距離(cm)	Pit No.	径(cm)	深さ(cm)	柱間距離(cm)		
P 1	14	16	P 1-P 2	66	P 9	14	23	P 9-P 10	113
P 2	18	21		P 10	14	53	P 10-P 11	132	
P 3	10	10	P 3-P 4	91	P 11	15	15	P 11-P 12	153
P 4	9	11		P 12	13	11	P 12-P 6	132	
P 5	8	41		P 13	6	10			
P 6	19	34	P 6-P 7	146	P 14	7	28	P 13-P 14	35
P 7	12	24	P 7-P 8	76	P 15	6	10	P 14-P 15	19
P 8	14	30	P 8-P 9	114	P 16	7	12	P 15-P 16	18

第3表 積穴状土坑1 柱穴一覧

豊穴住居1

1区南端において約2/3のみを検出した。残りは調査区外に続いている。形態は、平面形が隅丸方形、断面形が逆台形を呈する。ただし、壁面は反り返り底面が広くなる。規模は平面が一辺4.7m×深さ0.8mを測る。

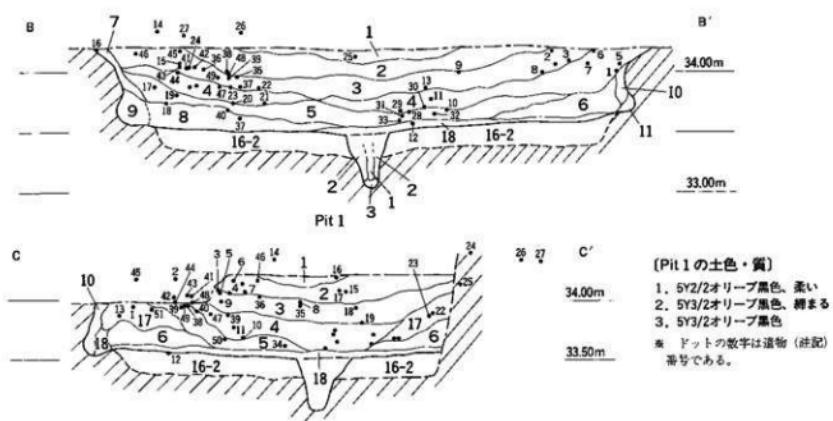
底面の上には、貼り床と考えられる混合土(12・16層)が見られる。16層下面は、断面BB'・CC'の記録時において比較的平坦と考えたが、断面AA'において細かな凹凸面であることを確認した。これらのことから、掘り方の掘削時に生じた凹凸面を貼り床によって、平坦に整えたと考えられる。また、貼り床の床面には、黒色土がまだらに堆積する範囲①が5ヶ所で見られる。

底面の中央にはPit1が存在する。また、東隅の角には小土坑があり底面にPit2がある。他に柱穴が掘り方の外にもあり、Pit4・5は掘り方の上場に並行している。柱穴の近くには浅い凹み(範囲②・③)が見られる。

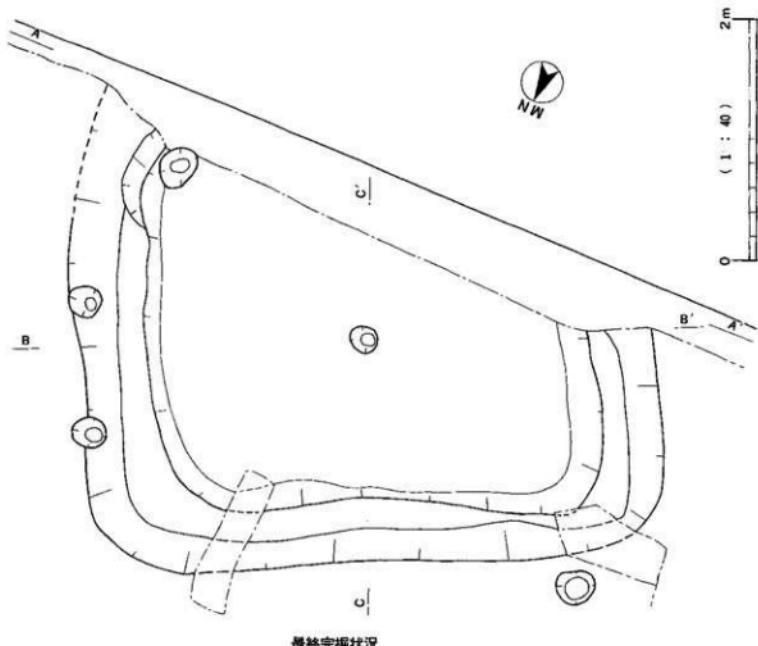
それぞれの柱穴の規模は、以下のとおりである。

Pit1が径43cm×深さ46cmを測り、埋土には明瞭な柱痕が残る。柱痕は幅10cmを測る。

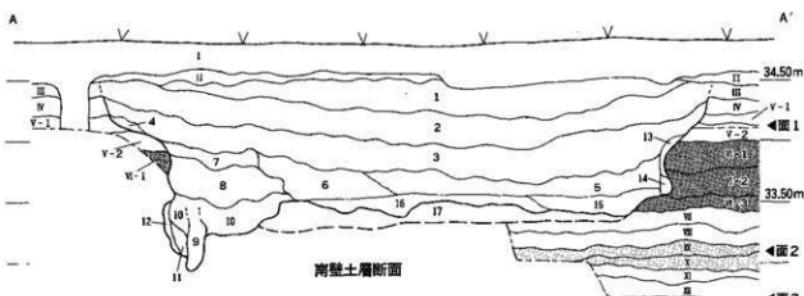
Pit2は小土坑底面に存在し、土層断面には柱痕跡が残る。柱痕は幅15cmを測る。小土坑は平面形が方形と思われ、一辺が105cm×床面からの深さが24cmを測る。この小土坑は土層断面からは、盛土状に土を盛り上げた可能性が考えられる。



第21図 積穴住居1 (1)



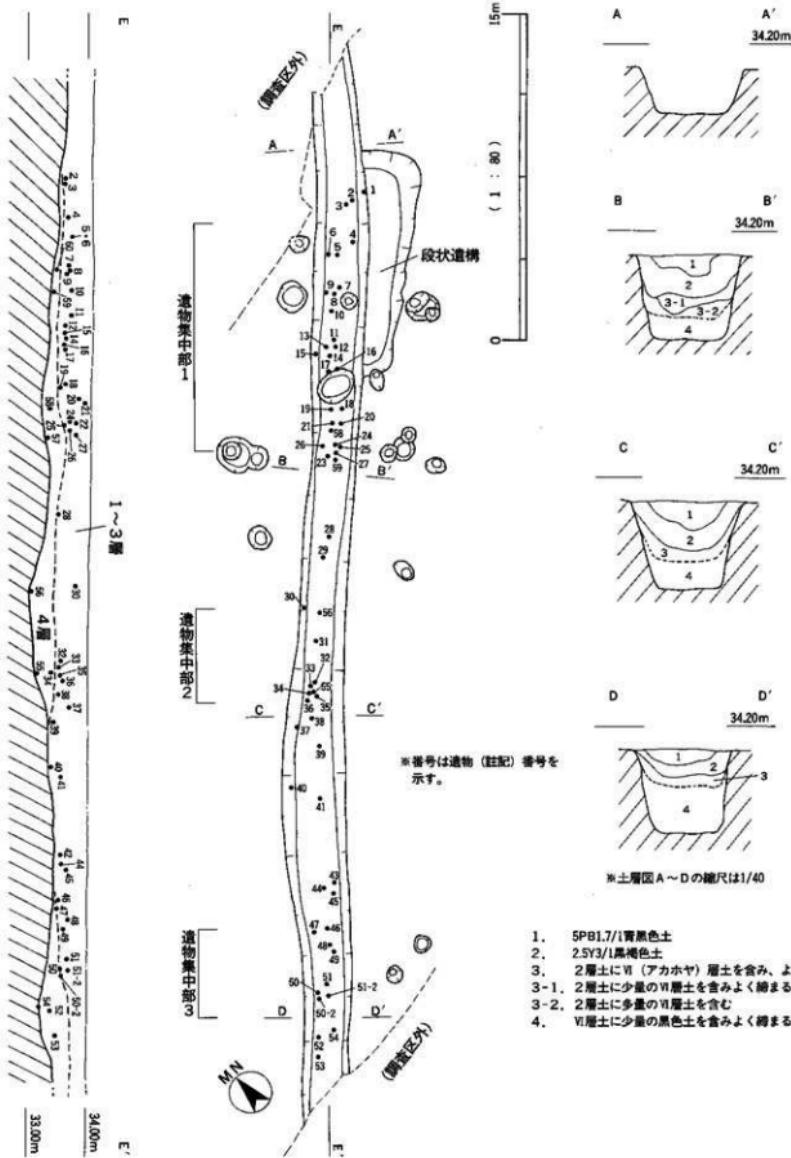
最終完掘状況



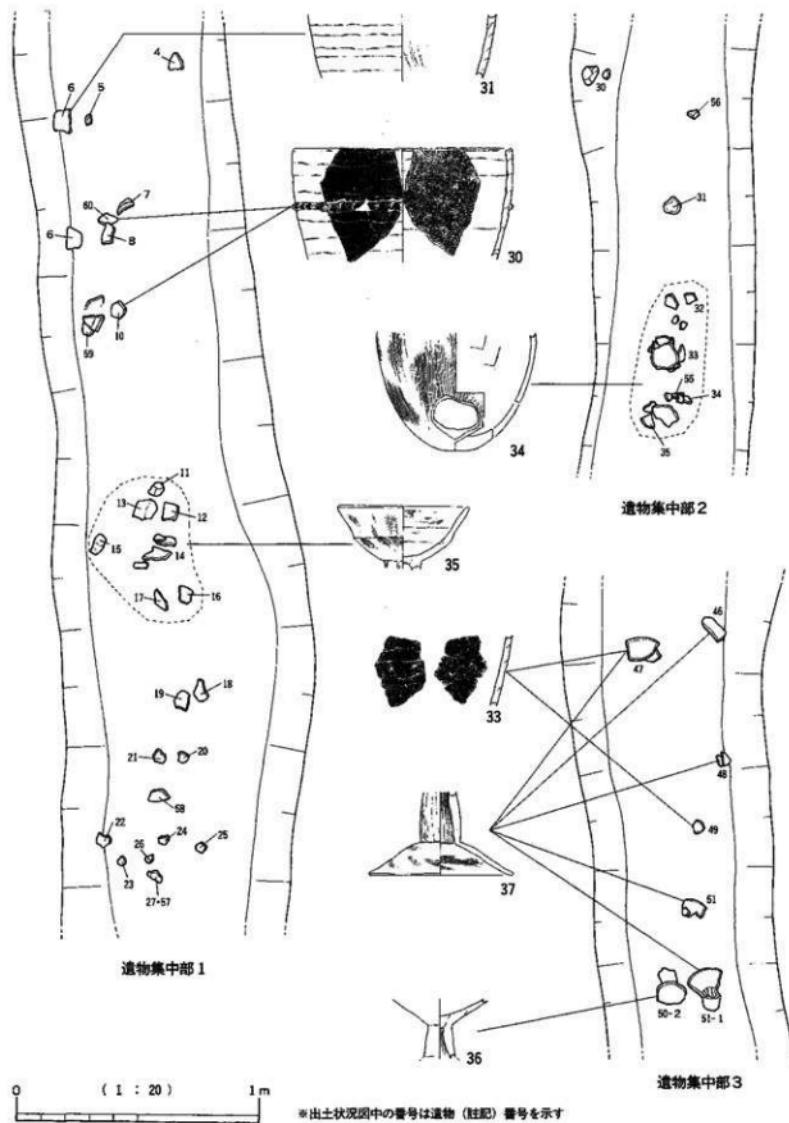
〔土色・土質詳細〕

1. N2/0黒色土
2. 7.5YR2/2黒褐色土に、2.5Y3/2黒褐色の斑点が見られる
3. 5Y2/1黒色土。やや多量に5mm以下の中黄色結石を含む
4. 7.5YR2/2黒褐色土
5. 7.5YR2/2黒褐色土と5BG2/1青黒色土の混合土。多量の黄色結石を含み、やや柔い
6. 7.5YR2/2黒褐色土。多量の黄色結石を含む
7. 10Y3/1黒褐色土。アカホヤ(VI)層土が混ざり、硬く結まる
8. 10Y3/1黒褐色土とアカホヤ(VI)層土の混合土。硬く結まる
9. 5G2/1緑黒色粘質土
10. 7.5YR2/2黒褐色土と5BG2/1青黒色土の混合土。多量の黄色結石を含み、やや柔い
11. 7.5YR2/2黒褐色土と5BG2/1青黒色土の混合土。やや柔い
12. 2.5Y3/1黒褐色土。アカホヤ(VI)層土が混ざる
13. 10YR2/3黒褐色土。アカホヤ(VI)層土が混ざる
14. 10Y3/1黒褐色土。アカホヤ(VI)層土が混ざる
15. 2.5Y3/3暗オリーブ褐色土と非常に多量のアカホヤ(VI)層土との混合土
16. 2.5Y3/3暗オリーブ褐色土とアカホヤ(VI)層土との混合土
17. 2.5Y4/4オリーブ褐色土。多量のアカホヤ(VI)層土が混ざる【振り込んだものではなく、使用時に上層の土がシミ込んだ痕跡】
18. 7.5YR2/2黒褐色土

第22図 積穴住居1 (2)



第23図 溝1



第24図 溝1 遺物出土状況

Pit 3は、平面形が円形で、径28cmを測る。Pit 4が径23cm、Pit 5が径25cmを測る。両者は対になっていると思われる。柱間は61cmを測る。

壁面には、壁際に壁板の痕跡と考えられる土層（10～14層）が見られる。

覆土中からは、やや多量の土器が出土しており、覆土上位と下位に比較的集まる。しかし、土器片はほとんどが5cm以下の碎片である。接合した土器42～45を図化してある。

形態と遺物から古墳時代の堅穴住居と考えられる。

b. 溝

溝1

1区において溝1を検出した。溝1は断面形が逆台形で一直線に延びる。規模は、断面が幅62cm×深さ38～72cm、検出した全長は約17mに及んでいる。

底面の傾斜は北北東から南南西に向かって下るが、覆土4層上面では逆に北北東に下っている。この4層は地山が覆土下層の影響を受けたものか、部分的に地山を侵食したものと考えられる。そのため使用時もしく廃絶後の堆積は覆土3層からと思われる。これらのことから底面が地形の傾斜に逆らっている可能性が考えられる。性格は覆土の状況から一時的な排水路と思われるが、詳しくは不明である。

また、溝に付随して段状造構や溝に直交する柱列配置などを見られ、何らかの施設があった可能性が考えられる。

覆土からは、やや多量の土器が出土しており、三ヵ所の集中範囲が見られる。上器はおもに壺と高杯で占められ、供獻土器と考えられる壺34などが存在する。

c. 柱穴

多数の柱穴を検出した。そのうち検出時の覆土の比較において、対応すると考えられた柱列を掘立柱建物として以下に報告する。ただし、調査期間の関係から十分な検討を行っていないため、確実に掘立柱建物とは断言できない。可能性があるものとして報告する。

なお、想定される掘立柱建物群は、軸方向からおもに二つに分けられる。①群：掘立柱建物1～4・7と②群：掘立柱建物5・6である。

掘立柱建物1

桁行3間以上×梁行2間と想定されて、桁行5.5m以上×梁行5.0mを測る。

Pit No.	径(cm)	深さ(cm)	柱間距離(cm)	Pit No.	径(cm)	深さ(cm)	柱間距離(cm)		
P 1	36	64	P 1-P 2	208	P 4	40	35	P 4-P 5	223
P 2	41	35	P 2-P 3	504	P 5	36	33	P 1-P 6	256
P 3	38	32	P 3-P 4	218	P 6	29	39	P 6-P 4	271

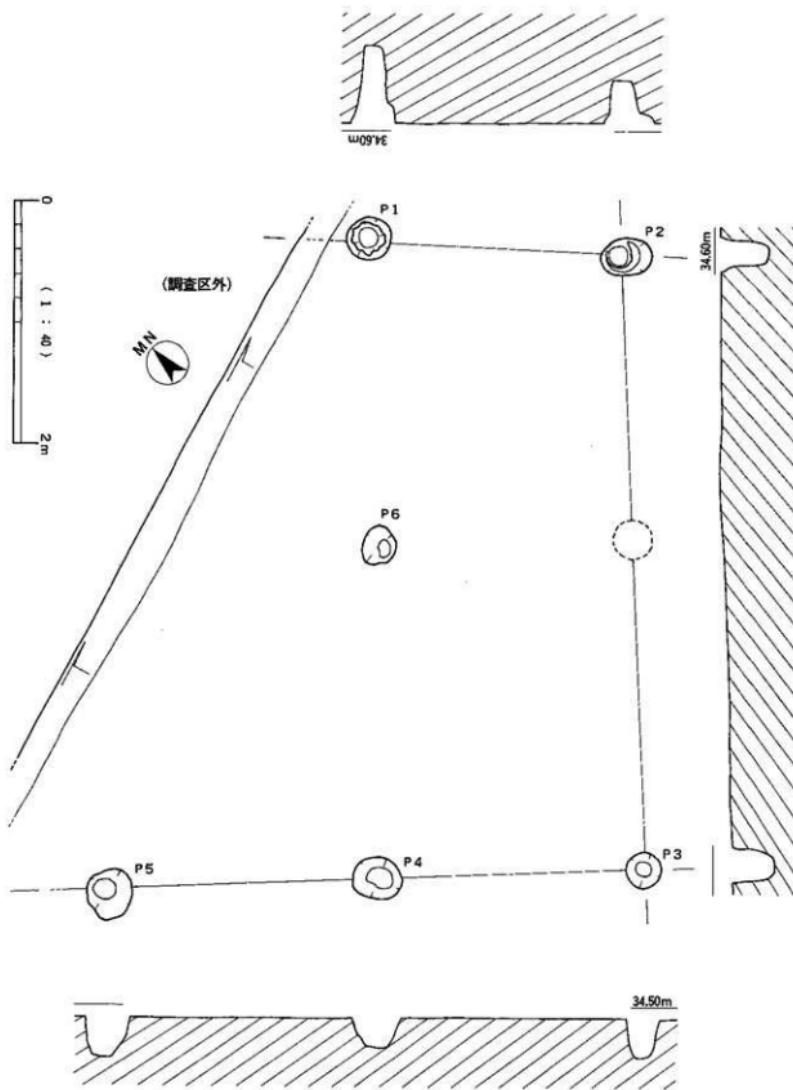
第4表 掘立柱建物1 柱穴一覧

掘立柱建物2

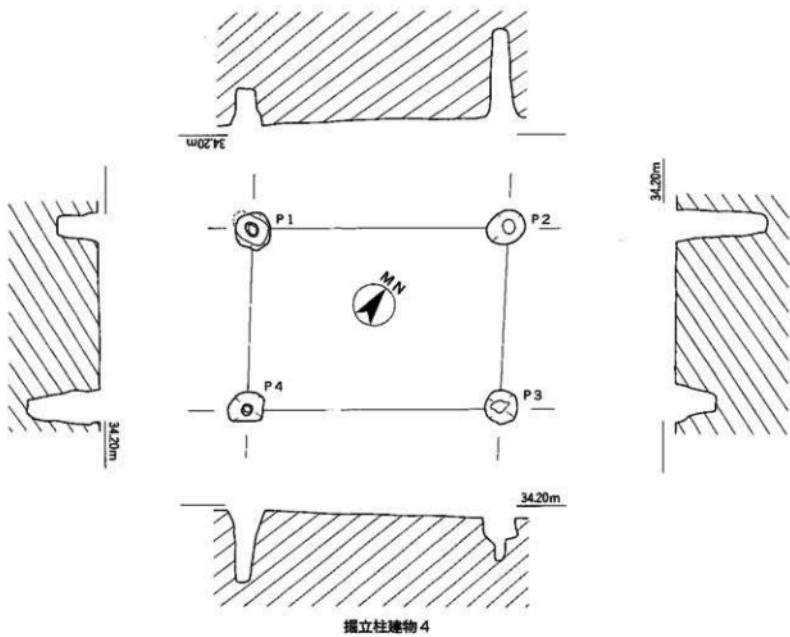
桁行1間以上×梁行1間と想定されて、梁行1.9mを測る。Pit 1は平面形が円形を呈して、径30cm×深さ49cmを測る。Pit 2は平面形が円形を呈して、径40cm×深さ66cmを測る。

掘立柱建物3

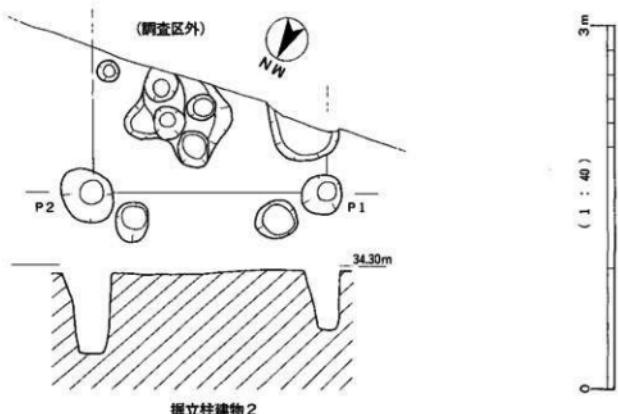
桁行3間×梁行1間と想定されて、桁行7.3m×梁行3.9mを測る。床面積は約28.5m²になる。Pit 7・8は独立棟持柱の可能性も考えられる。



第25図 挖立柱建物 1

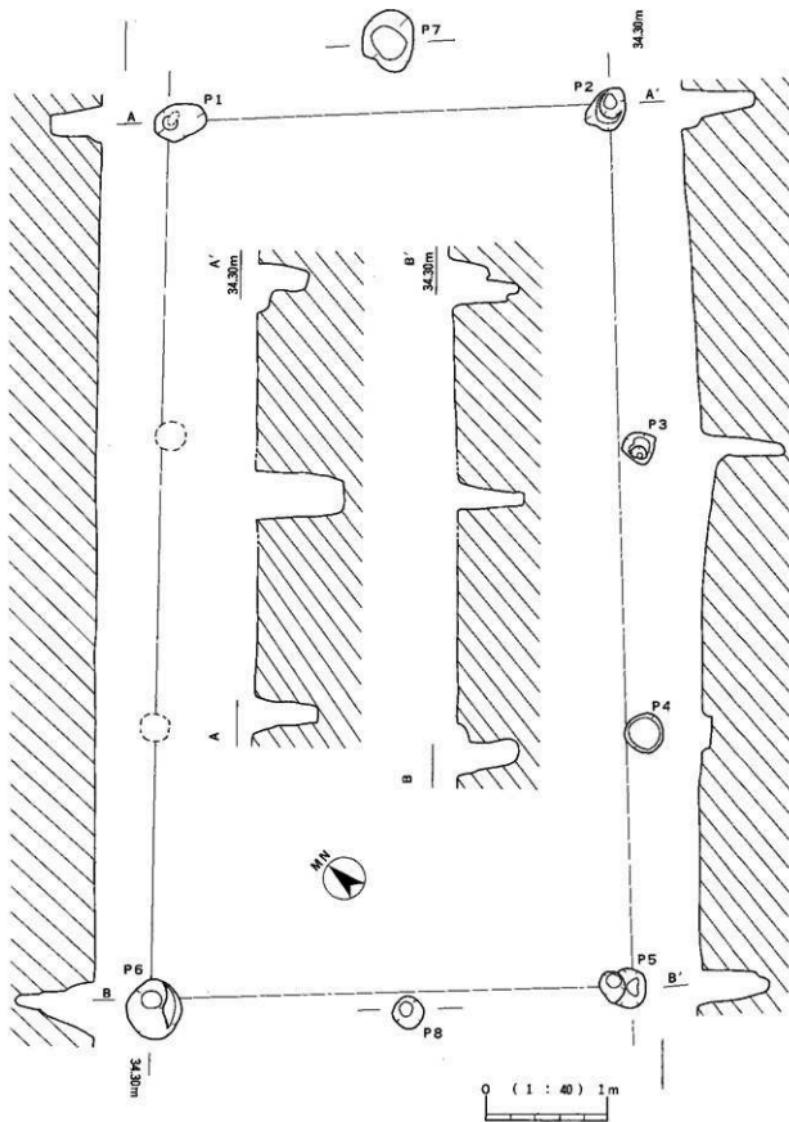


掘立柱建物 4

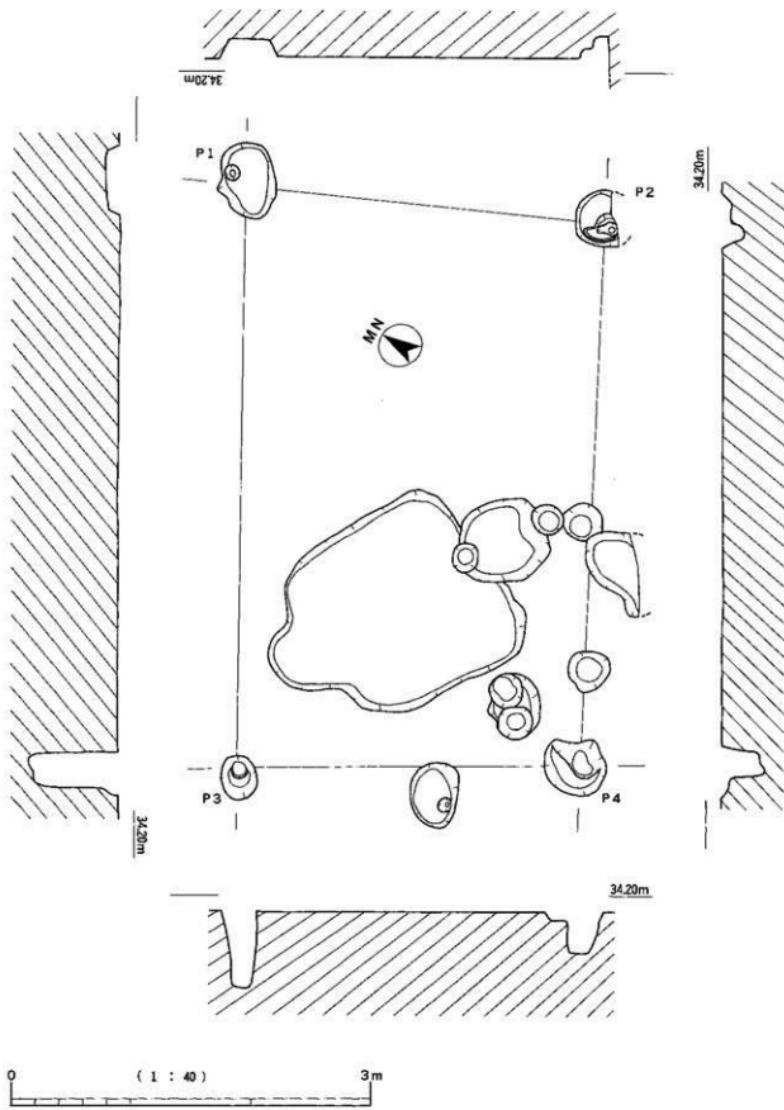


掘立柱建物 2

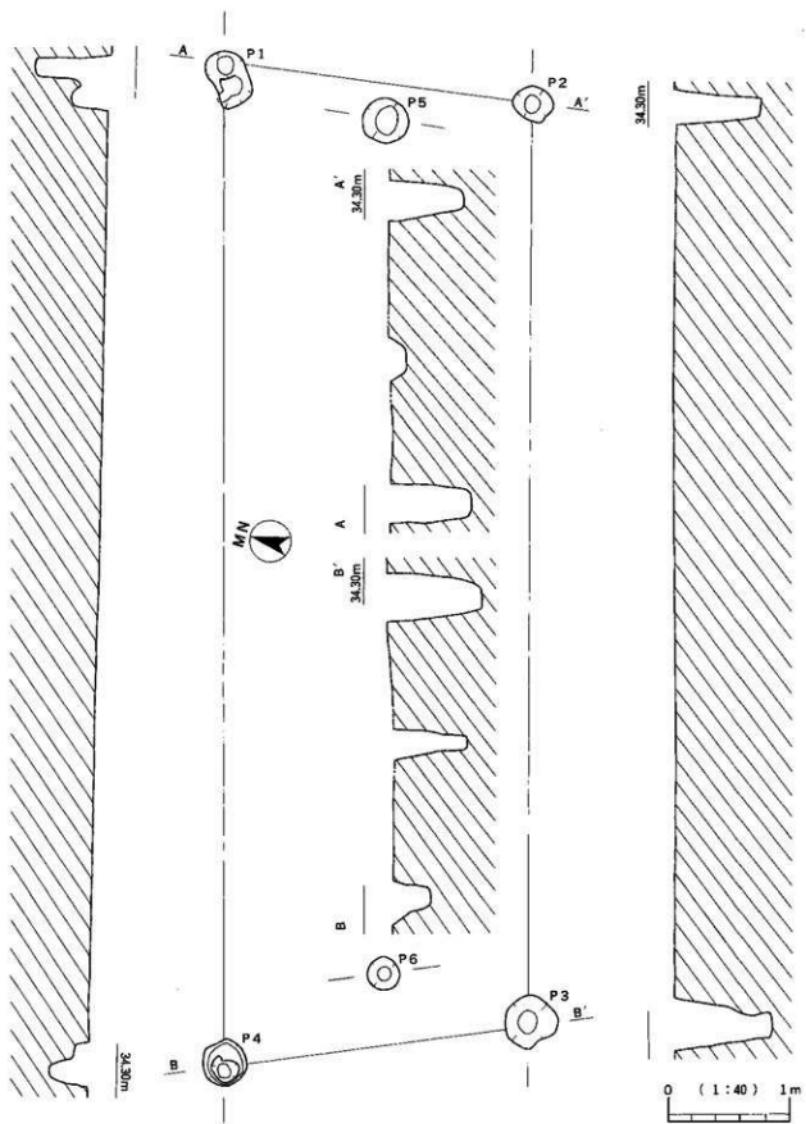
第26図 掘立柱建物 2・4



第27図 据立柱建物 3



第28図 挖立柱建物5



第29図 掘立柱建物 6

Pit No.	径(cm)	深さ(cm)	柱間距離(cm)	Pit No.	径(cm)	深さ(cm)	柱間距離(cm)
P 1	31	42	P 1-P 2	361	P 5	30	56
P 2	35	59	P 2-P 3	291	P 6	47	46
P 3	29	65	P 3-P 4	228	P 7	40	74
P 4	30	8	P 4-P 5	211	P 8	23	54

第5表 堀立柱建物3 柱穴一覧

堀立柱建物4

桁行1間×梁行1間と想定されて、桁行2.1m×梁行1.5mを測る。床面積は約3.2m²になる。

Pit No.	径(cm)	深さ(cm)	柱間距離(cm)	Pit No.	径(cm)	深さ(cm)	柱間距離(cm)
P 1	26	31	P 1-P 2	211	P 3	27	35
P 2	28	72	P 2-P 3	149	P 4	30	59

第6表 堀立柱建物4 柱穴一覧

堀立柱建物5

桁行1間×梁行1間と想定されて、桁行4.5m×梁行2.9mを測る。床面積は約13.1m²になる。

Pit No.	径(cm)	深さ(cm)	柱間距離(cm)	Pit No.	径(cm)	深さ(cm)	柱間距離(cm)
P 1	58	12	P 1-P 2	304	P 3	43	36
P 2	46	20	P 2-P 3	447	P 4	45	75

第7表 堀立柱建物5 柱穴一覧

堀立柱建物6

桁行1間×梁行1間と想定されて、桁行7.6m×梁行2.6mを測る。床面積は約19.8m²になる。堀立柱建物の可能性は低いが何らかの施設と考えられる。

Pit No.	径(cm)	深さ(cm)	柱間距離(cm)	Pit No.	径(cm)	深さ(cm)	柱間距離(cm)
P 1	46	63	P 1-P 2	256	P 4	36	33
P 2	29	70	P 2-P 3	762	P 5	56	14
P 3	45	80	P 3-P 4	253	P 6	25	62

第8表 堀立柱建物6 柱穴一覧

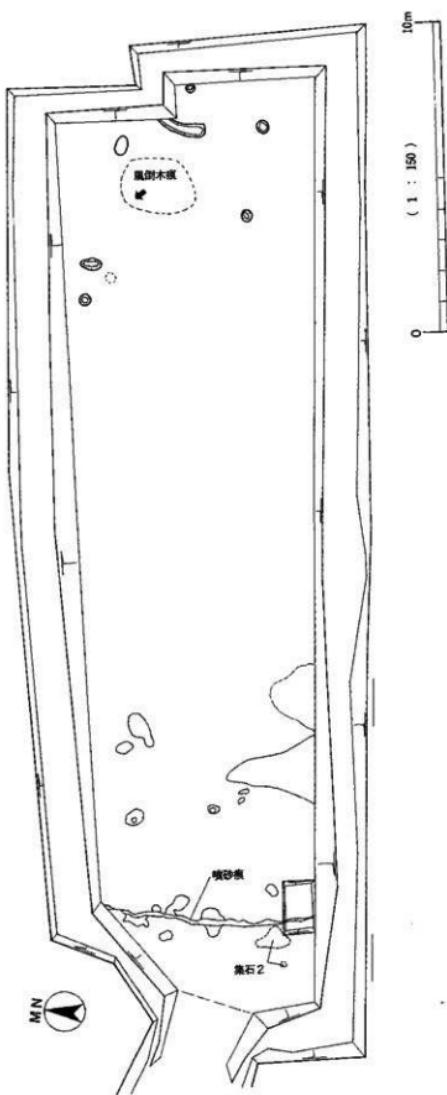
堀立柱建物7

桁行1間以上×梁行1間と想定されるが調査区外に統いており、詳細は不明である。桁行1.5m以上×梁行3.6mを測る。Pit 1は平面形が円形を呈して、径27cm×深さ13cmを測る。Pit 2は平面形が円形を呈して、径38cm×深さ29cmを測る。

d. その他**風倒木痕**

3・4区において、二つの風倒木の痕跡を検出した。両者は規模などが類似している。痕跡は地層が横転しており、角のように幹の圧痕跡が残る。横転した地層の最上層は第III層付近と思われるが、詳細は不明である。幹の圧痕跡は幅80cmを測る。横転の規模は幅2.8m×深さ約3.5mを測る。

東区の風倒木痕と同様に北北西の方角に向かって倒れている。



第30図 西区 検出面2 (X層上面) 遺構配置

2. 検出面2

第X層上面において遺構検出を行なった。対応する包含層は第VII・VIII層である。時期は縄文時代早期である。遺構は1・2区に偏るが、3区において自然灾害の痕跡と思われるものを検出した。

ア) 遺物の分布

遺物は、1区の範囲に集中する。遺物量は少なく、ほぼ同一個体と考えられる前平式57~64の碎片が散見する程度である。その碎片もグリッドC・D-4・5の範囲に比較的集中している。

イ) 遺構の配置

遺構は1区と2区西半にほぼ集中している。柱穴が多く、三つの集中する範囲があり、柱穴の集中範囲1には柱列1・2が存在する。他の2ヶ所にも何らかの構造物が復元できる可能性がある。

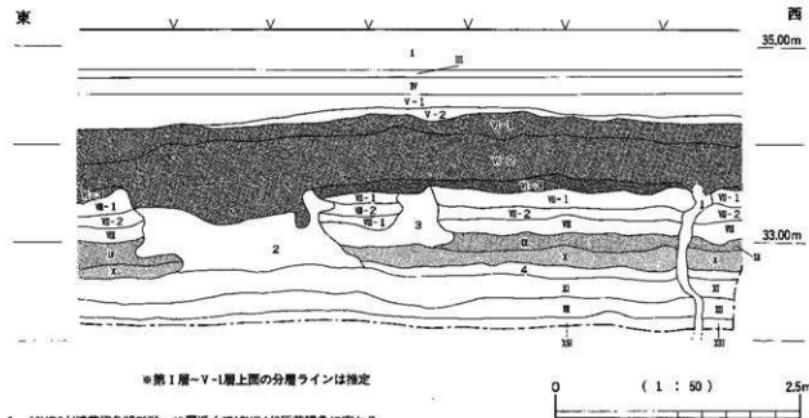
ウ) 遺構

遺構は柱穴がほとんどであるが、集石も1基検出した。また、自然災害の痕跡と思われるものもある。

a. 自然災害の痕跡

3区において、亀裂状に延びる溝や土層の搅拌したものと思われる範囲を検出した。地震などに伴う噴砂などを考えられる。いずれもVI(アカホヤ)層で途切れるところからアカホヤ降下火山灰層の噴出に伴う現象に由来する可能性がある。

亀裂状の溝は、幅10~15cmを測り、深さは確認できなかった。埋土は粗い砂粒で構成される。土層断面では、VI層において途切れている。砂粒が噴きあがってきた様な土層であることか



*第1層～V-1層上面の分層ラインは推定

1. 10YR8/4浅黄褐色粗粒砂、VI層近くで10YR4/2灰黃褐色に変わる
2. 10YR4/2灰黃褐色粘質土、やや多量に3~5cm大の2.5Y6/3にぶい黄色砂粒を含む
3. 10YR5/2灰黃褐色粘質土
4. 10YR3/2褐色土、やや多量の2~3cm大の2.5Y3/1黒褐色土ブロックを含み、堅く結まる

VII-1. 7.5YR1.7/1黒褐色土、やや粘性を帯びる

VII-2. 10YR2/2黒褐色土

VIII. 10YR3/1黒褐色土、やや多量に1~5cm大の10Y5/2灰黃褐色の斑点が見られる

X. 2.5Y5/2暗灰黃褐色土、上層と同じ斑点が多量に見られる、やや砂質

XI. 2.5Y5/6黃褐色粘質土、やや多量に1~5cm大の2.5Y6/4にぶい黄色の斑点が見られる

XII. 7.5YR3/2暗褐色粘質土、やや多量の1~5cm大の2.5Y6/4にぶい黄色の斑点が見られる

XIII. 7.5YR3/2黒褐色粘質土、上層より粘性が強い

XIV. 10YR5/6黃褐色土、粘性を帯びる

第31図 懇砂 土層断面

ら、噴砂痕と考えられる。砂粒は下層のシラス層から噴きあがってきたと思われる。

上層の搅拌したと思われる範囲は、20cmから3mを超えるものまである。平面形・断面形は共に不定形を呈しており、亀裂状の溝と同様にVI層において途切れている。この範囲にはVI層下の土層が搅拌したものや、溝のように粗い砂粒が範囲中央に見られるものもある。

b. 集石

集石2は、23個の礫が集まっており、総重量が1,422gを量る。礫はやや赤く変色した川原石で破碎したものも見られる。礫は約1.3m四方に広がり、ほぼ中央に長軸0.8m×短軸0.5mの集まる範囲が見られる。掘り込み・炭化物などは見られなかった。

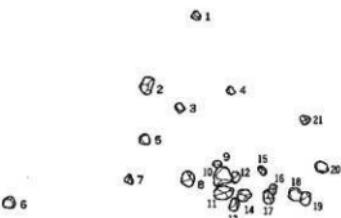
c. 柱穴と柱列

柱穴の集中する範囲が三つ見られ、集中範囲1に柱列が存在する。前述のとおり、他の2ヶ所も何らかの構造物が想定できる可能性が考えられる。

柱穴の規模については表に述べる。

柱列1

8基の柱穴が円形に並んでおり、検出面・包含層に掘り込みは見られない。柱穴の規模も柱間距離



◎22

○ (1 : 20) 50cm



第32図 集石2

も一定していない。柱列に囲まれる範囲は直径3.1~3.4mを測る。掘り込みは確認されなかった。何らかの施設の可能性も考えられる。

柱列2

柱列1に沿って4基の柱穴が並んでおり、柱穴は規模が比較的類似する。

d. 土坑

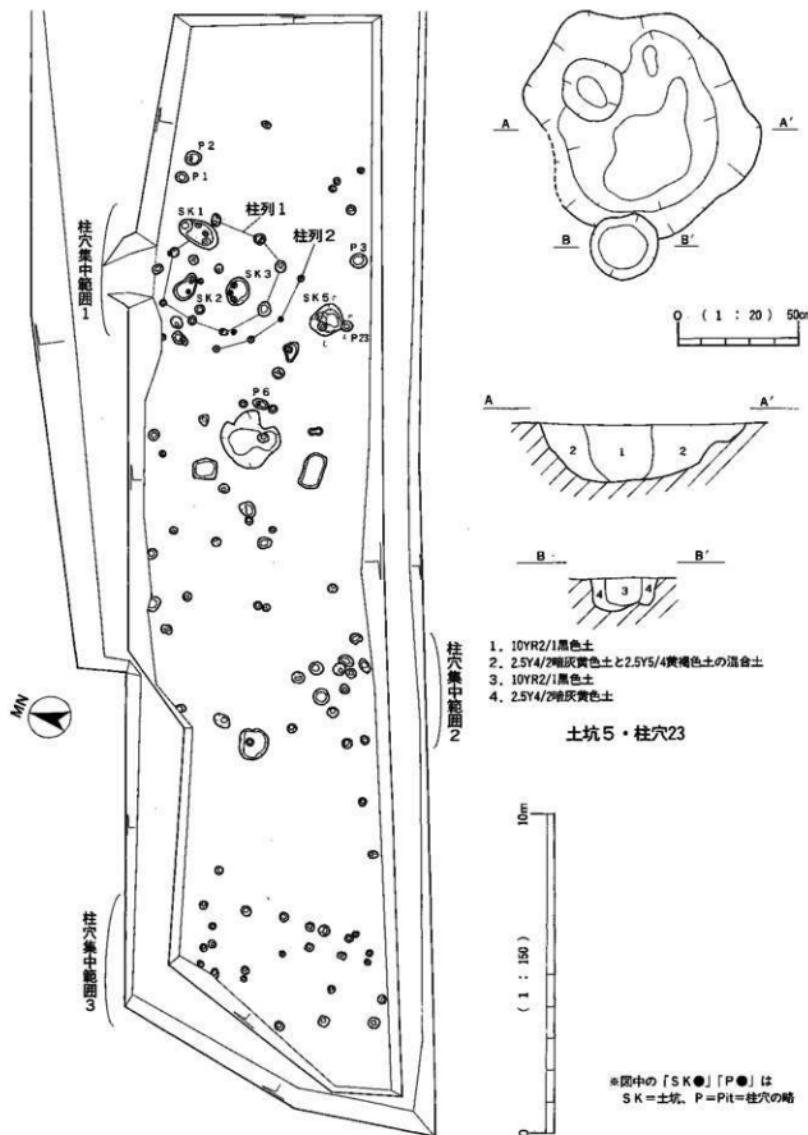
土坑1は、平面形が歪んだ楕円形に、断面形がレンズ状を呈する。一部で柱穴と切り合う。規模は長軸132cm×63cm、深さ20cmを測る。

土坑2は、平面形が歪んだ楕円形に、断面形がレンズ状を呈する。底面が一部深くなる。規模は長軸90cm×60cm、深さ23cmを測る。

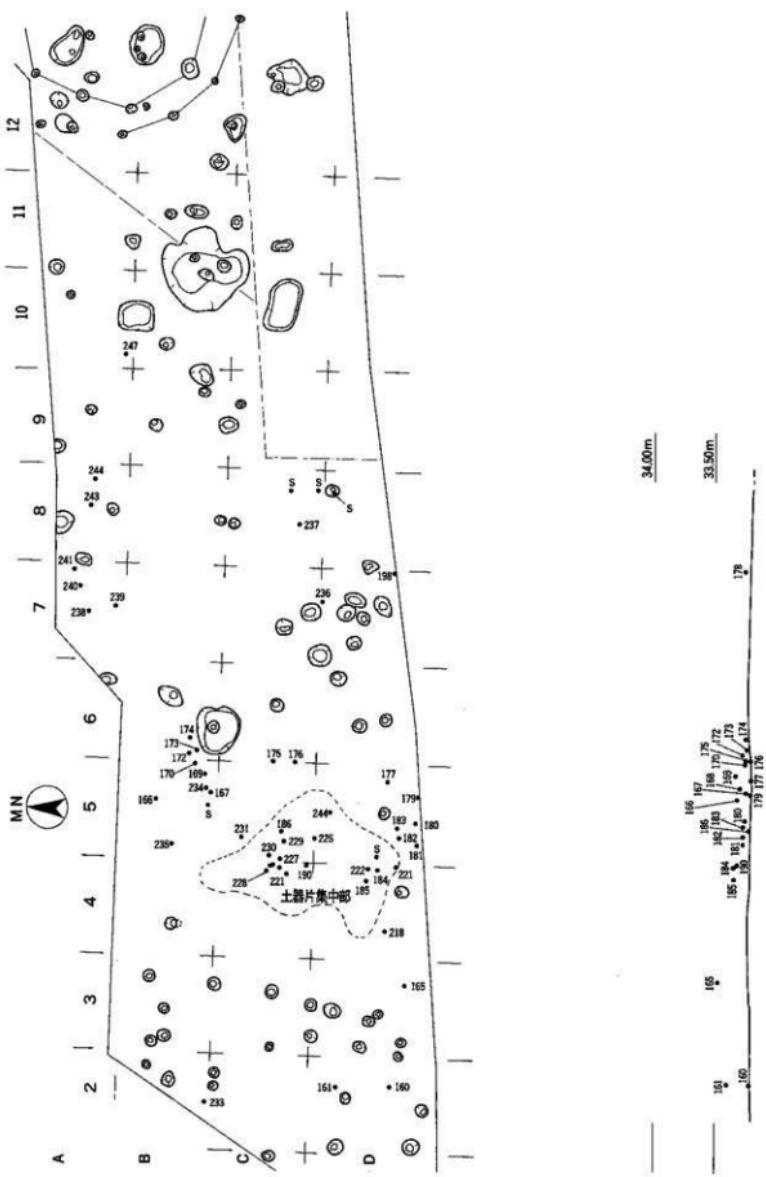
土坑3は、平面形が歪んだ円形に、断面形がレンズ状を呈する。規模は63cm×深さ13cmを測る。

地図中 番号	遺物 番号	重量 (g)	最大長 (mm)	最小幅 (mm)	備考
1	191	27.52	38.33	23.34	
2	192	57.80	33.01	18.44	
3	193	11.58	29.66	12.38	
4	194	2.73	20.13	10.64	
5	195	37.06	32.71	29.84	
6	196	49.68	38.46	30.27	No191と複合
7	197	35.73	49.11	30.42	
8	198	90.41	59.18	32.40	
9	199	28.07	32.61	30.30	
10	200	167.08	71.28	39.97	
11	201	133.29	72.30	43.88	
12	202	68.46	41.41	31.08	
13	203	67.24	54.59	24.71	
14	204	32.35	42.58	17.39	
15	205	7.84	33.05	12.38	
16	206	19.00	41.16	20.92	
17	207	113.10	52.77	33.93	
18	208	96.81	59.94	25.41	
19	209	85.70	47.88	32.29	
20	210	55.23	49.18	30.12	
21	211	78.87	45.39	34.17	No196と複合
22	212	134.91	69.73	30.83	
23	213	21.66	35.22	19.67	

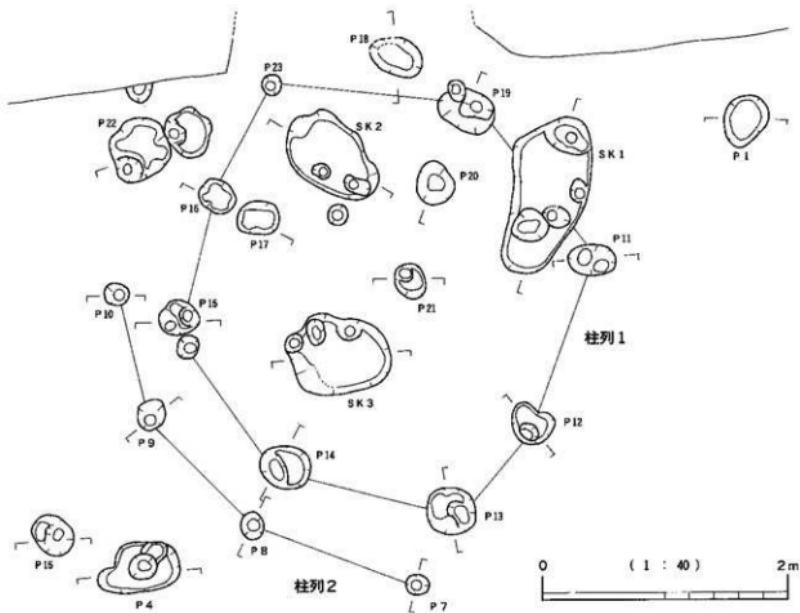
第9表 集石2 碑一覧



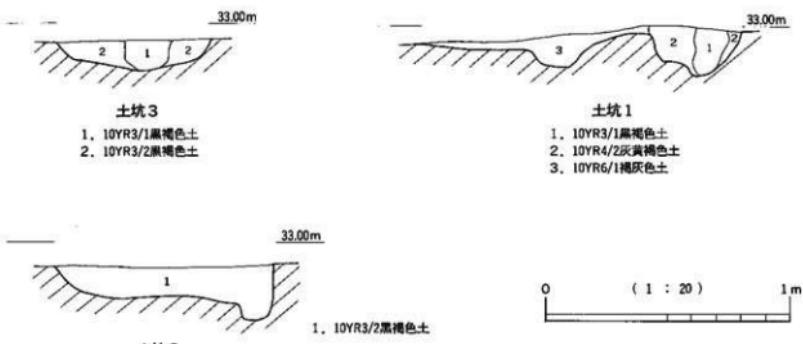
第33図 西区 検出面2 (X層上面) 遺構配置



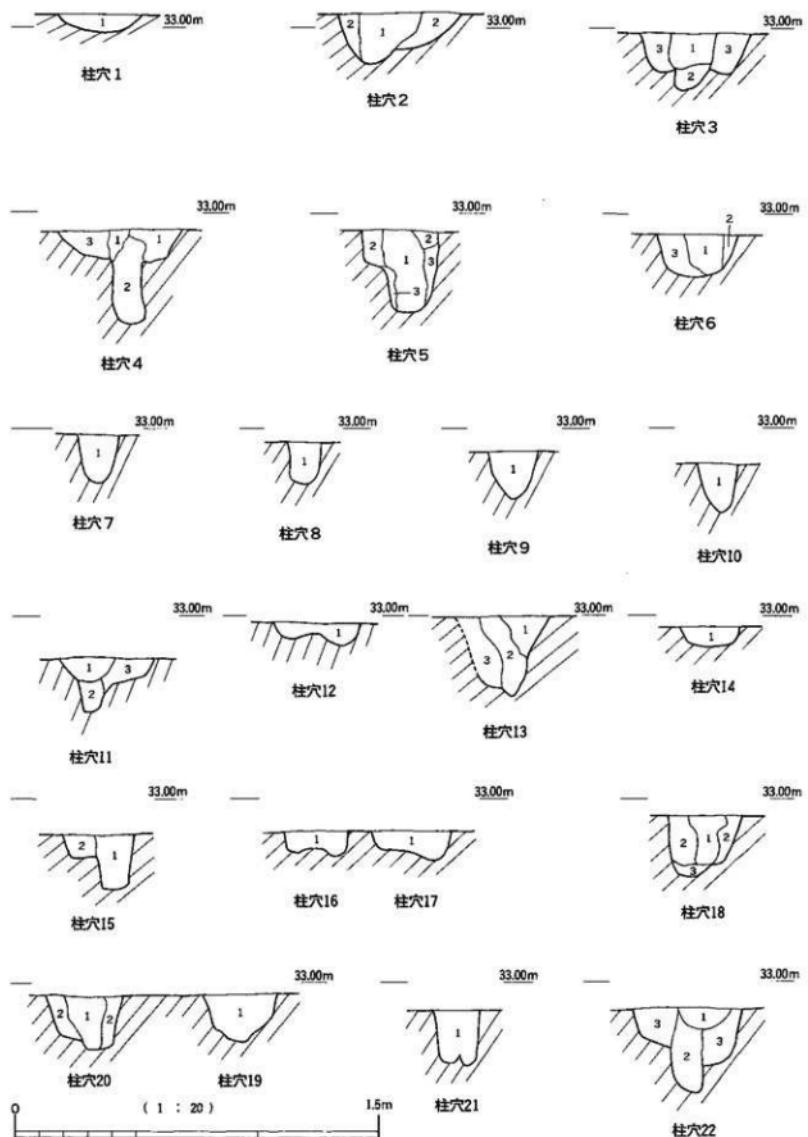
第34図 VII～IX層 出土遺物の分布状況



第35図 柱列1・2



第36図 土坑1～3



第37図 柱穴 1 ~ 22

Pit No.	層番号	土色・土質	径(cm)	深さ(cm)	柱間距離(cm)
柱穴 1	1	10YR2/1黒褐色土	35	8	P19 P11 154
柱穴 2	1	10YR2/1黒褐色土	50	20	P11-P12 156
	2	10YR2/1黒褐色土と2.5Y5/2暗灰黄色土との混合土			P12-P13 84
柱穴 3	1	10YR2/1黒褐色土			P13 P14 156
	2	2.5Y4/2暗灰黄色土	45	23	P14 P15 146
	3	2.5Y4/2暗灰黄色土と2.5Y5/4黄褐色土との混合土			P15 P16 104
柱穴 4	1	10YR2/1黒褐色土			P16 P23 100
	2	2.5Y4/2暗灰黄色土	51	49	P23-P19 170
	3	2.5Y3/2黒褐色土			
柱穴 5	1	2.5Y4/2暗灰黄色土			
	2	10YR2/1黒褐色土	31	34	
	3	2.5Y3/2黒褐色土			
柱穴 6	1	10YR2/1黒褐色土			P7-P8 142
	2	2.5Y3/2黒褐色土	33	18	P8-P9 120
柱穴 7	1	7.5YR3/3暗褐色土	16	20	P9-P10 108
柱穴 8	1	7.5YR3/3暗褐色土	14	18	
柱穴 9	1	7.5YR3/3暗褐色土	20	20	
柱穴10	1	7.5YR3/3暗褐色土	16	20	
柱穴11	1	10YR3/1黒褐色土			
	2	10YR2/1黒褐色土	39	23	
	3	10YR3/2黒褐色土			
柱穴12	1	10YR3/1黒褐色土	35	9	
柱穴13	1	10YR3/2黒褐色土			
	2	10YR2/1黒褐色土	38	33	
	3	10YR3/2黒褐色土			
柱穴14	1	10YR3/2黒褐色土	24	8	
柱穴15	1	10YR2/1黒褐色土			
	2	10YR3/2黒褐色土	30	22	
柱穴16	1	10YR3/2黒褐色土	26	10	
柱穴17	1	10YR3/2黒褐色土	33	12	
柱穴18	1	10YR1.7/1黒褐色土			
	2	10YR3/1黒褐色土	30	25	
	3	10YR5/3/ぶい黄褐色土			
柱穴19	1	10YR3/2黒褐色土	31	19	
柱穴20	1	10YR3/1黒褐色土			
	2	10YR2/1黒褐色土	32	22	
柱穴21	1	7.5YR3/3暗褐色土	18	22	
柱穴22	1	10YR3/1黒褐色土			
	2	10YR2/1黒褐色土	45	35	
	3	10YR3/2黒褐色土			

第10表 X層上面 柱穴一覧ほか

- 1 排土置場の都合により、調査区全体を一度に調査することができず、各区もしくは調査区半分ごとに行なった。
- 2 植木の持ち主が移植を希望していたためである。
- 3 東区の調査においては、アカホヤ降下火山灰層と考えられる層を「第VI・VII・VIII層」と呼称して異なる層として把握したが、一連性が高いことや各層の違いが同一層位中での差異と考えられることなどから、ここでは同一層としてとらえた。
- 4 土坑1は地塊付近にあり、畑地側である北側半分と土器口縁部をトラクターなどの耕作機械で破壊されたと思われる。
- 5 覆土に見られる地山ブロックと他の土の混ざった土層を「混合土」と呼称する。人もしくは動物による行為の結果と考える。
- 6 検出状況は第17図に掲載してある。
- 7 調査区の拡張を試みたが隣接する畠地がハウス栽培を行なっていることから、拡張を断念した。
- 8 断面BB'付近の柱穴群である。

第VI章 出土遺物

第1節 東区の土器

1. 第III層の出土土器（1～29）

縄文時代晚期の刻目突帯文土器がおもであり、一部に黒川式も見られる。遺物の出土は確認調査1トレンチと2区に集中する。該当する遺物（註記）番号の無いものは本調査のIII層出土のものである。

土器 1

浅鉢で口縁部から底部にかけて1/3が残存する。内外面が共に黑色化しており、胴部の外面上半には炭化物が付着する。胴部の外面下半から底部にかけては赤色化しており、多くの円形剥離が見られる。内面には口縁端部付近まで円形剥離が見られる。

形態は、口縁が外方に真直ぐ延びて、端部でやや内湾する。口唇部は丸く整えられているが、不明瞭ながら内傾する平坦面をもつように見える。底部は平底に近いものと考えられる。外面には口唇部から0.5cm下に1条の刻目突帯文が巡る。突帯は貼り付けられており、刻目が約1.5cm間隔で施されている。刻目は指先で施文しており、爪跡が残る。施文は手の甲を右にして行ったと考えられる。器面は口唇部から底部までの外面を横のミガキで整える。

接合は内傾接合と思われるが不明瞭である。色調は外面7.5YR2/1黒色、内面7.5YR5/6明褐色、断面が2色に別れて、内側が10YR6/4に似た黄橙色、外側が5YR5/6明赤褐色になる。胎土はやや粗く、やや多量の1mm以下の混和材を含む。混和材には長石・石英・雲母・黒色砂粒・赤褐色砂粒が見られる。

該当する遺物（註記）番号は確認調査60・65～70・72・93、ほとんどが1トレンチの第III層より出土する。法量が復元値で口径34.5cm×器高10.7cmを測る。

土器 2～4

口縁部で、外側に広がる口縁部をもち、口唇部から下1.0cmの外面に貼りつけた刻目突帯文が巡る。

土器2は、内外面の器面を横のミガキで整えて、口唇部を丸くする。刻目は棒状工具もしくは指頭で施している。色調は2.5Y6/4に似た黄色で、他と異なり白色に近い。胎土は精緻で、少量の1mm以下の混和材が含まれる。混和材は石英・雲母・黒色砂粒・赤褐色砂粒が見られる。該当する遺物（註記）番号は2である。また、土器12が類似した色調・胎土をもっている。

土器3は、外面に炭化物が付着し、内面は摩滅する。形態は口縁端部が外側に開いて、口唇部は平坦な面をもつ。刻目はヘラ状工具で施される。色調は2.5Y3/1黒褐色になる。胎土はやや粗く、やや多量の1mm以下の混和材を含む。混和材には長石・石英・黒色砂粒・赤褐色砂粒が見られる。該当する遺物（註記）番号は23である。

土器4は、口唇部が平坦な面をもち、内傾する。刻目を棒状工具もしくは指頭で施している。器面は丁寧な横のナデで整える。外面には円形剥離が見られる。色調は2.5YR4/8赤褐色で赤味が強い。胎土は精緻で少量の1mm以下の混和材を含む。混和材には長石・石英・黒色砂粒が見られる。該当する遺物（註記）番号は43である。

土器 5～9

内側に向かって延びる口縁部をもち、口縁端部に1条の刻目突帯文が巡る。

土器5は、口唇部が丸く、口唇部下0.5cmに刻目突帯文が巡る。刻目は棒状工具もしくは指頭で施している。器面は横のミガキで整えるが、内外面に円形剥離が見られて荒れる。色調は10YR4/4褐色であるが、端部外面が黒色化する。胎土はやや粗く、少量の1mm以下の混和材を含む。混和材には石英・

長石・黒色砂粒が見られる。

土器6は、口唇部は不明瞭な平坦面をもち、内傾する。口唇部下0.5cmに刻目突帯文が巡る。刻目は指頭で施している。器面は外面が横のナデ、内面が左向きのケズリ後にナデで整える。色調は5YR5/4に近い赤褐色であるが、外面が黒色化して炭化物の付着が見られる。胎土はやや精緻で、やや多量の1mm以下の混和材を含む。混和材には石英・長石・黒色砂粒・赤褐色砂粒・雲母が見られる。該当する遺物（註記）番号は48である。

土器7は、口唇部が平坦面をもち、内傾する。口唇部下1.5cmに刻目突帯文が巡る。突帯は他に比べて高く、器面から0.5cmを測る。刻目は棒状工具で施す。器面は内外面を横のナデで整える。色調は10YR7/4に近い黄橙色で、他に比べて白色に近い。胎土はやや精緻で、少量の1mm以下の混和材を含む。混和材には石英・雲母・黒色砂粒が見られる。該当する遺物（註記）番号は27である。

土器8は、丸い口唇部の下0.5cmに刻目突帯文が巡る。突帯は他に比べて高く、器面から0.5cmを測る。刻目はヘラ状工具で施す。器面は外面を横のミガキで整える。色調は10YR6/3に近い黄橙色で、外面が赤色化する。胎土は精緻で、少量の1mm以下の混和材を含む。混和材には石英・長石・雲母・黒色砂粒が見られる。該当する遺物（註記）番号は確認調査64である。

土器9は、丸い口唇部の外面直下に刻目突帯文が巡る。刻目は指頭で施す。器面は外面が横のナデ、内面が左向きのケズリで整える。色調は5YR5/6明赤褐色で、外面には炭化物の付着と円形剥離が見られる。胎土はやや精緻で、やや多量の1mm以下の混和材を含む。混和材には長石・黒色砂粒・石英・雲母が見られる。該当する遺物（註記）番号は確認調査310である。

土器10~17

刻目突帯文が巡る脣部片である。

土器10は、明確な屈曲部に刻目突帯文が巡る。刻目はヘラ状工具で施す。器面は外面が横のミガキで、内面は円形剥離などがあり摩滅する。色調は7.5YR6/6橙色で、外面は赤色化して少量の円形剥離が見られる。胎土はやや粗く、多量の1mm以下の混和材を含む。混和材には長石・石英・黒色砂粒・雲母が見られる。該当する遺物（註記）番号は確認調査75である。

土器11は、外面に刻目突帯文が巡る。突帯は他に比べて高く、器面から0.5cmを測る。刻目はヘラ状工具で施す。器面は横の工具ナデが施されたように見えるが、ミガキが摩滅したものと考えられる。色調は5YR7/4浅黄色で、白色に近い。外面は煤けて黒色化し、内面には円形剥離が見られる。胎土は精緻で、極少量の1mm以下の混和材を含む。混和材には長石・石英・黒色砂粒・雲母が見られる。

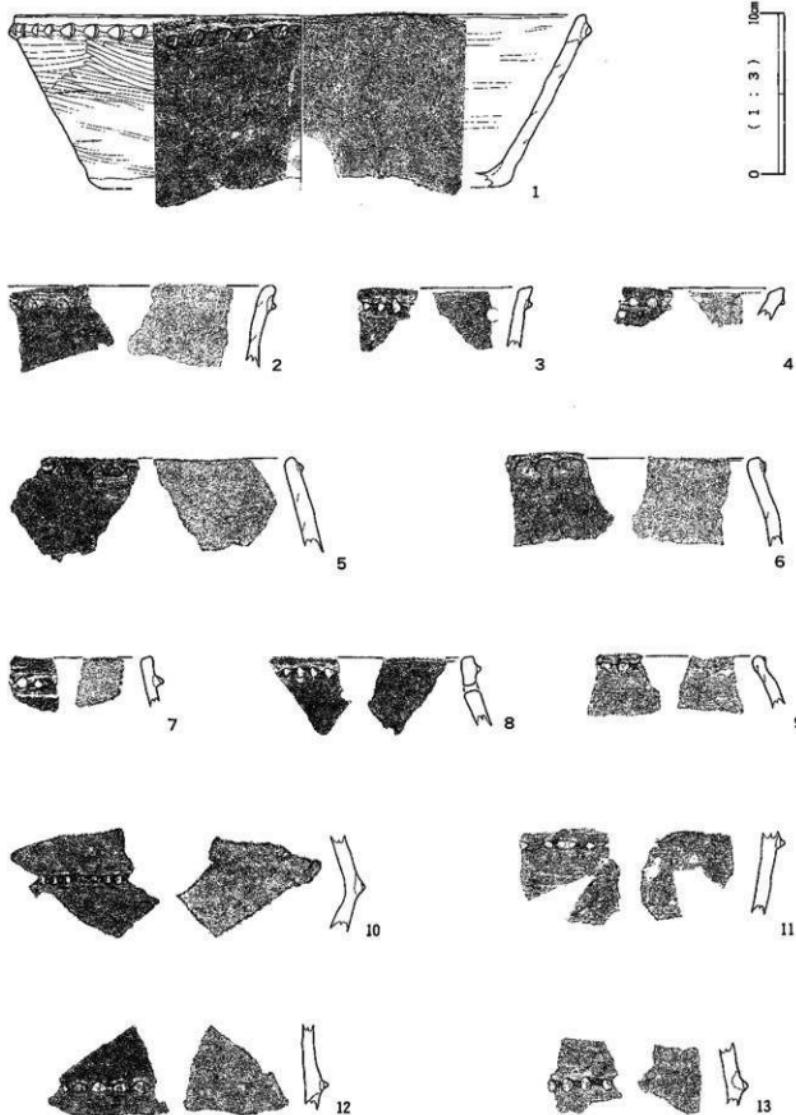
土器12は、前述の土器2と類似する。刻目は指頭で施しており、爪痕が残る。

土器13・16は類似する。緩やかな屈曲部に刻目突帯文が巡る。刻目はヘラ状工具で施す。器面は外面に炭化物が付着して黒色化する。内面は摩滅する。色調は5YR5/4に近い赤褐色になる。胎土はやや粗く、多量の1mm以下の混和材を含む。混和材には雲母・石英・黒色砂粒・長石が見られる。

土器14は、外面に刻目突帯文が巡る。刻目は棒状工具で施す。器面は横のミガキが施されているが、外面は煤けて黒色化し、内面は摩滅する。色調は10YR5/6黄褐色になる。胎土はやや粗く、極少量の1mm以下の混和材を含む。混和材には石英・長石・雲母が見られる。

土器15は、外面に刻目突帯文が巡る。刻目はヘラ状工具で施す。器面は横のミガキが施されているが、外面は煤けて黒色化し、内面は摩滅する。色調は10YR5/6黄褐色になる。胎土はやや粗く、極少量の1mm以下の混和材を含む。混和材には石英・長石・雲母が見られる。

土器17は、緩やかな屈曲部に刻目突帯文が巡る。刻目はヘラ状もしくは棒状工具で施す。器面は外面に炭化物が付着して黒色化する。内面は摩滅する。色調は10YR7/8黄橙色になる。胎土はやや粗く、



第38図 東区 土器 1

少量の1mm以下の混和材を含む。混和材には長石・石英・黒色砂粒・雲母が見られる。該当する遺物（註記）番号は確認調査321である。

土器18~25

無文の胸部片である。土器18・19は屈曲部をもつ。いずれも横もしくは斜めのミガキで器面を整えるが、外面が焼けて黒色化し、内面には摩滅や円形剥離が見られる。該当する遺物（註記）番号は土器18が確認調査313・314、土器20が確認調査6、土器21が25、土器22が確認調査323、土器23が1、土器24が確認調査96、土器25が確認調査3である。

土器26

外面は貝殻条痕で整えて、並行する2条の突帯と円形刺突文を施している。春日式と考えられる。

底部27

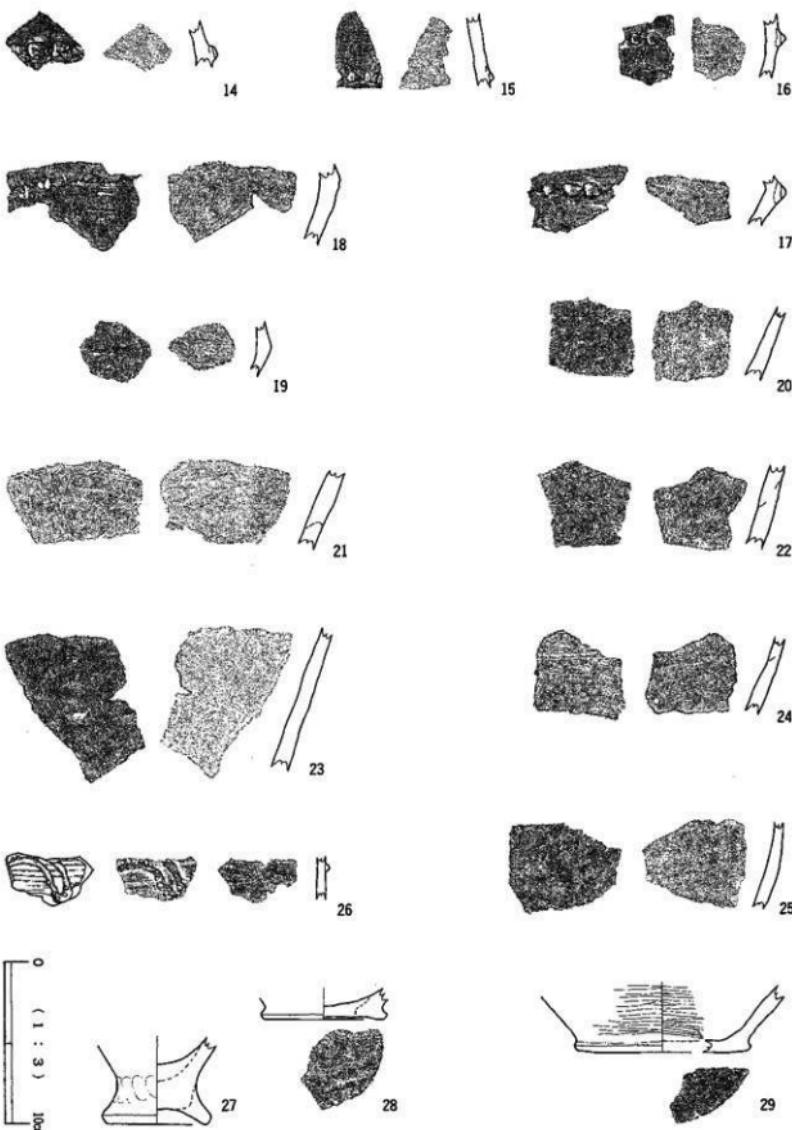
脚台付きの底部で、器面は摩滅する。色調が外面は5YR6/6橙色、内面が5YR4/1褐灰色で、内面が黒色化する。胎土はやや粗く、少量の1mm以下の混和材を含む。混和材には長石・石英・黒色砂粒が見られる。該当する遺物（註記）番号は確認調査94である。

底部28・29

平底の底部で、器面を横のミガキで整える。両者は類似するが底面の器面調整は異なり、土器29がミガキ、土器28はナデで整えている。いずれも内面には円形剥離が見られる。色調は10YR6/6明黄褐色である。胎土はやや精緻で、極少量の1mm以下の混和材を含む。混和材には長石・石英・黒色砂粒・雲母が見られる。

2. 第IX層出土の土器 (65)

土器65は東区の集石1から出土した。外面に列点文が並行するが、文様は浅くやや不明瞭である。内面には粗いナデが施される。胎土は精緻で、多量の1mm以下の混和材を含む。混和材には長石・石英・雲母・黒色砂粒・赤褐色砂粒が見られ、長石がとくに多い。色調は外面・断面が10YR6/4にぶい黄橙色、内面が7.5YR6/6橙色を呈する。焼成は良好である。形式は不明である。



第39図 東区 土器2

第2節 西区の土器

西区は古墳時代の土器が主体を占める。土器はいわゆる「成川式」である。それ以外にも、少量であるが第III層から縄文時代晩期の黒川式や弥生時代の甕なども出土している。

1. 溝1 出土土器 (30~41)

遺物は3ヶ所の集中部をもちながら、ほぼ遺構内全体に散在する。層位的には、ほぼ3層に集中している。おもに甕と高杯が出土しており、甕には穿孔が見られるものがある。

土器30~33

同一個体の甕の可能性が考えられる。いずれも器面の赤色化や、煤・炭化物の付着が見られ、加熱を受けたことが考えられる。とくに外面の刻目突帯下には炭化物が厚く付着する。接合痕が明瞭であることから宮崎でよく見られる「東九州系」と呼ばれるものである。

器形は口縁部が内湾しており、口唇部には1.5mm程度の段が見られる。外面には口唇部から6.5cm離れた位置に刻目突帯が巡る。キザミは横に並行する纖維状の痕跡が見られるが、施文原体はハケメ等に用いられる木口状のものが考えられる。器面は外面が刻目突帯から上が横方向のナデ、下が斜め方向のナデで整える。内面は横方向のナデ後に斜め方向のナデを行なう。内外面ともに明瞭な接合痕が見られ、内面のほうはナデ消される。底部には接合痕は見られない。

法量は口径26.6cmを測る。胎土は精緻で、少量の1mm以下の混和材が含まれる。混和材には長石・石英・赤褐色砂粒と極少量の雲母が含まれ、赤褐色砂粒は2mm程度のものも見られる。色調は内面・断面が10YR6/4に近い黄橙色、外面が5YR6/6橙色である。ただし、土器33は7.5YR7/8黄橙色である。焼成は良好で硬く締まっている。

該当する遺物（註記）番号は、土器30がSD-9・10・60、土器31がSD-6、土器32がSD-29、土器33がSD-44・45・47・49である。

土器34

甕の丸底の底部で、底面がわずかに平坦である。穿孔が施されていることから供献土器と考えられ、穿孔が外面から穿たれている。穿孔は径5.5cmを測る。

器面は、外面が底部の5cm上から煤けて黒色化し、内面は底面が黒色化して円形剥離が見られる。調整は、外面が縦のハケメの後に縦のナデを行ない、内面は丁寧な工具ナデを横に施している。

胎土は精緻で、極少量の0.5mm以下の混和材が含まれる。混和材には長石・石英・雲母が見られる。色調は2.5Y7/4浅黄色になる。焼成は良好で硬く締まっている。

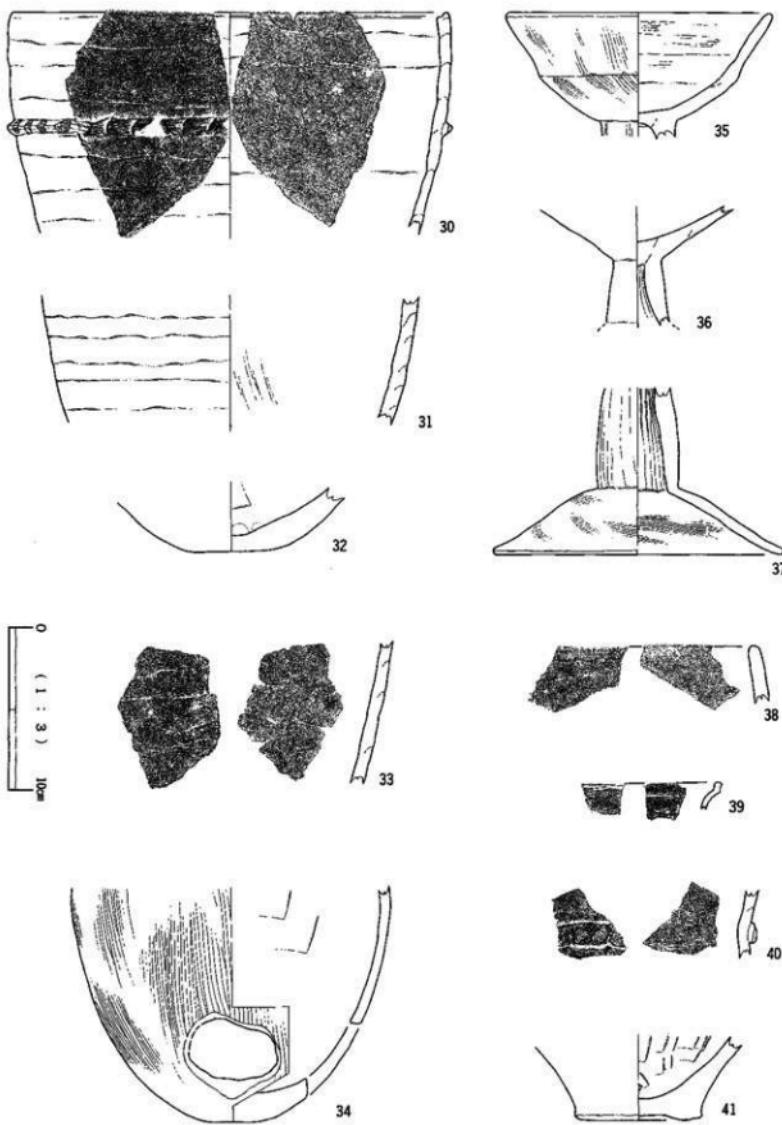
該当する遺物（註記）番号はSD-32~36・55である。

土器35~37

高杯で、別個体であるが胎土・色調などが類似する。土器36・37の接合しなかった割れ口は摩滅しており、破損後の二次使用が考えられる。色調は10YR8/6黄橙色になる。胎土は精緻で、少量の1mm以下の混和材が含まれる。混和材には石英・長石・雲母・赤褐色砂粒が見られる。

土器35は、高杯の杯部で脚部の根元から欠損する。口縁部に黒斑が見られ、対になる位置には赤色化した範囲が存在して、その周囲には円形剥離が見られる。器形には不明瞭な屈曲部があり、その位置から口縁がやや外反して外向きに延びる。器面は外面が縦のミカキ、内面が横のミカキで整える。該当する遺物（註記）番号はSD-12~17・58である。

土器36は、口縁と脚部の端部が欠損する。器面を丁寧なナデで整える。該当する遺物（註記）番号はSD-50-2である。



第40図 西区 溝1 出土土器

土器37は、杯部との接合部から先が欠損する。欠損部の周りは赤色化して、円形剥離が見られる。器面は工具ナデの後に丁寧なナデを施す。部分的にナデの下にハケメ¹の痕が見られる。内面はハケ後に、丁寧なナデを施している。脚部の端部には黒班が見られる。該当する遺物（註記）番号はSD-24・44・46～48・50-1・51である。

土器38～41

土器38・39は、縄文時代晚期のものと考えられる。土器38は深鉢の口縁、土器39は浅鉢の口縁である。溝の掘削時に縄文時代晚期の包含層を掘り込んだためと考えられる。該当する遺物（註記）番号は土器38がSD-52、土器39がSD-44である。

土器40は、頸部の屈曲部に刻目突帯文が貼り付けられる。刻みは指頭大で纖維状の痕跡が見られる。該当する遺物（註記）番号はSD-3である。

土器41は、平底の底部である。底面中央が一段凹んで、縁が低い高台状に巡っており、宮崎でよく見られる「東九州系」と呼ばれるものと考えられる。内外面の器面は摩滅するが、内面には工具の木口の痕が見られる。色調は2.5Y7/4浅黄色で外面が赤色化する。胎土は精緻で、多量の0.5mm以下の混和材が含まれる。混和材には石英・長石・雲母が見られる。該当する遺物（註記）番号はSD-38である。

2. 積穴住居1 出土土器（42～45）

出土した遺物のほとんどが、住居跡廃絶後の埋没過程に堆積したものと考えられる。土器のみで5cm大の碎片がおもである。

土器42・43

器形がわずかに異なるが他の点において類似する。器種は小型の壺で頸部に刻目突帯文を貼り付ける。三日月状の刻目には纖維状の痕跡が見られる。器面調整は、外面と口縁部の内面を横のミガキで整え、胴部内面は工具で整えた後にナデを施している。外面は煤けて黒色化し、内面は赤色化して円形剥離が見られる。色調は10YR5/6黄褐色である。胎土は精緻で、少量の1mm位以下の混和材が含まれる。混和材には石英・長石・雲母・黒色砂粒が見られる。該当する遺物（註記）番号は土器42がSH 1-10・18・21、土器43がSH 1-24・34である。

土器44

壺の頸部から胴部で、頸部に刻目突帯文を貼り付ける。突帯文は器面から7mmと高く、刻目も深い。刻目には纖維状の痕跡が見られる。器面はナデで整えるが工具ナデの痕跡も残る。外面には炭化物が付着して煤けている。色調は7.5YR5/6明褐色である。胎土はやや粗く、多量に2mm以下の混和材が含まれる。混和材には石英・長石・黒色砂粒・赤褐色砂粒が見られる。該当する遺物（註記）番号はSH 1-6・15・37・38である。

土器45

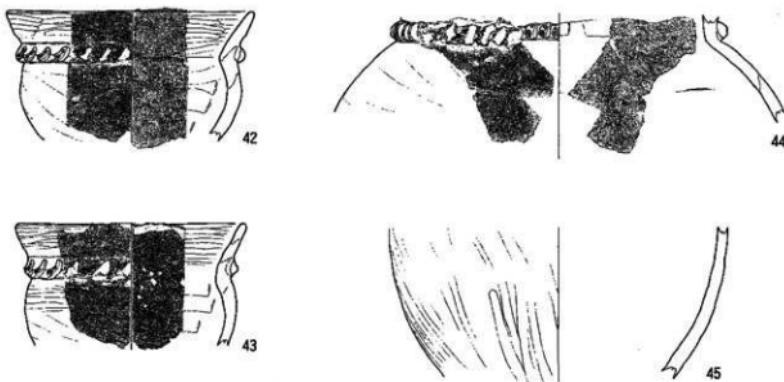
胴部で外面に炭化物が付着する。内面には円形剥離が見られる。該当する遺物（註記）番号はSH 1-37・43～45・47～49・51である。

3. 各構造及び第III層 出土土器（46～53）

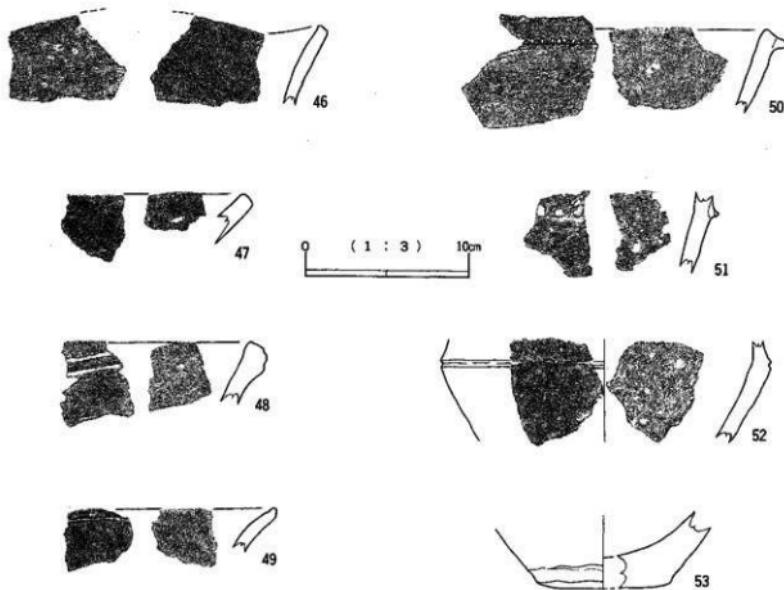
第III層からは、古墳時代のもの以外に、以下の遺物も出土している。土器50は弥生時代の壺の口縁部、それ以外は縄文時代晚期の遺物と考えられる。

土器46は、深鉢の波状口縁部で、外面に条痕文が見られる。該当する遺物（註記）番号は114である。

土器47は、口縁端部が逆L字状に外に突き出しており、縁に浅く小さい刻目が施されている。器面



第41図 西区 竪穴住居1 出土土器



第42図 西区 各造構及び第III層出土土器

は横のナデで整える。該当する遺物（註記）番号は138である。

土器48は、浅鉢の口縁部と考えられる。該当する遺物（註記）番号は確認調査25である。

土器49は、刻目突帯文を貼り付けた胴部で、土坑4から出土した。該当する遺物（註記）番号は158である。

土器50は、口縁端部が肥厚して2条の沈線が施文される。浅鉢の口縁部と考えられる。該当する遺物（註記）番号は110である。

土器51は、胴部屈曲部に1条の沈線が巡る。該当する遺物（註記）番号は156である。

土器52は、口縁端部がわずかに立ち上がり、外面に1条の沈線を巡らしている。浅鉢の口縁部と考えられる。該当する遺物（註記）番号は102である。

土器53は、平底の底部で、該当する遺物（註記）番号は76・77である。

4. 土坑1 埋設土器（54）

土器54は、土坑1に埋設された形で出土した。遺存状況は口縁部の一部が遺存するのみで、胴部がほぼ完形であった²。器面の状態から頻繁に使用後、土坑内に埋設したことが考えられる。

形式は縄文時代晩期の黒川式の浅鉢と考えられる。法量は復元値で口径39.2cm、器高33.2cm、底径5.7cmを測る。胎土はやや粗く、やや多量に0.5mm以下の混和材が含まれる。混和材には黒色砂粒・石英・長石・雲母・赤褐色砂粒が見られる。色調は外面上半が10R3/1暗赤褐色～2.5Y1.7/1赤黒色、下半が2.5Y4/3にぶい赤褐色～2.5Y5/8明赤褐色、内面が口縁部から体部上半が10YR5/3にぶい黄褐色、下半が7.5YR3/1黒褐色を呈する。焼成は全体的にやや軟である。

器面には2・3mm幅の緻密なミガキが施されている。口縁部では横方向に、胴部は縱方向に施し、胴部上半のみ最後にやや粗く横方向に施している。器面は、口縁部から胴部最大径下の約3cmまで黒色化しており、煤が付着したものと考えられる。胴部下半は赤化して底部近くは多数の円形剥離が見られる。内面の器面調整は、摩滅により不明であるが全体的に横方向の工具ナデかミガキを施したと考えられる。

5. 第VII・IX層 出土土器（55～65）

時期は縄文時代早期と考えられる。出土土器は、一部を除けば、復元するとほぼ前平式1個体になる。

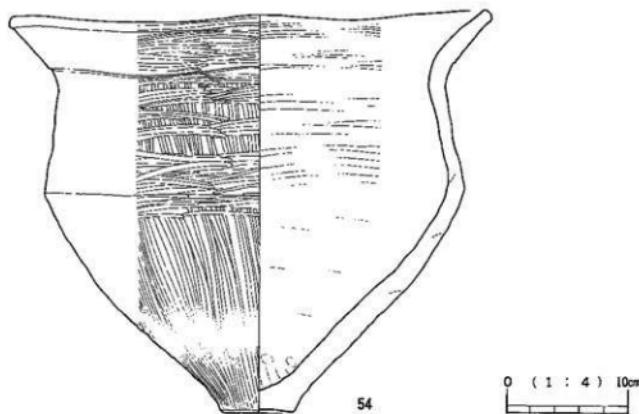
土器55～59

前平式と考えられ、一つの同一個体に復元できる。凶化したもの以外にも細かい破片が多量に出土しており、出土地点はおもに上器片集中部1に偏っている。特徴としては、1～3cm程度の細かい破片が多く、剥離片も多い点が挙げられる。

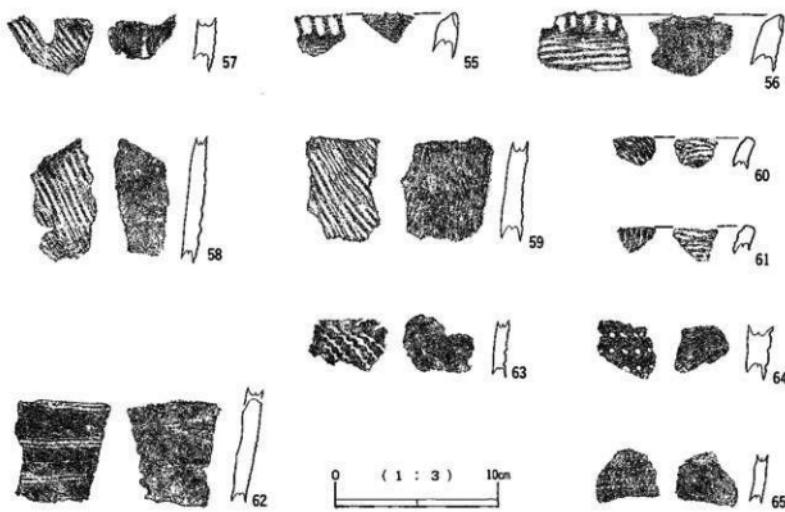
胎土はやや粗く、少量の1mm以下の混和材を含む。混和材には長石・石英・黒色砂粒に、極少量の雲母が見られる。色調は内外面が10YR8/4浅黄褐色、断面が10YR3/1黒褐色である。焼成はわずかに軟質である。器壁はおもに10～13mm程度と厚い。

口縁部は、口唇部外面に縦位の刻目が施される。刻目から下には横方向の貝殻条痕が施される。内面は口唇部が内側に傾いて面を成し、浅い条痕もしくはナデで調整される。口唇部直下の内面は下から上へのケズリが施される。

胴部は、外面に斜め方向の貝殻条痕を施して、内面を下から上へのケズリで調整する。



第43図 西区 土坑1 埋設土器



第44図 第VII層 出土土器

土器60・61

内面に横方向の撚糸文、外面に斜めもしくは縱方向の撚糸文を施す。外面の撚糸文は浅く、施文後にナデを施したと考えられる。口唇部はナデを施して、やや不明瞭ながらも面をもっている。

胎土はやや粗く、1mm以下の石英・長石・黒色砂粒・赤褐色砂粒が見られる。色調は内外面が7.5YR6/2灰褐色、断面が2.5Y5/1黄灰色である。該当する遺物(註記)番号は土器60が確認調査57、土器61が56で、本調査においても類似する253が出土している。

土器62

三代寺式と考えられる。外面に1.5mm幅の二条の沈線が平行して巡り、1.6~1.9cm間隔で4帯が並行する。内面には横の粗いケズリが右から左へと施される。胎土はやや粗く、2mm以下の長石・石英・黒色砂粒を多量に含み、極少量の赤褐色砂粒が見られる。色調は外面が2.5Y7/4浅黄色、内面が10YR6/4に近い黄橙色、断面が10YR4/1褐色である。該当する遺物(註記)番号は161である。

土器63

下剝峰式と考えられるが詳細は不明である。外面は斜めの貝殻腹縁文が施される。内面は左上への斜めのケズリ後、斜め方向のミガキを行なう。胎土はやや粗く、多量に1mm以下の長石・石英・雲母・赤褐色砂粒を含む。とくに長石が多い。色調は外面が5YR6/6橙色、内面・断面が7.5YR4/1褐色である。該当する遺物(註記)番号は178である。

土器64

外面には列点文が等間隔に横位に並行して施される。列点文は5×3mmの楕円形で長軸が斜めに傾く、原体が同じものと考えられる。胎土はやや粗く、1mm以下の黒色砂粒・石英・長石が含まれる。色調は内外面が2.5Y7/3浅黄色、断面が5Y3/1オリーブ黒色を呈する。

第3節 石器 (66~76)

石鎌3点、打製石斧3点、二次加工剥片1点、磨石2点、軽石製品2点が出土した³。剥片などは見られず、製品と製品から取り出した二次加工剥片が出土している。

出土位置は、層位的には第III層に由来するものと考えられ、平面的には東区-2区と西区-1区に集まる。東区-2区には打製石斧が多く見られる。出土地点の差は時期差を反映していると考えられる。石器の詳細については表に述べている。

石鎌66~68

大型の石鎌66と小型の石鎌67・68に分けられる。両者の重量差は約3倍になる。形態も抉入部・脚部に違いが見られる。石鎌68には主剝離面が両面に見られる。

打製石斧69~72

基部の形状で二つに分けられる。打製石斧71・72は側刃に深い抉りをもつが、打製石斧69はもっていない。70は打製石斧より取り出した二次加工剥片と考えられる。

磨石73・74

上下の平坦面に擦痕が見られる。磨石74には側刃に敲打痕が見られる。

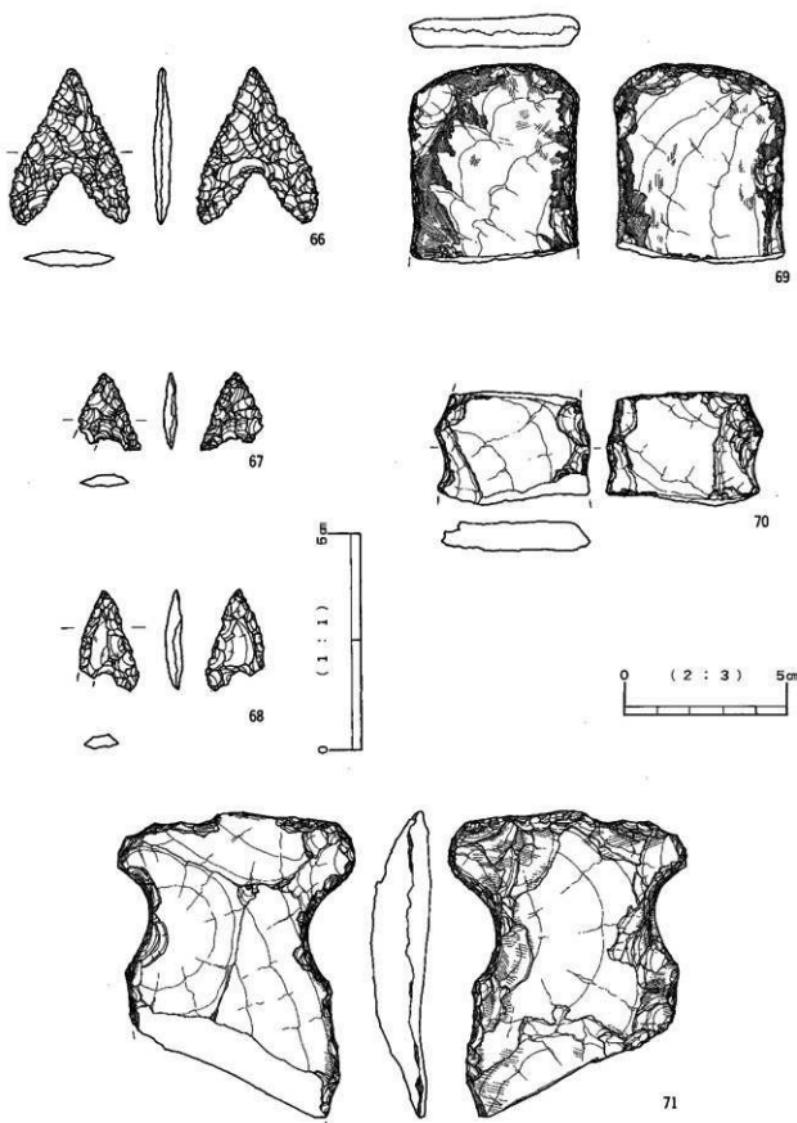
軽石製品75・76

土坑3より軽石5点が1ヶ所に集まって出土したもので、法量が類似している。そのうち遺存状態の良い2点を図化した。磨石に似た形状である。

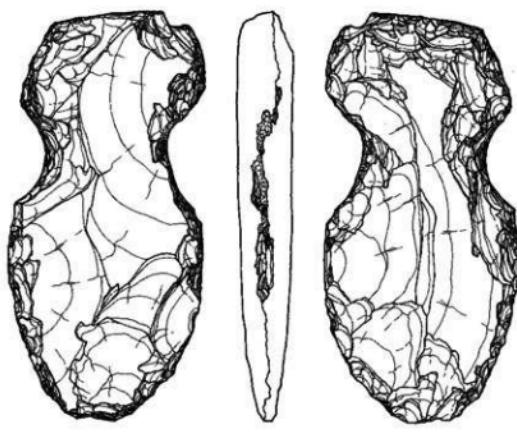
押団 番号	遺物番号	出土位置		種類	器種	石材	法量(cm、g)			
		地點	層位				最大長	最大幅	最大厚	重量
66	確認332	1トレンチ	確認V層	剥片石器	石鎌	黒曜石 (腰岳産)	3.2	2.5	0.3	1.75
67	237	西-1区	Aha下黑色土	剥片石器	石鎌	黒曜石 (三船壳ヶ水産)	1.6	1.25	0.25	0.34
68	188	—	—	剥片石器	石鎌	綠色チャート	2.1	1.25	0.3	0.52
69	22	東-2区	クロボク	礫石器	打製石斧	頁岩	6.2	5.2	1.0	48.20
70	—	東-2区	—	礫石器	打製石斧	頁岩	3.5	4.8	0.9	24.1
71	確認43	2トレンチ	確認II層	礫石器	打製石斧	頁岩	9.5	7.4	1.7	105.2
72	33	東-2区	クロボク	礫石器	二次加工剥片	頁岩	12.7	6.0	1.7	165.5
73	42	西区	溝1	礫石器	磨石	砂岩	8.7	7.0	2.0	183.7
74	246	西-1区	Aha下黑色土	礫石器	磨石	砂岩	10.3	6.7	4.23	372
75	—	西-2区	土坑3	石製品	—	軽石	—	—	—	—
76	—	西-2区	土坑3	石製品	—	軽石	—	—	—	—

第11表 石器観察表

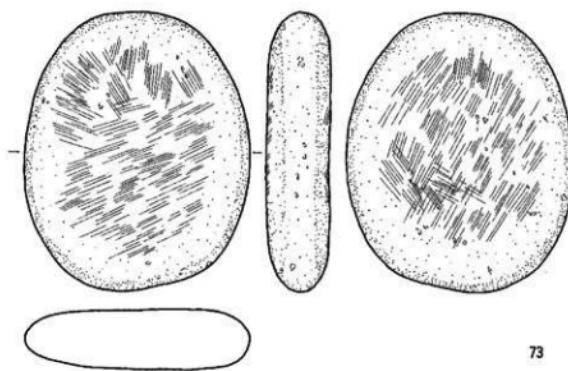
- 1 固化時にはハケメと認識したが、繊維状のナデ痕跡の可能性を考えられる。
- 2 取上げに際して十分に注意を払ったが、風化の影響のため多数の細片となった。そのため石膏復元に際しては、出土時よりも残存状況が悪い。
- 3 石器の器種・石材鑑定は和田るみ子氏にご助言いただいた。



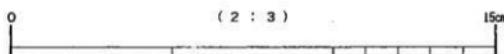
第45図 石器 1



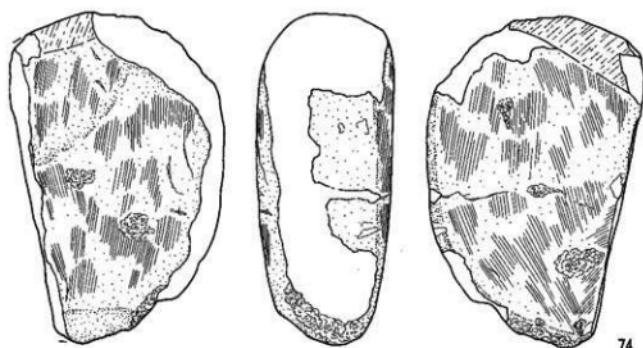
72



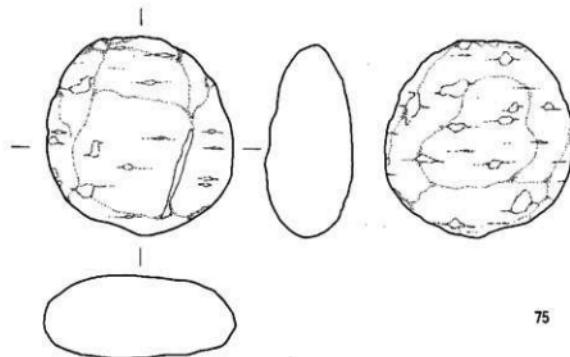
73



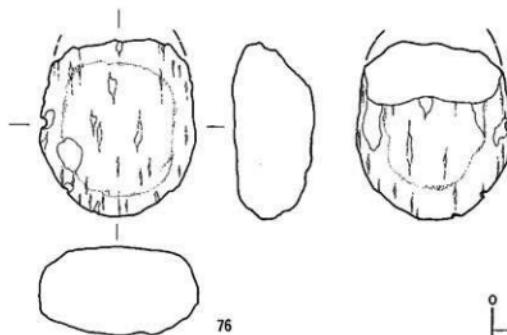
第46図 石器2



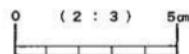
74



75



76



第47図 石器3

第VII章 まとめにかえて

報告に際して十分な検討が行えなかったため、調査者としての見解を述べてまとめにかえる。

1. 土層

各層の特徴・年代観などは町内における従来の成果とほぼ同様であるが、第III層のみは異なる。第III層は、従来、御池降下火山灰層に比定されてきたが、今回、古墳時代の竪穴住居に流れ込んでいることが確認されたことにより、年代観に疑問が生じることとなった。

さらに、この層は単層として扱ってきた層であるが、今回の調査では層上位に古墳時代の遺物、下位に縄文時代晚期の遺物が出土することが確認されたことから、層の成立には複数の火山灰の影響が考えられる。今後、分析と検討が必要である¹。

2. 自然痕跡

調査地内において、同一方向に倒れた3つの風倒木痕が検出され、検出状況と倒木方向から志布志湾から吹き込んだ強風などによって、倒木した可能性が考えられる²。また、風倒木痕は、ほぼ同規模で等間隔に並んでおり、横転した土層からは時差がないと判断できた。そのため同時期に人為的な影響のもと生育した可能性が考えられる。

また、アカホヤ降下火山灰層下より亀裂などが検出され、地震などの痕跡と思われる。時期は、アカホヤ降下火山灰層で痕跡が途絶えていることから、それ以前と考えられる。アカホヤ降下火山灰の噴出時に起こった地震などの影響により発生した可能性が考えられる。

3. 検出面1（第V層上面）

おもに古墳時代と縄文時代晚期の土器が出土するが、一部では弥生土器も見られる。出土分布が両者で異なり、前者はおもに西区の1・2区に中心があり、後者は東区に広がる。

遺構個別の時期は、一部を除いてできなかったが、遺物分布に偏りがあることから、遺構も同様に分布傾向を示すと考えられる。

古墳時代

出土した土器は、「成川式」の中でも東原式³を中心にしており、遺構の時期もこの時期にあると考えられる。

遺構には、竪穴住居や掘立柱建物などが見られることから、当地点は集落域の中にあたると考えられる。一方で、竪穴住居に隣接して溝が築かれており、当時の集落内部の状況を考えるうえで貴重な資料と考えられる。溝の機能としては、湧水点から導水溝などや雨水の排水路などが考えられるが、詳細は不明である。

また、竪穴状土坑1は遺物もなく時期が不明であるが、弥生時代のベット状遺構を有した竪穴住居の可能性も考えられる。

縄文時代晚期

歪な掘り方の柱穴を多数検出したが、明確な配列は確認できなかった。しかし、不規則ながら列状に並ぶ箇所も見られたことから、何らかの施設が構築されていた可能性が考えられる。

一方で、浅鉢が埋設された土坑が検出されており、墓坑の可能性が存在する。これらのことから当調査地が集落域もしくはそれに準ずる範囲であったと考えられる。

4. 検出面2（第X層上面）

縄文時代早期

おもに前平式が出土したが、数点の押型文・塞ノ神式などの碎片も出土した。検出された遺構には、径の小さな柱穴が多く見られ、一部においては円形に巡っている。この円形柱列には掘り方が伴わなかつたが、包含層中に浅い掘り方が存在していた可能性も考えられるが、今回の調査中には、そのような痕跡は検出できなかった。この柱列が何らかの施設もしくは住居にあたる可能性も考えられ、今後の検討が必要である⁴。

-
- 1 平成15年度3月刊行の『浜場遺跡、下堀遺跡』において、テフラ分析を行なっている。
 - 2 現在でも夏から秋にかけての台風襲来時は、志布志湾から当調査区に風が吹いており、倒木方向と一致している。
 - 3 中村直子 1987『成川式土器再考』による。
 - 4 平成15年度3月に報告書刊行の下堀遺跡においても、不規則な円形柱列が確認されている。

【参考文献】

- 原口泉・水山修一・日隈正守・松尾千歳・皆村武一 1999 『鹿児島県の歴史』県史46 山川出版社
有明町郷土史編さん委員会編 1980 『有明町誌』 有明町
東徹志・中水忍・出口順一郎 2003 『黒島遺跡（第1次・第2次）、牧原遺跡、牧原A遺跡、大迫遺跡、飯野A遺跡、本村遺跡』有明町埋蔵文化財発掘調査報告書（3） 有明町教育委員会
中村直子 1987『成川式土器再考』『鹿大考古』第6号 鹿児島大学法文学部考古学研究室
山崎純男・島津義昭 1994 『九州の土器』『縄文文化の研究』4 雄山閣出版株式会社
藤尾慎一郎 1993 『南九州の突帯文土器』『鹿児島考古』第27号 鹿児島考古学会
堂込秀人 1997 『南九州縄文晚期土器の再検討—入佐式と黒川式の細分—』『鹿児島考古』第31号 鹿児島考古学会
新東晃一 1989 『九州貝殻文円筒土器様式』『縄文土器大観』1 小学館
新東晃一 1989 『塞ノ神・平祐式土器様式』『縄文土器大観』1 小学館
南九州縄文研究会 2002 『南九州縄文集成1 南九州貝殻文系土器』I～鹿児島県～
九州縄文研究会・宮崎県考古学会 2003 『九州縄文時代の集石遺構とが穴』第13回 九州縄文研究会 宮崎大会 資料集
八木澤一郎 1992 『鹿児島県下の縄文期集石I』『南九州縄文通信』No.6 南九州縄文研究会
八木澤一郎 1994 『南九州の集石遺構』『南九州縄文通信』No.8 南九州縄文研究会

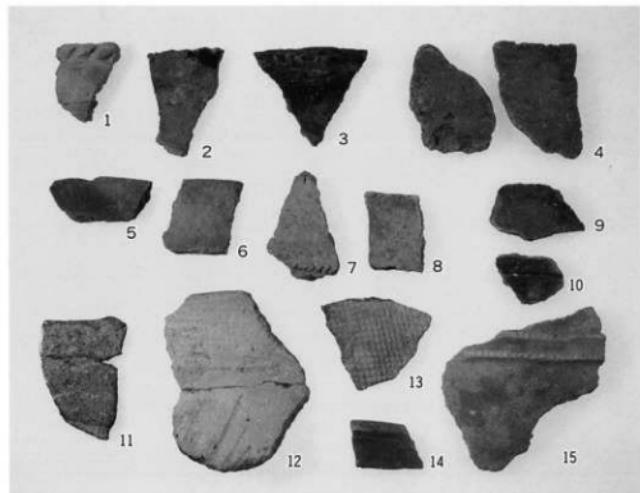
第VIII章 自然科学分析

第1節 自然科学分析の概要

上苑遺跡では古墳時代・縄文時代晩期の遺物包含層が存在する。発掘調査においては、前者で用水路もしくは排水路と考えられる溝が検出され、後者では土掘り具が出土している。これらのことから土木行為が行なわれていたと考えられ、当遺跡が菱田川に隣接した河岸段丘上にあることなどを加えると何らかの耕作が行なわれていた可能性が考えられた。現在でも河川流域には小規模ながら水田が見られる。以上のことから当遺跡の古環境を考えるうえで、プラント・オバール分析が重要と考え、自然科学分析を行なった。

試料には土器胎土を用いる。選定した試料は上苑遺跡の4点を中心にして、比較試料として町内の同時代の各遺跡から6点、堂込秀人氏・東 和幸氏（鹿児島県立埋蔵文化財センター）の協力を得て県内の同時代遺跡から5点を抽出した。なお、抽出にあたっては堂込氏にご指導を賜った。

後節に分析報告を掲載する。



図版1
分析試料

第2節 土器胎土の植物珪酸体分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

上苑遺跡の発掘調査では、古墳時代・縄文時代晩期の遺物包含層が確認されたが、特に古墳時代の用水路もしくは排水路と考えられる溝や、縄文時代晩期の土掘り具などが注目された。また、本遺跡の西側崖下には菱田川が流れしており、河川流域に現在でも小規模ながら水田が見られる。これらのことから、縄文時代晩期以降の各時期に水田稲作や畑作など何らかの形で耕作を行っていた可能性が指摘された。

栽培植物の痕跡の一つに植物珪酸体（プラント・オバール）があるが、耕作地の土壤や炉跡の灰だけでなく、土器の胎土中にも残されることがある。植物珪酸体はガラスに近い性質を持つため、素地や混和材などの材料土壤に含まれていた場合には、被熱した後も胎土中にはほとんど残るとともに、その産状が材料土壤の由来を反映する（辻本・伊藤、1995）。また、熊本県域では、縄文時代初頭の土器片から栽培植物のイネ属に由来する植物珪酸体が検出されている（藤原、1981）。鹿児島県内でも、縄文時代早期・弥生時代、古墳時代の土器胎土からは周辺に生育したと思われる、イネ科に由来する植物珪酸体が検出されている（パリノ・サーヴェイ株式会社、未公表）。

今回、上苑遺跡より出土した土器を中心にして土器胎土の植物珪酸体分析を行い、栽培植物や古植生に関する情報の収集を試みた。なお、比較用の土器胎土試料として町内の同時代の遺跡から6点、県内の同時代遺跡から5点が抽出された。

1. 試料

分析試料を表1に示す。

上苑遺跡の土器胎土は、古墳時代2点と縄文時代晩期2点である。有明町内の試料では、仕明遺跡が古墳時代2点、下堀遺跡が縄文時代晩期2点、牧原遺跡が縄文時代晩期2点である。また鹿児島県内の試料は、大坪遺跡が縄文時代晩期2点、榎木原III遺跡が縄文時代晩期2点と弥生時代前期末1点である。

2. 分析方法

土器胎土試料をアルミナ製乳鉢で粉碎し、過酸化水素水・塩酸処理、沈定法、超音波処理(70W、250KHz、

1分間)、重液分離法(ボリ

試料	出土遺跡	遺物番号など	考古年代	形 式	器 形	備 考
試料1	有明町 上苑遺跡	SH 1.15	古墳時代	成形式	壺	菱田川下流の台地 縁辺部
試料2	有明町 上苑遺跡	W.SD 1.-18	古墳時代	東九州系	壺	菱田川下流の台地 縁辺部
試料3	有明町 上苑遺跡	1T.III.71	縄文時代 晩期	突帯文	鉢	菱田川下流の台地 縁辺部
試料4	有明町 上苑遺跡	土坑1 埋納土器	縄文時代 晩期		鉢	菱田川下流の台地 縁辺部
試料5	有明町 仕明遺跡	SH2.17	古墳時代	成形式	壺	上苑遺跡対岸の台地 縁辺部
試料6	有明町 仕明遺跡	SH6.埋土 1241	古墳時代 (変遷など)	成形式	壺	上苑遺跡対岸の台地 縁辺部
試料7	有明町 下堀遺跡	確認4	縄文時代 晩期	突帯文	壺	田原川流域の台地 縁辺部
試料8	有明町 下堀遺跡	9 T-信	縄文時代 晩期	突帯文	甕	田原川流域の台地 縁辺部
試料9	有明町 牧原遺跡	9.III.105 報No.257	縄文時代 晩期	黒川式	壺	菱田川上流の台地上
試料10	有明町 牧原遺跡	10.III.126 報No.226	縄文時代 晩期	入佐式	壺	菱田川上流の台地上
試料11	出水市 大坪遺跡		縄文時代 晩期	黒川式 (古段階)		平野部
試料12	出水市 大坪遺跡		縄文時代 晩期	入佐式 (新段階)		平野部
試料13	鹿屋市 榎木原III遺跡	EKB II. D4.330	縄文時代 晩期	黒川式	縄編压痕 土器	台地上
試料14	鹿屋市 榎木原III遺跡	EKB.C2.76. 6922	縄文時代 晩期	黒川式	精製土器	台地上
試料15	鹿屋市 榎木原III遺跡	EKB.B2. 2987	弥生時代 前期末		壺	台地上

第12表 分析試料

タンゲステン酸ナトリウム、比重2.5)の順に物理化学処理を行い、植物珪酸体を分離濃集する。検鏡しやすい濃度に希釈し、カバーガラス上に滴下・乾燥させる。乾燥後、ブリュウラックスで封入してプレパラートを作製する。

400倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部(葉身と葉鞘)の葉部短細胞に由来した植物珪酸体(以下、短細胞珪酸体と呼ぶ)および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体(以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ)、およびこれらを含む珪化組織片を近藤・佐瀬(1986)の分類に基づいて同定し、計数する。

結果は、検出された種類とその個数の一覧表で示す。また、検出された植物珪酸体の出現傾向から古植生や農耕について検討するために、植物珪酸体群集の産状を図化した。各種類の出現率は、短細胞珪酸体と機動細胞珪酸体の珪酸体毎に、それぞれの総数を基準とする百分率で求めた。

3. 結果

結果を表2、図1に示す。

各試料からは植物珪酸体が検出されるものの、保存状態が悪く、表面に多数の小孔(溶食痕)が認められる。

いずれの試料からも、イネ属などの栽培植物に由来する植物珪酸体は全く認められない。

上苑遺跡の胎土試料のうち、古墳時代の2点(試料番号1、2)では検出個数に差があるものの、いずれもタケアキ科とウシクサ族の産出が目立ち、ヨシ属やイチゴツナギ科などが稀に認められる。なお、これまでの調査により、有明町内の仕明遺跡、東田遺跡、長田遺跡、中尾遺跡で出土した古墳時代とされる土器の胎土からも、同様な種類の植物珪酸体が検出されている(パリノ・サーヴェイ株式会社、未公表)。縄文時代晩期の試料番号3は、ウシクサ族などがわずかに認められるに過ぎない。試料番号4では検出個数も多く、タケアキ科の産出が目立ち、ヨシ属、ススキ属を含むウシクサ族、イチゴツナギ科が認められる。

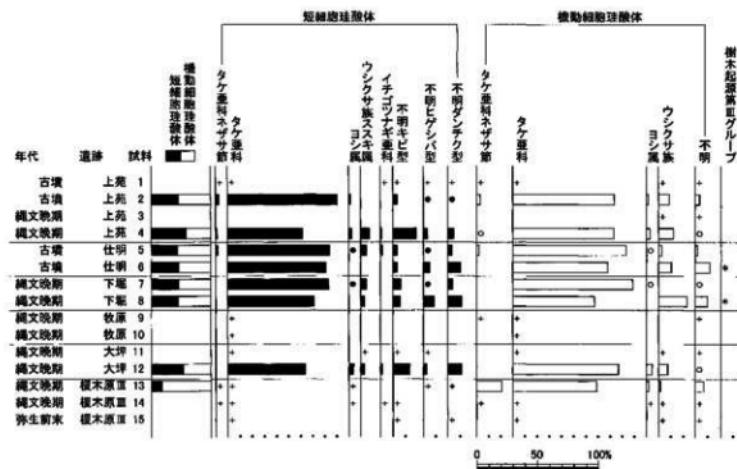
第13表 土器胎土試料の植物珪酸体分析結果

種類	試料	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	
	遺跡	年代	上苑	古墳	繩文	繩文	古墳	古墳	繩文	繩文	牧原	繩文	繩文	大坪	繩文	繩文	
イネ科葉部短細胞珪酸体																	
タケアキネササ節		2	3	—	2	2	—	—	—	—	—	—	—	4	1	—	
タケアキ科		14	105	—	93	107	95	116	89	5	28	14	78	18	3	18	
ヨシ属		—	2	—	4	1	—	1	—	—	—	—	5	1	4	—	
ウシクサ族ススキ属		—	—	—	11	6	—	7	4	—	—	4	4	—	—	—	
イチゴツナギ科		1	—	—	2	2	—	—	—	—	—	—	2	—	1	—	
不明キビ型		2	4	—	27	4	4	9	7	—	—	1	16	—	4	8	
不明ヒゲンバ型		2	1	—	5	1	6	1	11	—	—	3	3	5	—	—	
不明ダンチク型		5	1	—	7	4	12	5	14	—	—	14	5	—	4	—	
イネ科葉身機動細胞珪酸体																	
タケアキネササ節		3	4	—	1	3	—	—	1	—	—	—	—	31	4	—	
タケアキ科		2	115	—	88	149	105	158	104	12	12	22	92	102	7	1	
ヨシ属		—	2	—	3	1	—	1	—	—	—	—	5	3	3	—	
ウシクサ族		18	12	1	13	4	14	—	36	—	—	7	8	2	14	15	
不明		12	5	1	1	3	16	1	15	2	—	13	1	10	21	11	
合計																	
イネ科葉部短細胞珪酸体		26	116	0	151	127	117	139	125	5	38	22	122	33	13	30	
イネ科葉身機動細胞珪酸体		35	138	2	106	160	135	160	155	15	12	42	106	148	49	27	
総計		61	254	2	257	287	252	299	280	20	40	64	228	181	62	57	
樹木起源																	
樹木起源 第一群		—	—	—	—	—	—	3	—	2	—	—	—	—	—	—	—

有明町内では、仕明遺跡の古墳時代2点（試料番号5、6）が上苑遺跡の試料番号2と同様な産状である。下堀遺跡と牧原遺跡の縄文時代晚期試料では、検出個数に違いが見られるものの、タケ亜科の産出が目立つ点が共通する。仕明遺跡の試料番号6と下堀遺跡の試料番号8では樹木起源珪酸体第IIIグループ（近藤・ピアスン、1981）がわずかに検出される。第IIIグループは「Y」あるいは「く」の字状の形態を呈する。

鹿児島県内の試料では、大坪遺跡の縄文時代晚期2点と樺木原III遺跡の試料番号13で、タケ亜科の産出が目立つ。樺木原III遺跡の試料番号14はウシクサ族機動細胞珪酸体の産出が目立ち、タケ亜科やヨシ属なども認められる。弥生時代前期末の試料番号15では、タケ亜科やウシクサ族などが認められる。

以上のように、今回の試料には年代や形式、出土遺跡、器形に伴う産状の差異が見られない。また、縄文時代晚期と古墳時代の試料でタケ亜科の産出が目立つ点が共通する。



第48図 土器胎土試料の植物珪酸体群集

出現率は、イネ科葉部短細胞珪酸体、イネ科葉身機動細胞珪酸体の総数を基準として百分率で算出した。なお、○は1%未満、+は100個未満試料で検出された種類を示す。また樹木起源珪酸体の産状を○で示す。

4. 考察

今回調査した上苑遺跡を含む有明町内の遺跡、および鹿児島県内より出土した土器の胎土からは、イネ属などの栽培植物が検出されなかった。前述した土器焼成実験の例を考慮すれば、被熱により胎土内で溶解、消失した可能性は低い。したがって、製作過程で素地に耕作地の土壤や稻藁などの植物体が混入していないと思われる。そのため、今回の結果から上苑遺跡などの周辺での農耕について検討することは難しい。また、植物体の混入を示唆する珪化組織片が見られないため、組織圧痕土器の試料番号13を含めて調査した土器にイネ科植物体が混和材として用いられた可能性も考えにくい。

また植物珪酸体の産状を見る限り、年代や形式、出土遺跡、器形に伴う産状の差異が見られず、材料土壤や製作手法の違いは明確にならない。前述した土器焼成実験の例を考慮すれば、検出された植

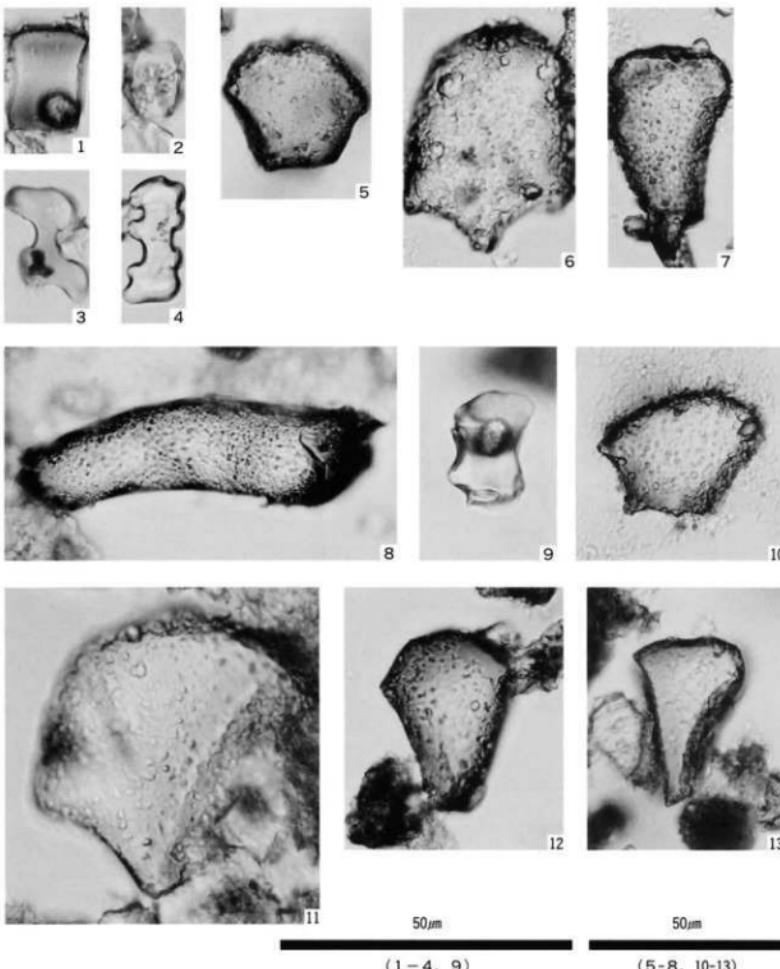
物珪酸体の産状は土器の材料土壤の出来を反映すると考えられる。検出された種類は、いわゆる人里植物であり、集落周辺の開けた場所に生育する。ヨシ属は湿润な場所に生育する種類である。そのため、調査した土器の材料土壤は集落周辺の台地状や縁辺部、平野部など、イネ科植物が生育するような開けた場所や湿润な場所から採取されていたと考えられる。

なお、縄文時代晩期と古墳時代の試料で多産したタケ亜科の植物珪酸体は他のイネ科と比較して風化に強く、また生産量の多い点がこれまでの研究から指摘されており(近藤、1982；杉山・藤原、1986)、他の種類よりも残留しやすいことが知られている。したがって今回のタケ亜科の多産から、一概に材料となった土壤がタケ・ササ類の繁茂する場所から採取されたとは言えない。また、仕明遺跡の試料番号6と下堀遺跡の試料番号8では樹木起源珪酸体第IIIグループがわずかに検出された。九州・沖縄地方では樹木起源珪酸体の第IIIグループが表層あるいは埋没土壤中に特徴的に認められ、その給源としてイスノキ属が想定されている(近藤、1976)。また、九州南部の台地上では霧島御池軽石(約4200年前)以降の土層から、イスノキ属やクスノキ科などを含む照葉樹林に由来する植物珪酸体が認められている(杉山、1999)。そのため、土器胎土に混入したことも十分に考えられる。

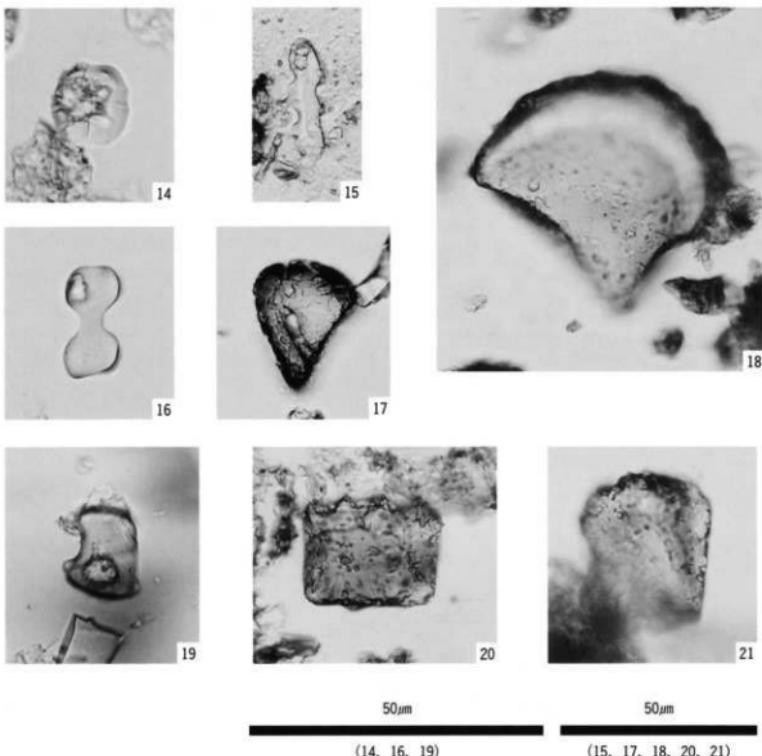
当該期の農耕や古植生については、今後さらに周辺の堆積物についても植物珪酸体の産状を調査するとともに、花粉化石や種実遺体の産状も含めて総合的に検討したい。

引用文献

- 藤原宏志、1981、プラント・オパール分析法の基礎的研究(4)－熊本地方における縄文土器胎土に含まれる
　　プラント・オパールの検出－、考古学と自然科学、14、55-66。
近藤錦三、1976、樹木起源の珪酸体について、ペドロジスト、20、176-189。
近藤錦三、1982、Plant opal分析による黒色腐植層の成因究明に関する研究、昭和56年度科学研究費(一般研究C)研究成果報告書、32p。
近藤錦三・ピアソン 友子、1981、樹木葉のケイ酸体に関する研究(第2報)双子葉被子植物樹木葉の植物ケイ酸体について、帯広畜産大学研究報告、12、217-229。
近藤錦三・佐瀬 隆、1986、植物珪酸体分析、その特性と応用、第四紀研究、25、31-64。
杉山真二、1999、植物珪酸体分析からみた最終氷期以降の九州南部における照葉樹林発達史、第四紀研究、38、
　　109-123。
杉山真二・藤原宏志、1986、機動細胞珪酸体の形態によるタケ亜科植物の同定－古環境推定の基礎資料として－、考古学と自然科学、19、69-84。
辻本崇夫・伊藤良永、1995、市兵衛谷遺跡第II群土器の製作技術について－分析調査結果の解釈から－、綾瀬市埋蔵文化財調査報告4「市兵衛谷遺跡・新道遺跡－綾瀬市における縄文早期遺跡の研究－」、綾瀬市教育委員会、108-125。



1. タケ亜科短細胞珪酸体 (3:上苑遺跡)
 2. ヨシ属短細胞珪酸体 (4:上苑遺跡)
 3. ススキ属短細胞珪酸体 (4:上苑遺跡)
 4. イチゴツナギ亜科短細胞珪酸体 (4:上苑遺跡)
 5. タケ亜科機動細胞珪酸体 (3:上苑遺跡)
 6. ヨシ属機動細胞珪酸体 (4:上苑遺跡)
 7. ウシクサ属機動細胞珪酸体 (4:上苑遺跡)
 8. ウシクサ族機動細胞珪酸体 (8:下堀遺跡)
 9. タケ亜科短細胞珪酸体 (8:下堀遺跡)
 10. タケ亜科機動細胞珪酸体 (9:牧原遺跡)
 11. ヨシ属機動細胞珪酸体 (12:大坪遺跡)
 12. タケ亜科機動細胞珪酸体 (8:下堀遺跡)
 13. ウシクサ族機動細胞珪酸体 (8:下堀遺跡)



14. ヨシ属短細胞珪酸体 (12: 大坪遺跡)
 15. イチゴツナギ亜科短細胞珪酸体 (12: 大坪遺跡)
 16. ススキ属短細胞珪酸体 (12: 大坪遺跡)
 17. ウシクサ族機動細胞珪酸体 (12: 大坪遺跡)
 18. ヨシ属機動細胞珪酸体 (14: 櫻木原III遺跡)
 19. ネザサ節短細胞珪酸体 (13: 櫻木原III遺跡)
 20. ネザサ節機動細胞珪酸体 (13: 櫻木原III遺跡)
 21. ウシクサ族機動細胞珪酸体 (14: 櫻木原III遺跡)



35



36



41



37



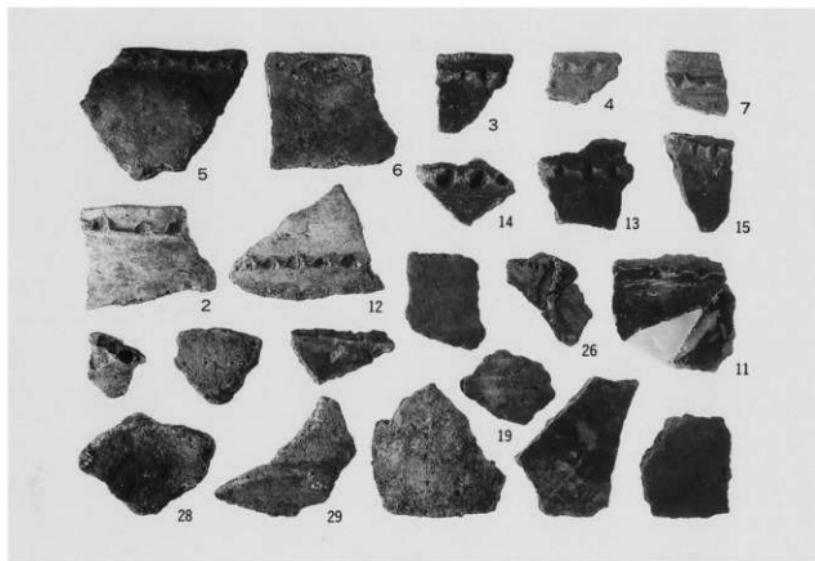
54



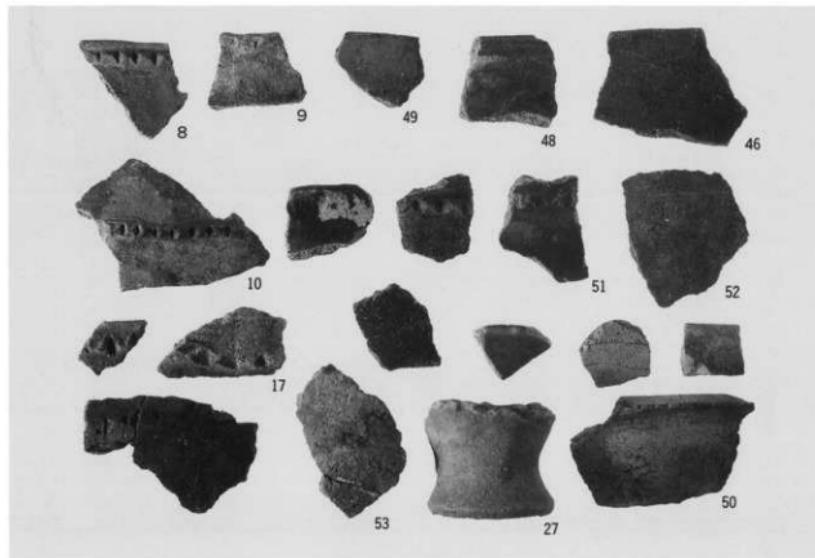
34



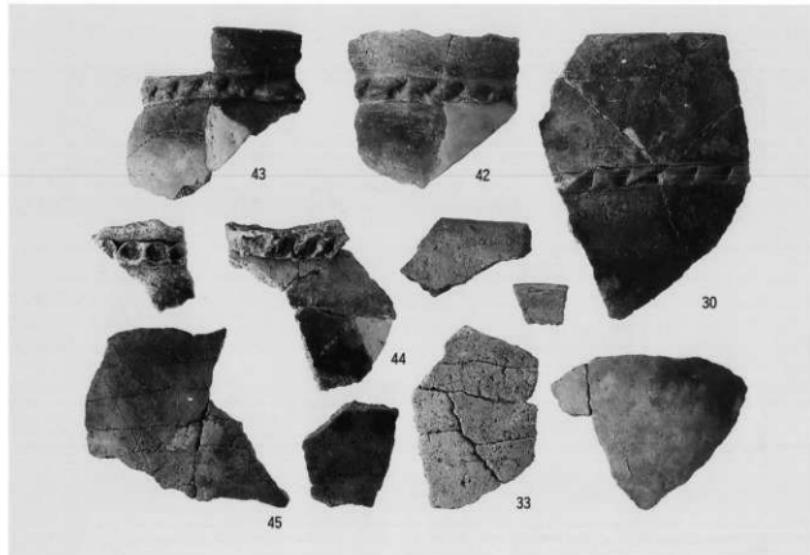
1



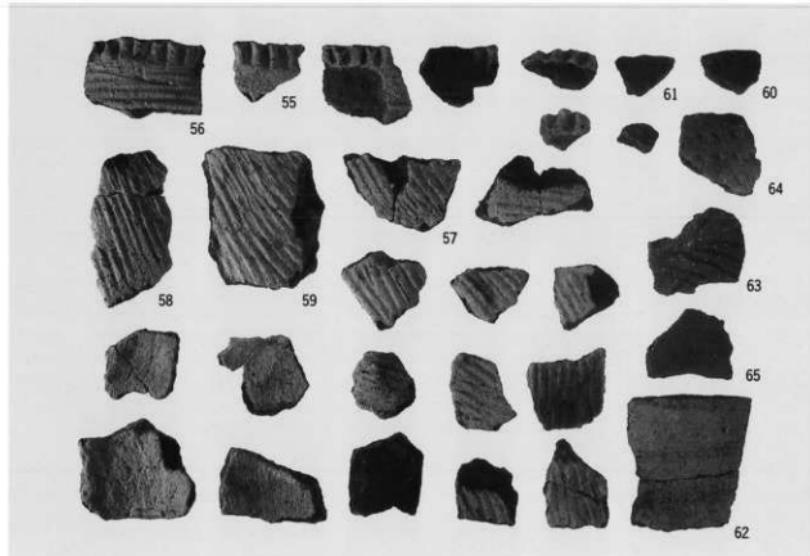
東区 III層出土



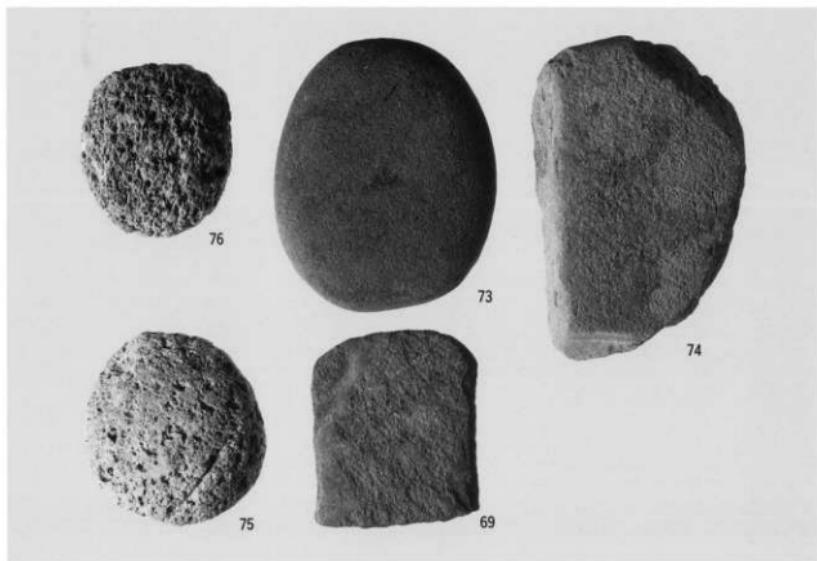
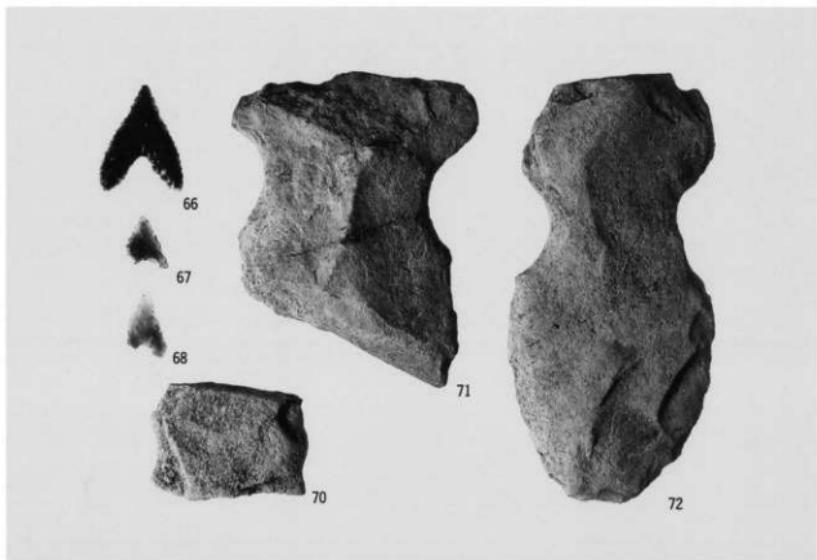
西区 各遺構内出土



西区 III層出土

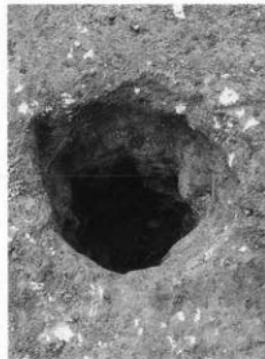


西区 VII・VIII層出土





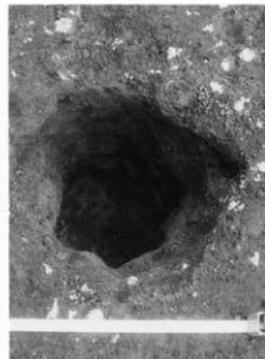
調査区 西端



工具痕（1）



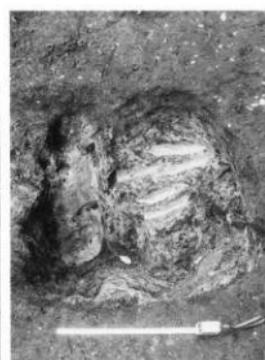
調査区 中央



工具痕（2）



調査区 東端



工具痕（3）



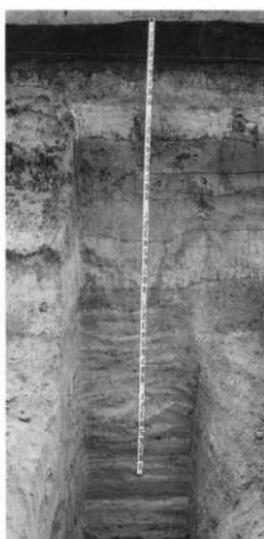
南壁 土層 (I ~ X層)



土層断面 (IX ~ XII層)



南壁 中央 (I ~ VII層)



土層断面 (IX層以下)



北壁 西端 (I ~ IV層)



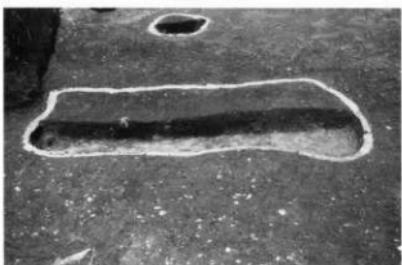
土坑 1 土層断面



土坑 1 完掘



土坑 3



土坑 5



土坑 6 土層断面



土坑 6 完掘



風倒木痕



4区(北東より)



調査区全景



調査区 東半



集石 1 周辺 検出状況



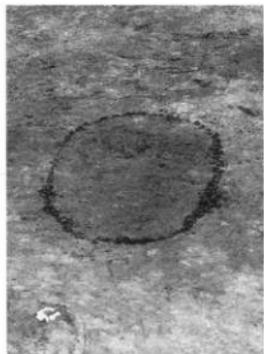
調査区 西半



集石 1 周辺 完掘状況



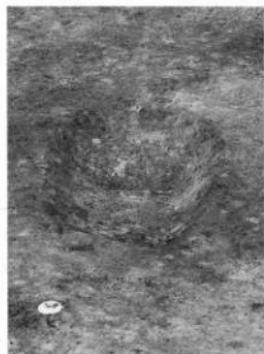
集石 1 検出状況（1）



掘り込み 検出状況



集石 1 検出状況（2）



掘り込み 完掘状況



V層上面 遺物出土状況



V層上面 遺構検出状況



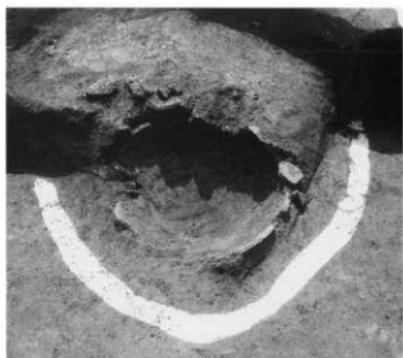
4区 全景



掘立柱建物 2



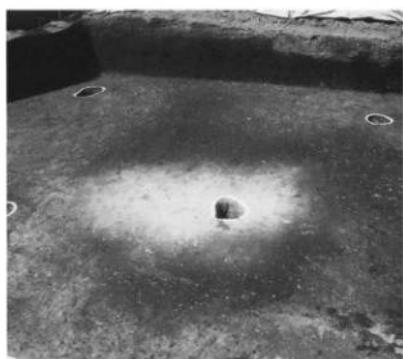
土坑 1 検出状況 (1)



土坑 1 検出状況 (2)



風倒木痕 1



風倒木痕 2



1区 検出状況

溝 1 検出状況



1区 完掘状況

溝 1 遺物出土状況 1

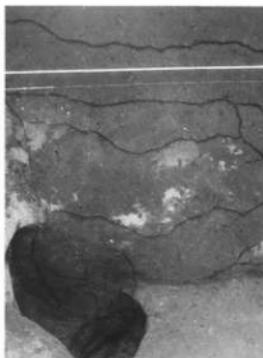


2区 完掘状況

溝 1 遺物出土状況 2



竪穴住居 1 土層



柱穴 土層



床面検出状況 1



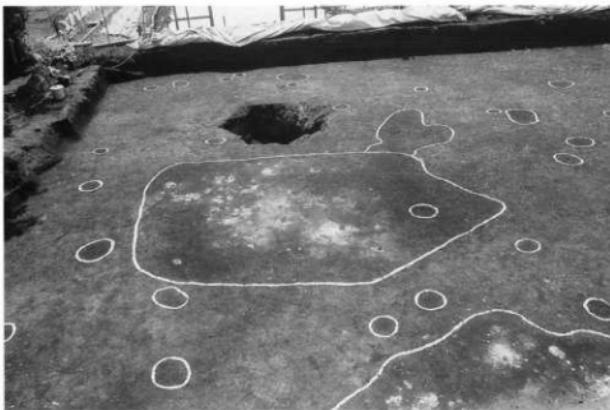
床面検出状況 2



完掘状況



床面検出状況 3



土層 1



土層 2



掘立柱建物 配置 1



掘立柱建物 配置 2



掘立柱建物 3



掘立柱建物 4



掘立柱建物 5



掘立柱建物 6



土坑 2



土坑 3



3区 全景



噴砂痕 平面1



3区 南壁土層



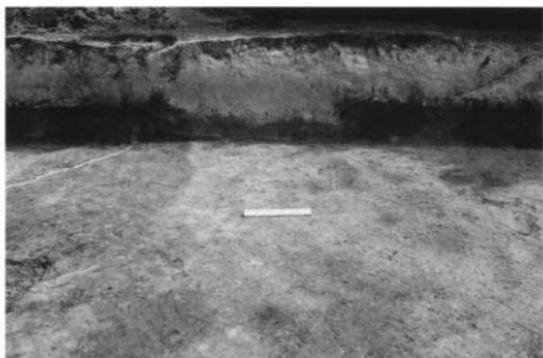
噴砂痕 土層1



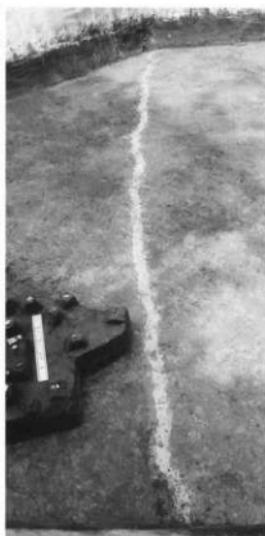
集石2



噴砂痕 土層2



地層変化 平面



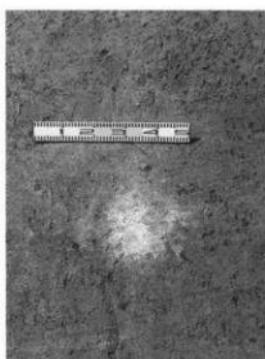
噴砂痕 平面2



地層変化 土層



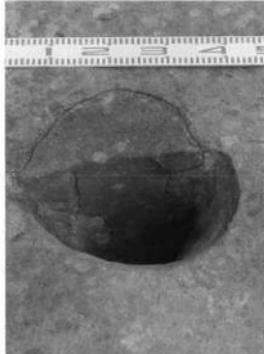
シミ状変化



円形状噴砂痕



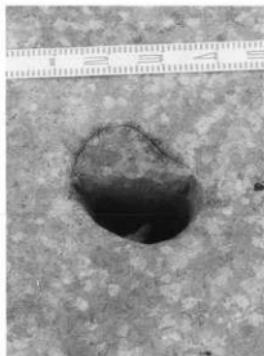
1区 全景(東より)



柱穴 5



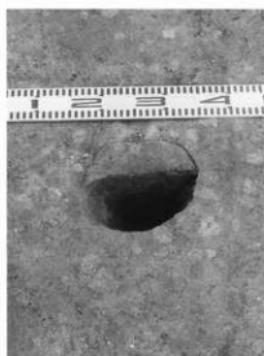
柱穴集中範囲 2



柱穴 9



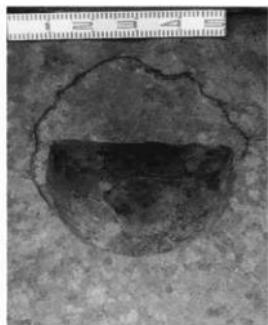
柱穴集中範囲 3



柱穴 10



2区 全景(東より)



柱穴 3



柱列 1・2 検出状況



柱穴 12



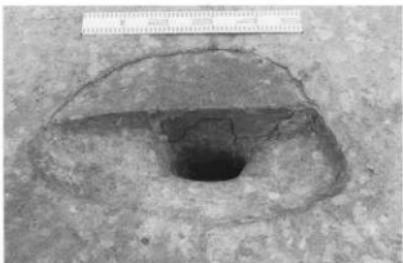
柱列 1・2 完掘状況



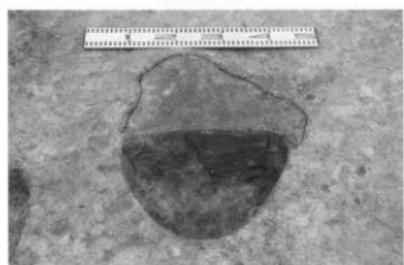
柱穴 13



柱穴 1・2



柱穴 4



柱穴 6



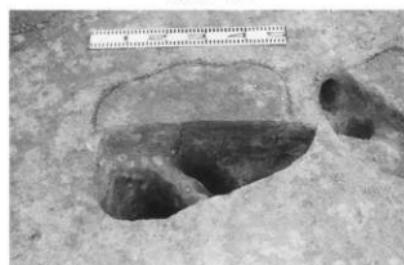
柱穴 15



柱穴 16・17



柱穴 20・19



柱穴 22



土坑 3

図版23 調査地遠景（西より）



あとがき

調査から約2年ようやく刊行に至り、一時の安堵を感じています。しかし、内容については、ただ、ただ、後悔です。

貴重な時間を調査成果の整理・検討に費やしたのではなく、他の事業を優先するのに費やし、報告書の内容は散々たるものとなってしまいました。調査の責任者として、消滅する埋蔵文化財を闇雲に調査・破壊してしまったことに、後悔し、責任を痛感しています。

今後は、今回のことを取り組んで行きたいと思います。

なお、最後になりますが、様々な点でご協力いただいた、県立埋蔵文化財センターの方々や近隣市町村の文化財担当の方々、また、個人的に支えてもらい、応援してくれた方々に、この程度になってしまったことに対する謝罪と、感謝の気持ちでいっぱいです。

ありがとうございました。

編集者

報告書抄録

ふりがな	うえんそんいせき						
書名	上苑遺跡						
副書名	農用地総合整備事業（大隅中央区域）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書						
卷次							
シリーズ名	有明町埋蔵文化財発掘調査報告書						
シリーズ番号	5						
編集者名	東徹志・中水忍						
編集機関	有明町教育委員会						
所在地	〒899-7492 鹿児島県曾於郡有明町野井倉1756番地 TEL 0994-74-1111						
発行年月日	2004年3月15日						

遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
上苑遺跡	鹿児島県曾於郡有明町野井倉字上苑	46467	69-104	31°28'10"	131°03'07"	[確認] H12.1.17~2.16 [全面] 前:H13.4.23~6.13 後:H13.8.20~10.20 [整理作業] H14.4.1~H15.3.15 [報告書作成] H15.4.1~H16.3.15	[確認] 約230m ² [全面] 約2100m ²	農道整備事業
種別		主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
包含層	縄文時代早期	集石、柱穴		前平式ほか		土器胎土の植物珪酸体分析		
集落跡	縄文時代晩期 古墳時代	土坑、柱穴 竪穴住居、竪穴状土坑、掘立柱建物、土坑、柱穴		成川式				

有明町埋蔵文化財発掘調査報告書（5）
農用地総合整備事業（大隅中央区域）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

上苑遺跡

発行日 2004年3月15日

発行 鹿児島県曾於郡有明町教育委員会

〒899-7492 鹿児島県曾於郡有明町野井倉1756番地

TEL 0994-74-1111

印刷所 (株)トライ社

〒892-0834 鹿児島県鹿児島市南林寺町12-6

TEL 099-226-0815
